

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

**Insights into the
Socio-economy of
The Netherlands, Belgium
and France**



Global Leaders Program 2019

FACULTY OF ECONOMICS

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

**Insights into the
Socio-economy of
The Netherlands, Belgium, and France**

Reviewed and edited by
Milen Martchev and Toki Masuda

Global Leaders Program 2019

FACULTY OF ECONOMICS

目次 (Contents)

謝辞 (ACKNOWLEDGEMENTS)

序文 (FOREWORD)

Chapter 1 INTRODUCTION

1. 参加者プロフィール 1
2. ゼミの様子 9

Chapter 2 RESEARCH & PRESENTATIONS

1. Daisuke Nakayoshi 12
Transportation Policy in Europe
2. Shungo Nishikawa 20
Comparison of the Rocket Industry of the EU with Japan and the US
3. Erika Okada 27
A Comparison of the Agricultural Policies
in the EU (formerly known as the EEC) and Japan
4. Rise Komura 39
The History of ESG Investment and What Japan can Do to Increase It
5. Ryo Takizawa 47
Initiatives for the Fourth Industrial Revolution in Japan and Germany
6. Asahi Kurita 56
Renewable Energy Policy in Germany, Comparing with Japan
7. Yukiha Oka 68
Why Do Cities Choose “Art” for Regional Activation?
8. Haruki Misu 75
Future Prospects for the Public Healthcare Insurance
9. Banri Endo 82
What Is the Best Way to Live Together with Immigrants?
10. Taishi Ogawa 95
The Economic Situation and Political Strategies Regarding Ethnic Minorities in the EU
11. Haruka Kanamaru 102
International Labor Mobility and Immigration in France and Japan

Chapter 3 OUR VISITS

- January 23rd to 25th 2020 in The Netherlands** 115
- The Netherlands, Amsterdam
 - Utrecht University

- Utrecht, the Dom tower	
January 26th to 28th in Belgium	125
- Belgium, Brussels, Parliamentarium	
- Leuven	
- KU Leuven, Irish College	
- TOYOTA Motor Europe (TME)	
January 28th to February 2nd in France	135
- France, Paris	
- Bank of Mizuho	
- Paris University	
- Grand Mosque of Paris	
- Moët et Chandon	
- Dinner party with Josuikai	

Chapter 4 Personal Reflections

1. 遠藤万里	150
「ヨーロッパを視る切り口」	
2. 三須春輝	153
「初めてのヨーロッパ訪問を終えて」	
3. 岡 幸葉	155
「11 日間を振り返って」	
4. 仲吉大輔	157
「自分を知ること」	
5. 西川俊吾	160
「宇宙産業とイノベーションの未来」	
6. 岡田絵里佳	162
「5 年前とは違う立場と視点で過ごした 11 日間」	
7. 栗田 旭	165
「研修を振り返って思ったこと」	
8. 小村来世	169
「日本を客観視する」	
9. 小川大志	172
「課題と向き合う」	
10. 瀧澤 亮	175
「EU 研修を終えて考えたこと」	
11. 金丸晴香	178
「懐かしくも新鮮な 11 日間」	

欧州短期海外調査報告書の刊行に寄せて

一橋大学経済学研究科長・経済学部長

岡田羊祐

一橋大学経済学部では、日本語・英語の両方で優れたコミュニケーション能力を持ち、経済学の専門知識と分析スキルに基づいて活躍できるリーダーの育成を目指す「グローバル・リーダーズ・プログラム」(GLP)を2013年度から実施しております。このGLPが目指すのは、内外の状況と課題を正確に理解し、その解決方法を探るため幅広い教養と深い専門性がブレンドされた能力を併せ持つ学生の養成です。具体的な解決策を現実の経済社会のなかで実現させるためには、強い動機づけを持ち、意見の異なる人たちのなかで粘り強く合意形成を図っていく人間力と高度な専門知識が必要でしょう。そのような意欲と能力を持つ学生を世界に送り出すことをGLPは目指しています。

欧州短期海外調査はGLPの一環として行われ、今年度の旅行は2020年1月23日から2月2日にわたってオランダ、ベルギー、フランスで実施されました。今年の短期海外調査にはGLP選抜学生6名を含む11名が参加しています。調査に参加した学生は、増田都希先生の担当される「基礎ゼミナールA」(春夏学期：4月～7月)および「基礎ゼミナールB」(秋冬学期：9月～1月)を履修しています。学生たちは、これら基礎ゼミで事前準備を周到に行ったうえで、現地でのプレゼンテーションやディスカッションに臨んでいます。こうした周到な事前準備と現地調査で得た成果を和文と英文でまとめたものが本調査報告書です。したがって、この調査報告書は「短期」と銘打ってはいますが、教員と学生の1年にわたる濃密な共同作業が生んだ成果といえるものです。多彩なテーマにわたり熱心に学生をご指導いただきました増田先生、また英文校閲やプレゼンテーションの指導をしてくださったミレン・マルチェフ先生には、この場を借りて厚く御礼申し上げたいと思います。

海外との様々な繋がりを要する調査旅行を大学の講義の一環として実施するためには、多くの方々のご協力とご支援が不可欠です。貴重な学生交流の機会を与えて下さったユトレヒト大学、ルーヴァン・カトリック大学、パリ大学の皆さん、ご多忙のなか学生の訪問を温かく迎えて下さった欧州連合博物館や現地日系企業(欧州トヨタ、みずほ銀行、モエ・エ・シャンドン)、如水会パリ支部の皆さん、今回の訪問大学・企業との交渉の糸口を開いてくださった岡室博之先生、学生への支援を惜しまれなかった大月康弘先生、犬飼裕子さん、平井美千子さん、この他、欧州短期海外調査を実現するためにお力添えを頂いたすべての方々に心から感謝を申し上げます。最後になりますが、学生の皆さんには、この調査で得られた知識と経験がさらなるグローバルな舞台での活躍へと繋がるように強く期待しております。

Foreword and Acknowledgements

Yosuke Okada

Dean, Graduate School of Economics & Faculty of Economics

Since 2013, the Faculty of Economics at Hitotsubashi University has implemented the Global Leaders Program (GLP) which aims to cultivate global leaders able to combine expert knowledge in economics with advanced communication skills in English, as well as in Japanese. This program has thus far fostered numerous leaders who understand complicated situations and explore appropriate solutions, which requires an ability to blend broad knowledge and deep expertise. In order to realize a specific real-world solution, one needs a strong motivation and a tenacious ability to reach consensuses among people with very different languages, institutions, laws, and opinions. It is an important mission of our GLP program to develop skilled professionals who are capable of assuming roles of leadership in helping reach the kind of collective decisions that facilitate a better international economy and society.

Every year, a short-term international field study in selected European countries is conducted as part of the GLP, and this report covers the contents of our student's recent trip to the Netherlands, Belgium and France from January 23 to February 2, 2020, under the supervision of Professor Toki Masuda. The group of participants consisted of eleven undergraduates, including six GLP students. All of them took the classes offered by Professor Toki Masuda: "Special Seminar A" (Spring-Summer) and "Special Seminar B" (Autumn-Winter). These classes are designed to broaden the student's knowledges of a variety of problems that the EU is nowadays trying to cope with, and to prepare them for discussions and presentations at European universities. Granted, this report is nominally a product of their "short-term" field study, but it represents everyone's year-round hard work. We are most grateful for Professor Masuda and Professor Milen Martchev for their invaluable guidance and support for the students' presentations and drafts.

We would like to express our sincere gratitude to the people and institutions who gave us various kinds of support, which was essential in carrying out this expedition to Europe: Utrecht University, KU Leuven, the University of Paris, Parliamentarium, Toyota Motor Europe, Mizuho Bank Ltd., Moët & Chandon, and, Josuikai in Paris. We also appreciate the wholehearted support of our GLP staff at Hitotsubashi University: Professor Hiroyuki Okamuro, Professor Yasuhiro Otsuki, Ms. Yuko Inukai, and Ms. Michiko Hirai. We shall be delighted if this program has been of help to the participants, who will hopefully go on to become professional leaders in the global arena in the near future.

序 文

一橋大学大学院経済学研究科特任講師

増 田 都 希

今年のEUにかんする最も重大なニュースは、間違いなく東西ドイツの壁の崩壊から30周年を迎えたことでしょう。東西ドイツ統合、その後の旧東欧諸国のEU加盟の総括がなされ、民主主義、法の支配、人権というEUの理念の拡大、浸透が認められる一方で、まだなお東西諸国のあいだに深い溝があることが浮き彫りにされました。

EUの今後を決定づけるような2つのできごともありました。一つは、年末の総選挙によって確定した英国のEU離脱です。もう一つは、欧州委員会の歴史上初となる女性委員長（ウルスラ・フォン・デア・ライエン）の誕生です。総勢27名の委員会主要メンバーのうち、委員長を含めて女性が12人を占めるもっともジェンダー平等を実現した新体制が発足しました。

「グローバル・リーダーズ・プログラム欧州研修」の目的は、まさにこうした世界の動きや、さまざまなEU諸国の社会のありようを肌で感じることにあります。本研修で、私が11名の参加学生に期待したのは、各々の設定したテーマを通じてEUを知り、EUという他者の鏡を通じて自己や自分たちの社会を知ることです。なぜなら、私たちの社会の特性、私たちの社会で“常識”とされているものを客観視し、相手のそれと擦り合わせることでしか、グローバル社会では他者と対等かつ建設的な関係を築くことはできないと思うからです。

EUはその点で、格好の素材を提供してくれます。我々とEUが異なる歴史的、文化的背景を有するというだけでなく、我々からすれば一見似かよって見えるEU諸国それぞれが実に多様で、その多様性－異質性と言っても良いでしょう－を越えて、一つの連合体を形成しようと挑戦を続ける地域だからです。

EUの多様性に触れるため、今年度の研修ではオランダ、ベルギー、フランスの三国を選びました。アムステルダム－パリ間は高速列車で3時間半ほど、東京－岡山間とほぼ同じです。地理的には近距離にありますが、カトリックの大国として早くに中央集権国家を成したフランス、宗教的寛容と商業と学問によって独自の地位を築いたオランダ、ドイツ語・プロテスタント圏とフランス語・カトリック圏の狭間に位置し、EUの本拠地となったベルギーと、三者三様の国々です。ユトレヒト、パリ両大学での討論会、ベルギー、フランスでの企業訪問（欧州トヨタ、みずほ銀行、モエ・エ・シャンドン社）に加えて、オランダの高さを誇るドム塔（ユトレヒト）、世界遺産のグラン・プラス（ブリュッセル）、イスラム寺院（パリ）などの文化遺産の視察、大都市であるアムステルダム、パリ、地方都市のユトレヒトとルーヴァンなど、できるだけヨーロッパを様々な角度から捉えるプログラムを組みました。こうした数々のイベントと、何よりそこでの多くの人々との出会いによって、

学生たちは、EUのモットーである「多様性のなかの統一」の本質に近づくことができたことでしょう。

彼らがもっとも良い刺激を受けたのは、ユトレヒト、パリ両大学での討論会でしょう。ここでは、今年度始めて討論会を行ったユトレヒト大学での様子をご報告します。まず討論会会場のカジュアルな雰囲気に驚かされました。正面のスクリーンを挟んで両側にスポーツ観戦をするようなベンチシートが二段あり、ベンチの上にはカラフルなクッションが並んでいました。後方には、セルフサービスのコーヒーやお菓子が用意されています。自由闊達な意見交換は、心地よい空間の中でこそ生まれるという発想がここから垣間見られます。実際、本校学生たちの発表に熱心に耳を傾け、鋭い質問が飛び、時にはプレゼンターを置き去りにしたまま、ユトレヒト大学の学生たちの間で議論がヒートアップする一幕もありました。学生たちは英語で意見交換をした達成感を味わうと同時に、もっと議論に加わりたかったという悔しさも嘸み締めていたようです。大学内のインキュベーターであるUtrechtIncも見学しました。様々な領域の研究者や企業を有機的に連携させ、植物を育てるように企業活動を生み、育てるセンターです。その広々としたコワーキングスペースで生まれる思わぬ出会いによって、新しいアイデアと起業活動を次々と生み出しています。自分たちと同じく経済を専攻しながら、ユトレヒト大学の学生は自分たちの「大学」のイメージを覆すような環境で学んでいることに、衝撃を受けたようでした。

10日間の海外調査は、多くの方々のご支援の賜物でもありました。紙幅の都合上、全員のお名前をあげることはできないこととお断りしたうえで、以下の方々に格別の感謝を申し上げます。本年度、初めて本校との討論会をご快諾くださったユトレヒト大学のエリック・スタム先生、フリードマン・ボルジン先生、歓迎会を開催してくださったルーヴェン・カトリック大学のディルク・チャルニツキ先生とアシスタントのウィッツさん。パリ大学の中島晶子先生と磯山麻衣先生は、2019年末からのストの影響によって12月に予定されていた試験が1月にずれ込むという事態の中、交流授業の開催のためにギリギリの調整を行なってくださいました。また、本年も欧州で活躍する卒業生の皆さまが、我々の企業視察をご快諾くださいました。ご自身も本校在学中に企業訪問を企画するサークルを運営し、今回も大変充実したプログラムをご準備くださった上田良平様（欧州トヨタ）、昨年度から継続してお世話になっているパリ如水会支部長の後藤健様（みずほ銀行）、後藤様の呼び掛けに応じ、初めて視察を受け入れてくださった村上順子様（モエ・エ・シャンドン社）のお力添えにより、学生たちは海外で働くことの意義と魅力を肌で感じることができました。

最後に、プレゼンテーションのリハーサルへの立会い、英文の校閲など、英語力の向上にご尽力くださったミラン・マルチェフ先生、事務局として常に万全の態勢を整えてくださった犬飼裕子様、GLP事業全体を下支えしてくださったグローバル・オフィスの平井美千子様にも心より感謝申し上げます。

Foreword

Toki Masuda

Assistant Professor, Graduate School of Economics

The most important news related to the EU in 2019 was undoubtedly the 30th anniversary of the collapse of the Berlin Wall dividing East and West Germany. The impact of the German reunification and the admission to the EU of former Eastern European countries has been a focus of attention throughout the year. European ideals such as democracy, constitutionalism and human rights have without question also spread to the newer EU countries, while on the other hand we could not deny there is still a considerable gap between Western countries and countries from the former Eastern Bloc.

There were also two events which seemed likely to determine the future of the EU. One was the departure of the UK from the EU, now confirmed by the UK's general election at the end of last year. The other was the election of Ursula von der Leyen as European Commission President, (the first time that the EU has had a female President in its history) . In addition, twelve women, along with fifteen men, have been approved as new key members of the Commission. This means that Der Leyen's team features the greatest gender equality of an EU Commission thus far.

The purpose of the “Global Leaders Program European Field Studies” is to give our participants a chance to experience world developments and the status quo in several societies in the EU. In this year's edition of the project, what I expected from 11 participating students was for them to learn about the EU through the themes that they chose to explore, and also to get to know themselves and their own society better through the EU prism. I think that it is only by observing the characteristics of our “common sense” and finding a compromise with other types of “common sense” that we could build equal and constructive relationships in a global society.

The EU offers good material for thought in this regard, not only because it and Japan have different historical and cultural backgrounds, but also because the countries of Europe are very diverse (even if they might seem very similar to us) , and due to the fact that they continue to take on the challenge of maintaining a union which bridges that diversity and creates a community defined by what we might call heterogeneity.

To explore some of that European diversity, we selected the Netherlands, Belgium and France for this year's overseas survey. It takes about 3.5 hours by high-speed train between Amsterdam and Paris, which is almost the same as between Tokyo and Okayama. Although geographically close, these three countries are actually quite different: France being one of the first Catholic powers to be quickly centralized, the Netherlands building its own character and position through religious tolerance, commerce and science, and Belgium which was established between Protestant Germany

and Catholic France and later became the home of the EU.

For the current academic year, we built a program that tried to capture Europe from various angles as much as possible and included joint discussion meetings at Utrecht University and the University of Paris, corporate visits in Belgium and France (to Toyota Motor Europe, Mizuho Bank Ltd., and Moët & Chandon) , cultural heritage visits to places like the Dom Tower in Utrecht, the Grand Place in Brussels and the World Heritage and Islamic Temple in Paris, visits to provincial cities like Utrecht and Leuven and big cities like Amsterdam, Brussels and Paris. Through all their events and destinations, and especially their encounters with many people in Europe, our students were able to get closer, in my opinion, to the essence of the EU's motto – “United in Diversity”.

The joint discussion meetings at Utrecht University and the University of Paris were probably what impressed our students the most. At Utrecht, for example, we were first of all surprised at the casual atmosphere in the discussion room. There were two levels of bench seats on both sides of the front screen, with colorful cushions lined up on them. In the back, self-service coffee, tea and sweets were available. The idea is that free and open exchange of ideas can only take place in a comfortable space. Indeed, the Utrecht University professor and students listened attentively to all presentations and asked questions of vital importance. Occasionally, the lively discussion got quite heated up among the students of Utrecht University, even if it meant leaving the actual presenter behind in the conversation. Our students got a great deal of satisfaction from exchanging opinions in English, but they also regretted the fact that they did not participate more. After the meeting, we visited the university's incubator “UtrechtInc”, which is among the best in the world. This is a laboratory that organically links students, scientists and companies from various fields, and supports startups and developing businesses just like growing plants. Unexpected encounters in the spacious co-working area are an important key to creating entrepreneurship and new ideas one after another. Our students seemed shocked that there were economics majors there just like them, learning in an environment that upsets our image of a "university".

The 10 days of our overseas survey were also a gift of many people's support. We would especially like to thank Dr. Eric Stam and Dr. Friedmann Polzin from Utrecht University who gladly accepted our proposal to hold a joint discussion meeting for the first time, Dr. Dirk Czarnitzki and his assistant Wytse from KU Leuven for holding a welcome party for us, professors Akiko Nakajima and Mai Isoyama at the University of Paris who undertook the difficult task of coordinating our exchange class, even as the university examination scheduled for December was delayed until January due to a strike in late 2019.

We also extend special thanks to graduates of our university based in Europe who welcomed us during our company visits. Mr. Ryohei Ueda (Toyota Motor Europe) , who had also planned

a company visit in his school days, once again set up a very productive program. Mr. Ken Goto (Mizuho Bank Ltd.) , the director of our Alumni association (Josuikai) in Paris, has been supporting this project since last year. Junko Murakami (Moët & Chandon) kindly accepted our visit for the first time in response to Mr. Goto's call. With their great cooperation, students were able to witness the significance and attractiveness of working abroad up close.

Finally, I would sincerely like to thank Professor Milen Martchev who helped the students improve their English skills by correcting their reports and attending the presentation rehearsal. Also, I am deeply grateful to the Global Leaders Program's staff at Hitotsubashi University – Ms. Yoko Inukai and Ms. Michiko Hirai without whose support this sort of project could never have been properly executed.

Chapter 1

INTRODUCTION

1. 参加者プロフィール



経済学部 西川俊吾

こんにちは。経済学部2年の西川俊吾と申します。所属している団体は、サイクリング&アウトドアサークルのJOINUSと一橋大学天文部、学外で宇宙に関するフリーマガジンを発行している学生団体のTELSTARです。それぞれJOINUSの副部長、天文部の部長、TELSTARの副代表をされていて、予定を合わせるのが大変です。宇宙・天文に関することに興味を持っていて、今回の海外調査でもロケットをテーマにしました。「星のソムリエ」という資格を持っているのでJOINUSの仲間からはソムリエと呼ばれています。

社会学部 栗田 旭



皆さんこんにちは、社会学部2年の栗田旭です。なんで社会学部の人間がここにいるんだ？と不思議に思われるかもしれませんが、確かにその通りです。僕は経済学部でもGLPでもないにもかかわらず、今回この経済学部のGLPのプログラムである海外調査に参加することにしました。なぜ参加することにしたのかといえば、自分でテーマを設定し、それについて1年近くかけて調べ、現地の学生と討論できるという貴重な経験ができるということで、自分にとって新しい世界を広げることができるのではないかと思ったからです。

さて自己紹介文なので、簡単に僕のことを語らせてもらいたと思います。僕は写真部とサイクリングサークルに所属しており、特に英語ができるというわけでもありません。英語は気合があれば伝わります(主観)。普段の主な生息場所はTwitterだと友人からは言われています。SNS依存の闇は深いものがありますね。あと気分がyoutuberもやったりしてます。動画の編集って楽しいですよ。あと写真部的な観点から言わせてもらうと、ヨーロッパは写真を撮る場所としてはうってつけの場所です。どこで写真を撮っても風景が美しいため、基本的にいい写真を撮ることができます。ヨーロッパのその第1の魅力はやはりこの景色の美しさにあると思います。どこの町にも基本的に大聖堂があり、そこを中心に町が整然と広がっているさまは圧巻です。まさに異国に来たという感じがしますね。

ちなみに僕はドイツ語を大学入学以来やっており、ドイツが大好きな人間なので今回ド

イツに行くことができなくて非常に落胆しています。ドイツビールのおいしさを皆さんに伝えなかったのが残念です。来年から僕はドイツに1年留学する予定なので、そこで今回いけなかった分思い切りドイツを楽しんできたいと思います。

うまく僕のことが伝わったかわかりませんが、とりあえずはこんな感じです。

経済学部 小川大志

この度短期海外調査 (EU) に参加することになった経済学部2年の小川大志といます。私はGLP生でもあるため今回の研修に参加することとなりました。普段の大学生活ではバドミントンのサークルに所属しているほか、英語ディスカッションにも取り組んでいます。趣味はスキーで、昨年のシーズン中はその大半を雪山で過ごしておりました。今回のEU研修がスキーシーズン真っ只中なのが惜しく感じられるほどですが、その分多くのことを学び取ってくるつもりです。経済学的な興味について言うと、統計学や計量経済学に興味があると思っていましたが、最近、経済学の他の分野の面白さにも気づき、ゼミ選択については難しい判断を迫られています。



私は高校卒業まであまり海外とは縁が無い生活を送ってきました。転機となったのは大学1年生の夏に参加した海外語学研修でした。自分の知らない価値観に触れたり、常識をひっくり返されたりする経験はとても新鮮に感じられました。また、学生寮で中国人の学生と仲良くなって国際的な交流のおもしろさを知りました (2年の夏には上海で再会を果たし、ガイドしてもらったのも良い思い出です)。そんな中、もっと海外のことを知りたいという好奇心や国内しか知らないことへの危機感がきっかけでGLPへ応募、本プログラムの派遣へと至りました。もちろんヨーロッパを訪れるのは初めてです。

法学部 岡幸葉

こんにちは。法学部4年の岡幸葉です。3年生までは国際部ディスカッションに所属していました。学部ゼミでは国際取引法について学び、卒業論文では投資ビジネスの紛争解決方法について研究しました。大きいものを作ることに憧れてディベロッパー業界を選び、今春から社会人になります。



無趣味ですが唯一、食べるのが大好きです。今のインターンが食とITを扱う会社なので、まさに「好きなことを仕事にする」を実現できてハッピーです。好きな食べ物はカレーと担々麺ですが、辛いものが苦手なのでいつもレベル1で食べています。

今回の海外調査には、アカデミックな目的で海外へ行った経験が今までなかったため、学生生活最後にチャレンジしようと思い参加を決めました。実際に行って本当に良い体験ができたと感じています！

経済学部 瀧澤 亮

経済学部2年の瀧澤です。GLPではありませんが、EU海外調査に参加しました。2年生の1年間は海外に目を向ける1年にしようと思ったことが海外調査に参加した大きな理由です。3か国を渡り歩いたことで気づいたことがいくつもあり、これからはいろんな国に行ってみようと思っています。

僕は「浅く広く時々深く」をモットーにしており、多趣味な人間です。自転車やバスケのサークルなどに入っている他、日本酒や街歩き、ビリヤードなどが好きです。最近だと一眼レフを買い、写真を撮る練習をしています。今回の海外調査でもヨーロッパの街並みをカメラに収めてきました。これからもあらゆることを趣味にしたいです。

あとはネコが好きです。前世も来世も（実は現世も？）僕はネコです。多分。



経済学部 岡田絵里佳

経済学部2年、GLP6期生の岡田絵里佳です。高校卒業まで通算11年半、アラブ首長国連邦のドバイでインターナショナルスクールに通っていました。趣味は旅行で、今まで30か国以上訪れたことがあり、旅行先ではインスタグラムに投稿する写真を撮ることと美味しいスイーツを探すことに必死です。他にはプロ野球観戦が好きで、シーズン中は授業が終われば球場へダッシュする野球観戦漬けの毎日を送っています。大学のサークルでは議論の上達と英語力の維持を目的に国際部のディベートセクションに所属しており、コピーダンスサークルSpicaではJ-popやK-popアイドルのダンスを「完コピ」して学校行事でダン

スを披露しています。

このゼミを志望した理由は、実際に現地を訪れ、レベルの高い討論を海外の大学生としたいと思ったからです。少人数制のゼミに入り、自分が興味を持つテーマであるEUの農業政策についての理解を深め、ユトレヒトとパリの大学に通う学生に向けて自分の調査をプレゼンテーションし、現地の学生の意見や疑問を討論会で聞くことができるのは非常に有意義であると考え、短期海外調査に参加することを決めました。



経済学部 金丸晴香



経済学部2年の金丸晴香です。GLP6期生で、英会話塾でアルバイトをしています。趣味は映画鑑賞とバレーボール観戦、旅行です。また5歳の頃から11年間ピアノを習っていたので、今でも時々息抜きにピアノを弾いています。

私は父の仕事の関係で6年半アメリカのニューヨークに、4年半オランダに住んでいました。大学を卒業する頃には、日本と海外の滞在年数がちょうど半々になります。将来は海外経験と日本で学んだことの両方を活かし、グローバルに活躍できる仕事に就きたいと考えています。

今回の研修には、特に関心を持っている教育格差と移民問題についての知見を深めたいと思い参加しました。研修前に調査した知識をもとに、その国の人々の実際の声を聞くことで、新たな視点を得られるのではないかと期待しています。とても楽しみです！

経済学部 三須春輝

私は今まで欧州への渡航経験はなく、一度は行っておきたい場所の一つであったことから、本研修への参加を希望しました。

私の想像する欧州とは、世界に対して様々な影響を与えてくれる地域です。そこで形成された伝統的な文化、芸術は世界各地に伝播し、現在も多くの人々を魅了し続けていますし、歴史的にみても産業革命の達成や世界戦争の勃発、冷戦下での対立を超えた地域統合の形成など、世界の中でも特徴的な地域の一つに思えます。また公害や人種差別、移民間



題など種々の問題は他地域よりも早期に現出し、世界がこれから直面するかもしれない課題を私たちに提示するかのようです。

私は履修した基礎ゼミナールを通じて、これまでに学んできた欧州の諸問題についてもう一度整理し、欧州の抱える問題、日本との関係性について理解することができました。また海外調査期間中は現地学生との交流や企業訪問など、個人ではすることのできないたくさんの経験を積むことができました。本研修にご協力を賜りました皆さま、ありがとうございました。

社会学部 遠藤万里

社会学部2年、社会学部GLP3期生の遠藤万里です。インカレの学生団体に所属しています。週に1回高田馬場に通って会議に参加し、春と夏の長期休みには各1ヵ月弱フィリピンに渡航し、国際協力を携わっています。自他共に認めるプロ野球広島の大ファンであり、神宮球場レフトスタンドを主戦場に、甲子園や広島など、全国を転戦しています。2019年は計17試合現地で観戦できました。



今回の研修でどうしても欲しかったショットです。関係者にはわかると思います。実は背伸びして、腕も伸ばし切ってかなり無理してます笑

これまで、タイ・ベトナム・ラオス・フィリピンという東南アジアの国々に加えて、家族でイチロー選手に会いに行ったシアトルという、恐らく比較的豊富な海外経験はあるのですが、全て環太平洋にとどまっていた。今フィリピンというフィールドを選んでいるのも、「過去に行ったことがあり馴染みがある」という理由が大半でした。

とりわけ、(野球が盛んでないことも一因に)ヨーロッパへの具体的なイメージや憧れなどはほとんど抱いておらず、何かきっかけがあれば、と常々感じていました。そこで今回この研修に参加することで、事前の研究や本場での経験を通じ、自分の世界を拡張されるのではないかと感じたため、応募させていただきました。

また、「扱う範囲が広すぎて3年時に何のゼミを選べばいいのかわからない」という声もよく聞かれる社会学部ですが、この研修の研究テーマとして、自分が現在関心を持っている国際社会学の内容を少し深めることができたので、良い機会になりました。

経済学部 仲吉大輔

どうもこんにちは!なかよしです。出身はいろいろで、東京とか沖縄とか神奈川とか函館とかまあそんなところですよ。

趣味はスノーボードですね。ただ小さいころと比べてスピード出すことに怖くなってきている今日この頃。老いを感じますね。

夢は子供のころから変わらずパイロットを目指しています。「夢は大きく!」って感じで頑張っています。

サークルはひとつだけプロダクションに所属していて、英語演劇やっています。出る方じゃなくて裏方ですね。演劇っておもしろいんですよ。正解なんてなくてどこまででもこだわり続けられるところが大変でもあり興味深いところですよ。

今回の旅で一番大きなやらかししたのが僕ですね。なんとアムステルダムのホテルにパソコンと予備の財布を忘れちゃったんですよ。気づいたのは高速列車でブリュッセルに着いた時。着いたとたんすぐに一人でアムスに引き返して、ホテルに電話して、カードを止めてって感じで大変でした。まあでも人生なんとかなるものでね。アムスにも行けたし、ベルギーにも自力で行けたし、財布の中身もパソコンも無事でね。いやー良かった。

実は今回忘れた財布は前にシンガポールのホテルにも忘れたことがあって、二回目ですよ。あの財布はホントに運がいいですね。二回目でもあったんで、慌てることなく対処できましたね。人生なんとかなるんですよ。これをモットーにこれからも生きていきたいですね!



経済学部 小村来世

こんにちは。経済学部二年の小村来世です。下の名前はリセと読みます。出身は愛知の名古屋じゃない方で、海外インターンシップを運営するアイセックという団体と経済学研究会に所属しています。一橋大学は留学制度と奨学金制度がどこの大学よりも整っていたので、語学研修とサマースクールですでに二度アメリカに行かせていただき、3年夏から一年間もアメリカに派遣留学させていただきます。過去二回の留学を通して感じたのは、留学中に得られた友人と関係が続く楽しさです。語学研修で会ったアメリカ人や台湾人の友人とは留学後もお互いの国で何度か会い、時々、

長電話しています。二回目の留学ではイタリア人の友人が7人もできたので、3月にイタリア旅行しに行くことに決めました。友達の実家に泊めてもらうことになったので、宿泊費も食費も浮いてしまいそうです(笑)。また、現地の政治や社会問題について肌で感じることも留学の素晴らしい点だと思います。僕がちょうど派遣留学に行くころに大統領選が本格化しますが、僕が行くミシガン州は民主党・共和党の支持率が拮抗する非常に大事な選挙区になっています。ミシガンにはGM、フォードなどの本社があり、工場労働者の解雇やそれに伴うストライキのニュースが報じられています。今回の研修も、派遣留学先でも、現地の人から本音を聞きたいと思います。

2. ゼミの様子

基礎ゼミナール概要

三須春輝

海外調査Aの参加要件の中には春夏学期と秋冬学期に週一回開講される基礎ゼミナールの履修があり、研修参加者は全員このゼミナールで一年間海外調査に向けた準備を行った。

まず、春夏学期はEU成立史、現在EUの抱えている問題点などについてまとめられたテキストを輪読し、参加者による授業内報告を行いながらヨーロッパに対する知識の蓄積、整理を行った。当初は参加者間で欧州が現在抱える問題やEU成立に至るまでの欧州近現代史の知識に差がある状態だったが、この作業を行うことで調査に向かう上での最低限の素養を身に付けることを可能にするのと同時に、今後行う各自の調査・研究のテーマ選びにも資する内容であった。その後、6月からは論文、著作の検索方法、レポートの書き方を学んだうえで、夏期休暇期間にかけて各々が興味関心を持っている分野について調査・研究を行っていった。これらの研究をもとに協定大学の学生と交流を行うため、研究に際しては欧州と日本、或いは身近なアジア諸国との比較の視点を入れるという条件があったが、それ以外の制約は特に存在せず、ロケットから移民問題まで学生の研究対象は多岐にわたった。その期間、授業内では各自が研究の進捗状況について中間発表を行い、他の学生や担当教員からの質疑応答を受けることで常に客観的な視点が入るよう工夫されていた。また、調査にあたって疑問点がある場合は授業時間外に担当教員と個別面談を受ける機会があった。

秋学期以降は、主に夏期休暇中に仕上げたりサーチペーパーを基にした英語によるプレゼンテーションの準備、訪問地に関する事前調査を行った。特に英語のプレゼンテーション練習では、本学部特任講師である Milen Martchev 先生のご協力も賜りながらパワーポイントの使用法、英語での口頭発表方法について学んだ。メンバーのほとんどが英語でのプレゼンテーションの経験が浅かったため、パワーポイントの効果的な利用方法や一般的に欧米で用いられている書式など、初歩的なことを中心に学んだ。訪問地の下調べについては、訪問国ごとに班を結成し、全員の前で簡単なプレゼンテーションをしながら理解を深めた。ここで発表された内容は、本報告書に掲載されている訪問地紹介を執筆する際の参考にもなっている。

これ以外の活動としては、旅行会社によるオリエンテーションの際に、長年にわたりこの海外調査の企画を担当されている大月康弘先生から、先生ご自身の経験や歴史的な側面に基づいたヨーロッパに関するお話を伺い、メンバー一同ヨーロッパに対する憧憬の念を深くした。また渡航直前には環境問題、移民問題、権利保障など、日本と欧州がともに抱えている問題についてメンバー間で議論して理解を深めたり、今回のプログラムで触れられ

る機会が少なかった東欧諸国とEUとの関係について各自がそれに関する著作をレジメにまとめて発表した。ここで得た知識は、欧州連合博物館の見学や現地大学での交流会でとても役に立った。

授業中担当教員の増田先生から時折厳しく指導される場面も何度か見受けられたが、本ゼミナールを履修したからこそ「単なる観光旅行にならないように」という当初からの目的は達成され、メンバー各自が明確な問題意識を持って海外調査に参加することが可能になったのだと思う。



Chapter 2

RESEARCH & PRESENTATIONS

Transportation policy in Europe

Daisuke Nakayoshi

*These days in Japan, especially in the provincial city,
the quality of the public service has been decreasing and decreasing.*

How do we deal with this problem?

We will look at cases from the EU and Japan.

1. Introduction

Hello, everyone. My name is Daisuke Nakayoshi. I'm a second-grade student in Hitotsubashi University and major in economics. Today, I will talk about the Transportation policy in Europe. I selected this topic because I like the train very much since I was young and I have been interested in another country's transportation system. Moreover, these days in Japan, the population in the rural area has been decreasing year by year. This population decrease has caused the loss of quality of the public service like the transportation service in the provincial cities. This vicious circle will lead to the city's disappearance in the end. Because I want to solve such situation, I researched the good example in EU and I considered the possibility of adopting good Europeans system to Japanese provincial cities.

2. The transportation Policy in Freiburg

Actually, my choice in the EU as a good transportation model is Freiburg in Germany. Freiburg is located southwest in Germany and there are about 230,000 people in Freiburg city. The size of the city is about 153.1 km². Freiburg is the famous as a Green City in the world and have introduced various eco-friendly system in various fields like the transportation, energy, waste management and so on.



LRT in Freiburg (Reference: www.eurotram.com/album/germany/freiburg/01_jp.html)

Especially in the transportation system, in 1969, Freiburg devised its first traffic management plan and cycle path network to improve the mobility while reducing traffic and benefiting the environment. This traffic management plan has had five main components. The first component is increasing the LRT network. The second is promoting the use of bicycles. The third is introducing the traffic calming policy. The fourth is reducing the use of car. The last one is creating new parking lots in the suburb area.

I will pick up the first one and the third one. About the first one, increasing the LRT network, means introducing the special LRT lane and special traffic light for LRT and it has improved the quick-deliverability. Moreover, adopting the park and ride system or strengthening the connection with the bus service included in this policy. In the first place, the LRT is an eco-friendlier vehicle than the trams in these days. Here is the LRT and Bus network. The LRT network shown as red line, green line, blue line and orange line comprises 30km and bus network shown as gray lines comprises 280km. So, we can live in Freiburg without cars very comfortably thanks to such huge LRT and bus network system.



Route map (Reference: <https://www.vag-freiburg.de/>)

About the third one, introducing the traffic calm policy, please look at this map. Shown in white on this map is a pedestrian zone. On streets shown in pink, the speed limit is 30km/h. On some streets shown in blue, cars can travel no faster than walking speed. Actually, we hardly drive a car in Freiburg city. So, people are forced to use a bicycle, the LRT or bus, or on their feet.



Restrictions on motor car traffic

(Reference: Regina Gregory “Germany-Freiburg-Green City” *The EcoTipping Points Project, Our Stories*, 2011.)

Actually, 70% of the population lives within 500 meters of LRT stops and 95% of the population can access to the bus stops or LRT stations within five minutes. Please look at this graph. According to the survey, the percentage of car-users are decreasing year by year. People change their minds, not instantly, but taking a long time, they start to use a bicycle or city tram little by little.

3. Toyama City

I will choose Toyama city as a model in Japan because Toyama city introduced LRT quickly in Japan. First of all, Toyama city is located in the middle of Japan and the city population is 400,000. The area of the city is 1,242km². The basic information about Toyama is the rate of car users is very high, 70% and the public transportation is not fulfilling.

Actually, Toyama city has introduced LRT to Toyama Minato line. Toyama Minato Line was managed by JR, which is the main railway company in Japan, until 2006. And this Toyama Minato Line’s users had been decreased year by year. Also, the number of trains in a day had been decreasing. This situation caused the loss of quality of service. To solve this situation, Toyama city set out many policies. Firstly, they have increased the LRT stations. Secondly, all stations are changed to be barrier-free. Thirdly, bicycle lots are built nearby some LRT stations. Moreover, the

number of trains are increased. In a peak, the train comes to the station from every 30 minutes to 10 minutes. During off peak, the train comes from every 1 hour to 15 minutes. Total numbers increased from 19 round trips until 2006 to 55 round trips per a day.



LRT in Toyama City

(Reference: 富山ライトレール株式会社ホームページ <http://www.t-lr.co.jp/>)

4. Suggestions

I will suggest two points from this survey. Firstly, there are so many provincial cities which have street-cars in Japan. In my hometown, we also have street-cars from old days, but recently people who use the street-car have been decreased. So, including my hometown, such cities should change to use more eco-friendly transportation.

Secondly, like Toyama city, some JR lines that users have been decreased year by year should change to LRT or some eco-friendly transportation.

That's all for my presentation. Thank you for listening.

References

- ・ 宇都宮浄人・服部重敬『LRT 一次世代型路面電車とまちづくり』成山堂、2010。
- ・ 青山吉隆・小谷通泰『LRTと持続可能なまちづくり』学芸出版社、2008。
- ・ ティム・パウエル『現代の交通システム 市場と政策』NTT出版、2007。
- ・ 中村徹『EU陸上交通政策の制度的展開 道路と鉄道をめぐって』日本経済評論社、2000。
- ・ 片野優『ここが違う、ヨーロッパの交通政策』白水社、2011。
- ・ 宇都宮浄人「海外のLRTの現状とわが国の課題」『国際交通安全学会誌』Vol.34, No.2、2009。
- ・ 堀弦「ドイツ・フライブルク公共交通の財政問題—公的補助と経営努力」『立命館法政論集』第7号、2009。

- ・ 深山剛・加藤浩徳・城山英明「なぜ富山市ではLRT導入に成功したのか？—政策プロセスの観点からみた分析」『運輸政策研究』Vol.10, No.1、2007。
- ・ 国土交通省「LRT等の都市交通整備のまちづくりへの効果」2011。
<www.mlit.go.jp/common/000139693.pdf>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ 川上洋司「次世代型の公共交通サービス導入によるまちづくり—富山ライトレール（LRT）の整備効果を検証する」『北陸の視座』Vol.21、2008。
- ・ 森雅志（富山市長）「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり～富山市のLRTをはじめとした公共交通活性化の取り組みと課題～」第2回交通政策審議会地域公共交通会、2013。
<<https://www.mlit.go.jp/common/001015791.pdf>>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ 森雅志（富山市長）「公共交通を軸としたコンパクトなまちづくり～富山市のLRTをはじめとした公共交通活性化の取り組み～」LRT都市サミット松山2017首長会議、2017。
<https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/machizukuri/compact_network/lrtsummit.files/toyama-1.pdf>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ 国土交通省ホームページ
<www.mlit.go.jp/>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ 富山ライトレール株式会社ホームページ
<<http://www.t-lr.co.jp/>>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ フライブルク交通ホームページ
<<https://www.vag-freiburg.de/>>（最終アクセス2019年8月5日）
- ・ Regina Gregory “Germany-Freiburg-Green City” *The EcoTipping Points Project, Our Stories*, 2011. Jason Cao, Xiao Shu Cao “The Impacts of LRT, Neighborhood Characteristics, and Self-selection on Auto Ownership: Evidence from Minneapolis-St. Paul” *Urban Studies*, 2014.

報告要旨

本報告の目的は、交通政策という分野において、ヨーロッパの事例を研究し、日本への応用の可能性について考察することである。近年、日本の地方都市では人口減少が著しい都市が多い。その人口減少が公共サービスの質の低下を招いている事例がいくつもみられる。そこで、私は特に交通政策という観点で、ヨーロッパと日本の都市の交通政策について比較し、日本の地方都市の課題を解決できないかということを試みた。ヨーロッパではドイツのフライブルクについて調査した。フライブルクは環境首都とよばれるほど環境意識が高く、その一環として交通政策も充実しており、本報告では同市のLRTの活用方法について研究した。日本では富山市の交通政策について調査した。富山市は日本で初めてLRTを導入しており、その背景について調べ、LRTによる日本の他の地方都市の将来性について考察した。

討論会報告

まず、ユトレヒト大学で行われた討論会について述べたいと思う。私はヨーロッパの交通政策について調べた。特に、都市再生事業におけるLRTの活用性について日本に適用できないかを考えた。一つ目の質問としてヨーロッパと日本を比較する際に、各都市の都市規模や人口密度は考慮したのかという質問があった。想定していた質問であったが、今回は日本の地方都市の都市再生に焦点を当てたため、密度についてあまり考慮できなかった。論が詰められていない部分として認識してはいたため、とても悔しさが残った。第二、第三の質問ではどうして日本がLRTの導入が進んでいないのか、普及させるためにはどのようなことが必要だと思うかということが聞かれた。日本の地方都市では路面電車が昔から走っていた都市が多いが、近年路線の縮小や本数の削減が相次いでいるのが現状だ。理由としては、モビライゼーションにより多くの家庭で自動車が普及し、また、都市の拡大に伴って公共交通機関が希薄な地域に人口が増えたことにより、自動車の重要性が高まっているためである。

質問でも取り上げられたが、フライブルクや富山市の事例を今後どう日本の他の地方都市に応用していくかという論点が詰められていなかった。詰められなかった原因は、単純な調査時間不足だけではない。大きな要因として、私が取り上げた分野は交通経済学という分野に当たるが、そこを追究し得るだけの経済学、特にミクロ経済学の知識が私に不足していたのではないかということだ。よりミクロ経済の観点からこの分野を掘り下げることができれば、さらに興味深い考察ができていたと感じた。もう一つの要因は、他の地方都市への応用を考えたが、すべての都市が、都市の成り立ち、現在抱えている問題の要因が違い、一概に応用できなかったということだ。フライブルクや富山市の都市再生は、フライブルクだから、富山市だから、その施策が成功したと研究を深めていくたびに感じた。私は多くの都市に当てはまる対応策を考えなかったが、それは困難であることを感じ、研究の目的設定自体が難しいものであったと思った。



ユトレヒト大学での討論会の様子

続いて、パリ大学での討論会について述べたいと思う。プレゼンは、大学の日本語学科の生徒を相手に行われた。そこでは主に、プレゼンの内容へのコメント、質問というよりは、日本自体の質問が多かった。彼らはとても日本に興味を抱いており、特に、日本の漫画やアニメが好きであるという生徒が多かった。海外に行くときだいたい日本の漫画やアニメが好きだという人に出会うが、ここでも人気はすごかった。僕らが生まれる前の漫画から、最新の漫画やアニメまで知っていた。私の知識では到底追いつけなかった。海外でこのような話が出るたび、私は話についていけず、そのような人々となかなか交流を深められないということがある。漫画やアニメという分野ではないかもしれないが、最低限海外を訪れる日本人として、日本についてしっかり紹介できるほどの知識を持ち合わせていなければならないと感じた。

ところで、パリ大学でのプレゼンの中で、挑戦することの大切さを改めて学ぶ出来事があった。それは、2回目のプレゼンのテーブルである一人の男子生徒の姿勢であった。彼は、生粋のフランス人で英語はあまりしゃべれず、日本語もほとんどしゃべれない。しかしながら、日本にはとても興味があり、自分が知っているわずかな英単語と日本語で頑張って伝えようとしてきた。周りの生徒にも手伝ってもらい、私も彼の伝えたいことをなんとかくみ取ろうとした。時間はかかったものの、すべて彼の伝えたいことは理解できた。私はその姿勢にとっても刺激をうけた。国際舞台では、様々な国の人と関わるが、多くの場合で言語力不足によって意思疎通が難しい場合があるだろう。そんなときこそ大事なことは、どれだけ相手に伝えたいかという気持ちであると再認識させられた。このパリ大学では、コミュニケーションは言葉ではなく、お互いの気持ちだということを学んだ。



パリ大学での自己紹介



パリ大学での討論会の様子

このプレゼンやそれまでに至る準備段階の過程から、自らの経済学の知識不足や、研究テーマや目的設定の重要性について肌で実感することができた。来年以降、後期課程に進み、本格的にゼミでの研究、そして卒業論文の執筆を行うことになると思うが、この一年間しっかりゼミで学ぶことを通して、自らの興味や現状の力、研究の手法、論文の書き方について学習できたことはとても今後生きてくると感じた。とりわけ、ミクロ経済や、その中の行動経済学、ゲーム理論など、経済の理論分野についてしっかり学びたいという欲が出てきた。大学に入って漠然と経済学を学んでいた自分であったが、自らが専攻する分野に興味を持てたことが、この二年生ゼミでの一番の学びであったと思う。

Comparison of the Rocket Industry of the EU with Japan and the US

Shungo Nishikawa

*Space is a new frontier in the 21st century.
Like trains of the American frontier,
Rockets are infrastructure for space.
How do Japan and the EU provide them
for new sustainable development?*

1. Introduction

Thank you all for coming. My name is Shungo Nishikawa. Today, I would like to talk to you about rockets. I will compare the rocket industry in the EU with that of Japan and the United States.

2. Rockets

There are three types of rockets in the EU, the U.S. and Japan - Ariane5, Falcon9 and H-IIA. They are the main rockets in each country or region. In this presentation, I will compare these rockets from three points of view - cost, reliability and launch sites and pads, and I will show the key points if Japan and the EU rockets industry can develop.

3. Purpose of Launch

First, I would like to introduce three main purposes of launching rockets. The first purpose is science. Do you know the International Space Station (ISS)? Manned space exploration is a main part of science. BepiColombo is a joint mission of Japan and the EU to the planet Mercury. The second purpose is military. Military satellites collect information from space and are used for military communication. The last purpose is commercial. Most commercial satellites are used for communication. In addition, we use satellite TV. In order to increase the number of launches, orders of commercial launch are important for the rocket industry. The number of science launches doesn't change because it is determined by the science budget of governments. Also, as military launches are also decided by governments, they are not likely to increase rapidly. Orders from companies all over the world are important.

4. Japanese Company Order Launch Service

Let's move on to the current situation regarding Japanese commercial launches. Japanese companies have 22 commercial satellites. Of the 22 satellites, 17 satellites were launched by

Arianespace. Arianespace is a rocket company in the EU. However, 0 satellites have been launched in Japan, whereas Japan launches 2-5 times in a year. Although Japan has the H-IIA rocket, Japanese companies do not launch from Japan and are likely to order a launch from the EU. In order to solve this problem, I would like to focus on three key points of rockets - cost, reliability, and launch sites and pads.

5. Cost

Let's look at the cost of rockets. The total cost of rockets is strongly influenced by their size. In general, we can compare them by using cost per kg. Looking at this table, H-IIA and Ariane 5 are almost the same. But Falcon 9's ratio is half of H-IIA's and Ariane 5's. From a financial standpoint, Falcon 9 is vastly superior to the others.

	Total Cost (US\$ Mil)	Capacity (kg)	Cost per kg (US\$)
Ariane 5 (EU)	178	21,000	8,476
Falcon 9 (US)	61.2	22,800	2,684
H-IIA (Japan)	90	10,000	9,000

(Sale Price Drives Potential Effects on DOD and Commercial Launch Providers, p.30)

6. Reliability

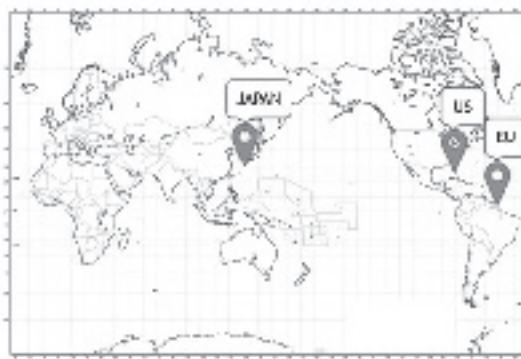
Next, I would like to talk about the reliability of rockets. Reliability consists of the probability of success and the number of successes. It affects the price of insurance for rocket launches. Companies buy insurance for their satellites when they order a launch. Moreover, if a launch fails the customer must wait for a long time until the next time. It causes damage to customers. Let's look at this table. The reliability of H-IIA and Falcon 9 is almost the same, but the number of launches of Ariane 5 is twice as much as H-IIA and Falcon 9. Moreover, Ariane 5 offers insurance to the customer. If a launch fails, Arianespace will launch again for free.

	Number	Success	Probability(%)
Ariane 5 (EU)	110	96	95
Falcon 9 (US)	55	53	96
H-IIA (Japan)	40	39	97.5

(The Annual Compendium of Commercial Space Transportation: 2018)

7. Launch site and pad.

Let's move on to launch site and pads. Please look at this map. The EU does not launch their rockets from Europe. The EU launches from French Guiana in South America. In general, launch sites close to the equator are efficient for rocket launches because the lower the latitude the site is at, the more centrifugal power rockets can get. So, it is efficient to launch from sites in low latitudes. And, the number of launch pads affects the frequency of launches. Moreover, typhoons interrupt launch. The frequency of typhoons depends on the site. The H-IIA site is the worst of the three because it is at a higher latitude, has fewer launch pads and therefore gets the most typhoons.



(The Annual Compendium of Commercial Space Transportation: 2018)

8. Conclusion

In conclusion, the advantage of Ariane 5 is its reliability and insurance provisions. So, they have been able to get many orders from companies all over the world. On the other hand, the advantage of Falcon 9 is its low cost. Falcon 9 is the newest rocket of the three. It doesn't have the reliability of Ariane 5, but the situation is expected to improve in a few years. H-IIA needs lower costs and more launch pads in order to get some orders. A bigger number of launch pads, in particular, leads the cost-cutting and reliability. Falcon 9 will win the world-wide rocket competition if new versions of the other rockets cannot cut their costs. Japan and the EU are developing the new version of rockets now. The Rocket industry in Japan and the EU depends on those new models. And, the rockets are infrastructure for space. Each country must provide the infrastructure. The development of space depends on the rockets. Thank you for your listening.

References

- ・ 一般社団法人日本航空宇宙工業会編『世界の航空宇宙工業』2019年。
- ・ 一般社団法人日本航空宇宙工業会編『日本の航空宇宙工業』2019年。
- ・ 草下健夫「連続80回成功 欧州が誇るロケット「アリアン」の秘密とは」『産経ニュース』2017年8月5日、<https://www.sankei.com/premium/news/170805/prm1708050026-n1.html>

(最終アクセス2019年7月30日)。

- ・ JAXA 宇宙情報センター「ギアナ宇宙センター」、http://spaceinfo.jaxa.jp/ja/kaihatu_kikan_gsc.html (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ JAXA 宇宙情報センター「日本のロケット開発史」、http://spaceinfo.jaxa.jp/ja/contents_history_japanese_rockets.html (最終アクセス2019年9月7日)。
- ・ 鈴木一人「EUの宇宙政策への展開—制度ライフサイクル論による分析」田中俊郎, 庄司克宏編『EU統合の軌跡とベクトル：トランスナショナルな政治社会秩序形成への模索』慶應義塾大学出版会、2006年、163-190ページ。
- ・ 宙畑 sorabatake「費用が安いから? なぜアリアンロケットは商用化に成功したのか」、<https://sorabatake.jp/639/> (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ 寺嶋明尚「工業会活動『平成29年度 宇宙機器産業実態調査報告書』概要」『航空と宇宙：日本航空宇宙工業会会報』第781号、2019年、55-68ページ。
- ・ 鳥嶋真也「ロケット企業『アリアンスペース』は変革する宇宙業界をどう見る?」『マイナビニュース』2018年4月25日、<https://news.mynavi.jp/article/20180425-621675/> (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ 鳥嶋真也「格安ロケットひしめく2020年代、業界の雄『アリアンスペース』はどう戦うか」『マイナビニュース』2017年4月27日、<https://news.mynavi.jp/article/20170427-arianespace/2> (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ 鳥嶋真也「俺の屍を越えてゆけ—欧州初の共同開発ロケット『ヨーロッパ』」『マイナビニュース』2016年6月27日、<https://news.mynavi.jp/article/spacetechnology-6/> (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ 鳥嶋真也「CEOが語る、商業ロケットの雄・欧州『アリアンスペース』の過去・現在・未来」『マイナビニュース』2016年4月22日、<https://news.mynavi.jp/article/20160422-arianespace/2> (最終アクセス2019年7月30日)。
- ・ 内閣府宇宙開発戦略推進事務局「平成27年度 射場の在り方に関する検討のための論点整理」平成28年4月14日。
- ・ ESA, “History of Europe in Space,” 2013, https://www.esa.int/About_Us/Welcome_to_ESA/ESA_history/History_of_Europe_in_space (accessed September 7, 2019).
- ・ Federal Aviation Administration, *The Annual Compendium of Commercial Space Transportation: 2017*, 2017.
- ・ Federal Aviation Administration, *The Annual Compendium of Commercial Space Transportation: 2018*, 2018.
- ・ Mark Williamson, *ARIANESPACE Thirty years and growing Aerospace America*, 2017.
- ・ United States Government Accountability Office, *SURPLUS MISSILE MOTORS Sale Price Drives Potential Effects on DOD and Commercial Launch Providers*, 2017.

報告要旨

本報告の目的は、日本とEUにおいてそれぞれ打ち上げられているロケットを比較することである。特に企業が衛星の打ち上げを発注するときに日本とEUのどちらがより多いのかとその理由、それがこれからも続くのかどうかを発表する。その中で、日本、EU、アメリカのロケットについて、それぞれ値段、サービス、打ち上げる場所、信頼性の点から比較する。

日本のロケット産業の現状としては、例えば、日本の企業が所有する衛星は22機あるが、その中で17機はEUのロケットである「アリアン4」や「アリアン5」によって打ち上げられていて、日本から打ち上げた衛星はない。このアリアン5は非常に信頼性が高く、最も成功した商用ロケットとも言われており、2000年代には、ほぼ市場を独占していた。一方で、最近ではアメリカの企業による打ち上げも増えている。特に「スペースX社」の「ファルコン9」は打ち上げ数を増やして、ほかのロケットよりもはるかに安い値段で打ち上げを行っている。ファルコン9はアリアン5や日本のロケットである「H-IIA」の約半額で打ち上げているので、価格破壊ともいわれている。それに対してアリアン5の利点は、信頼性と打ち上げ場所から得られるアドバンテージである。アリアン5の打ち上げ数はH-IIAやファルコン9の2倍の打ち上げ数を誇っていて高い信頼性がある。さらに、打ち上げが失敗した場合は、打ち上げを無料でやり直すというサービスも行っている。また、アリアン5の打ち上げ場所は緯度が低いため、地球の遠心力を使ってより少ない燃料でロケットを打ち上げることができる。これに対して、日本のH-IIAは、打ち上げるための台がアメリカやEUと比較するとはるかに少なく、打ち上げ機会が限られているというハンデを負っている。打ち上げ機会が限られると、量産化やスケールメリットの観点から打ち上げ価格の競争でもハンデを負うことになる。このような状況から、今後のロケット市場は順当にいけばファルコン9が低価格をいかして、打ち上げ数を増やしていき、アリアン5と同様の信頼性を獲得するだろう。

以上の比較から、日本やEUが商用打ち上げの数を増やしていくためには、現在開発中のロケットがファルコン9と同様の価格を実現する必要がある。この開発中のロケットがどれだけコストを引き下げられるのかは不透明な部分も多いが、日本についていえば打ち上げをするための台が少ないことに起因するコストの増加や打ち上げ機会の減少が起きているので、打ち上げ場の拡張によって日本のロケット産業はある程度、海外との競争ができるようになる。成長産業に位置づけられる宇宙産業で国際競争を勝ち抜くためには、足腰となるロケット産業（輸送サービス）は重要である。特に、自国で打ち上げ技術を獲得しなければ、軍事転用しやすいロケット技術は海外から獲得しにくい。コストカットと打ち上げ場の拡張で商用打ち上げを増やし、ロケット産業を活性化させる必要がある。

討論会報告



報告書を昨年に提出して以降、私が行った調査の意義を度々問われた。ユトレヒト大学でもパリ大学でも個人的な興味から調査をしたのか、どうしてこのテーマを選んだのかという質問を受けた。確かに出発地点として個人的な興味から宇宙産業という分野を選んだが、その中でもロケットを選んだ理由はある。ロケットは宇宙に行くための唯一の手段であり、宇宙というフロンティアを開発するための最も重要なインフラだからである。インフラというと電気、ガス、水道、道路などが一般的には上げられる。これらは我々の生活の基盤であると同時に経済活動の基盤ともいえる。そして新しいフロンティアを開発するにはインフラをまずは整備しなければならない。歴史的には大航海時代における船や港であり、アメリカ開拓の鉄道である。インフラが整備されればそれに合わせた多様なビジネスや産業が成立する。また、ロケットは軍事技術に転用可能であるし、各国が打ち上げられる機会は有限であるため、他国に頼りきることはできない。報告書に書いた通りEUはアメリカに頼って失敗している。そこで、各国、地域がロケットというインフラを自力で提供するためには何が必要なのかについて調査した。

ユトレヒト大学では、ファルコン9だけ民間企業であるという指摘を受けた。確かにファルコン9だけ完全に民間で作っているロケットであるが、ロケットの運営としては、アリアン5もH-IIAも民間企業が行っており、受注競争には参加している。一方で、ファルコン9の様に完全に民間で行えばこれだけ費用を抑えられるということが、今回の比較からわかる。

ファルコン9だけ低価格を実現できた理由についても聞かれた。この点については、調査の中でも民間企業であるからという理由と一部を再利用しているということ以外で興味深い理由を見つけられなかったのが発表で特に言及しなかった。本当はこの理由について深く調べたいが、EUから大きく外れてしまうため浅くなってしまったと考えている。

また、信頼性ではなく価格を重視した理由も問われた。確かに、価格、信頼性、射場のなかでどの点をより重視すべきかという検討は抜けていた。今回の比較は衛星の打ち上げを

意識しており、有人ではないため信頼性よりも価格を無意識に重視していた。もっとこの点について深く考察するべきだったと考えている。

アリアン5も複数の打ち上げ台があるから低価格にできるのではという質問については、アリアン5は既に複数の打ち上げ台のメリットを受けていて、次世代のロケットでもそのメリットを享受できるが、ファルコン9並みの低価格は難しいと回答した。打ち上げ台や射場について改善の余地があるのは日本だけであると考えている。

パリ大学では、ロケットに対して政府の果たす役割や政府がなぜ関与するのかを問われた。確かに、通常の産業であればそこまで政府が関与する必要はないのに、ロケットは政府の強い管理下に置かれている。ロケットは軍事技術から発展したので、最初はどこの国でも政府主導であったが、それが民間に切り替わりつつあるのが、現状である。質問を受けたときは、ただ民間に切り替えていくべきで、技術を持っている政府が後押しするべきだとしか答えられなかったが、後から振り返ればどのようにして民間に切り替えるのが最大の課題であることに気づいた。射場を自由に使えるようにするなどの規制緩和も必要であり、この点については多くの改善できる点があると思うが、その点についてももう少し掘り下げられれば、日本のロケット産業の発展のために何が必要なのかをもっと理解することができた。

また、パリ大学で他に出了た質問としては、日本が火星を目指すかどうかについて問われた。私が、今回調べたロケットの利用方法の一つとして火星の探査や開発はあるかもしれない。しかし、それはロケットの利用方法としてはごく一部であり、火星を視野に入れるために現状の宇宙の民間利用と産業の拡大が必要であると思う。アポロ計画の時は東西冷戦の中で、競争と夢のために月に行くアポロ計画に大量の予算が投じられたが、現状ではそのような予算の投入は現実的ではないので、民間で宇宙の利用を進めている間に自然と市場とフィールドが拡大して火星もフロンティアになることができると思う。

発表を終えて、なぜ自分がこのテーマを選んだのかをもっと最初から考えてそれに沿って研究をすべきだったと反省している。自分が選んだ動機が不明瞭であったために、結論で何が主張したいのかがぼやけてしまった。テーマは十分に絞れていたと思うが、研究の方針について最初に組み立てることがうまくできていなかったと思う。また、調査の仕方についてはあまり資料が見つからずに英語のいくつかの報告書と日本語の複数のネット記事に頼ってしまった。もう少し論文などを調べてみる必要があったと反省している。

A Comparison of the Agricultural Policies in the EU (formerly known as the EEC) and Japan

Erika Okada

*How should the decline in the agricultural population be solved
and what can be done to make agriculture more sustainable?
I have used the EU, France and Japan as case studies.*

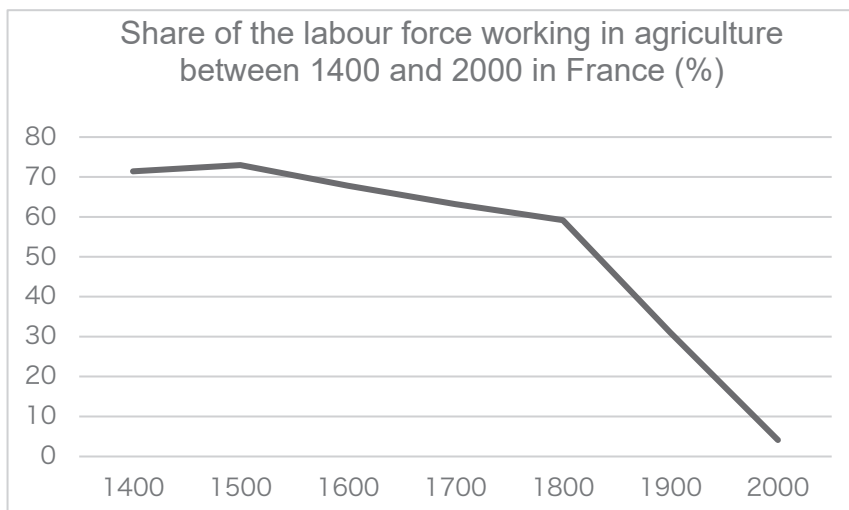
1. Introduction

Hello, my name is Erika Okada and I am a second-year student studying Economics at Hitotsubashi University. My presentation is about comparing the agricultural policies in the EU (formerly known as the EEC), France, and Japan.

Firstly, I would like to start by talking about why I chose this topic. I studied about the decline in agriculture in recent years in my geography class at high school, and also learned about the Common Agricultural Policy (CAP) in Europe in my economics class, which developed my interest in agriculture. Hence, I decided to compare these with the agricultural policies implemented in Japan.

2. The Declining Agricultural Population in France

Figure 1

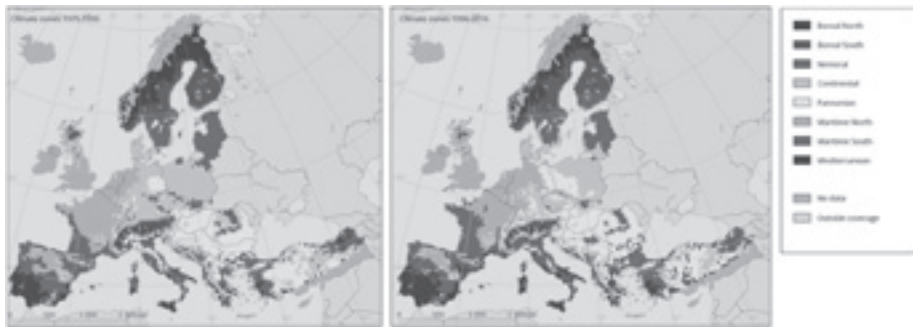


Source: Our World in Data

The graph demonstrates the decline in the agricultural population in France, by showing the share of the labour force working in agriculture between 1400 and 2000. In 1400 and 1500, over 70% of the population worked in agriculture; however in 2000, the percentage fell to 5%. Therefore, the number of people working in agriculture has fallen by 65% over the course of 500 years. The drop in the number of farmers has been caused by growth in the secondary and tertiary sector.

3. Climate change

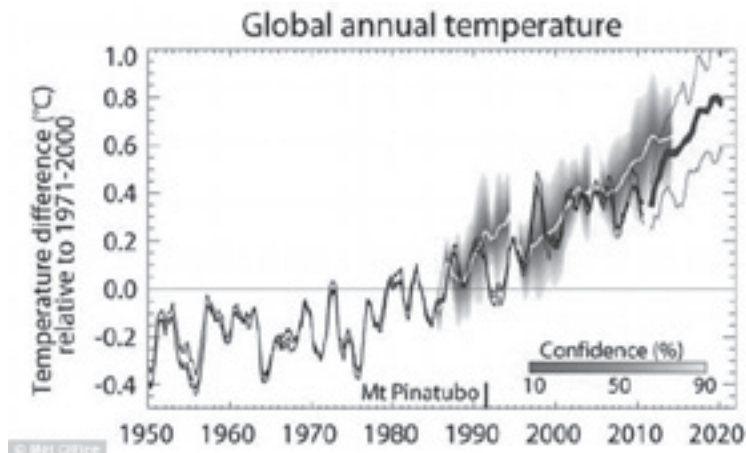
Figure 2



Source: EU Science Hub, 2019

Climate change is making farming increasingly challenging. The two maps show that the climate zones are moving north. For example, areas that previously had a continental climate zone between 1975 and 1995 transformed into a maritime north climate zone between 1996 and 2016. Most of Germany used to be continental but now it is maritime north.

Figure 3



Source: The Guardian, 2013

This line graph shows the temperature difference relative to the period between 1971 and 2000, and proves that global annual temperatures are increasing. Notable increases can be seen after the mid-1980s and temperatures are predicted to continue rising.

Another problem that climate change causes is soil degradation. Soil degradation is when the soil quality declines, leading to a decreased amount of nutrients in the soil. It is a threat to production and has become a serious issue particularly in arid climates, where agricultural productivity has decreased.

4. The Common Agricultural Policy

Now, I will explain the history behind the establishment of the Common Agricultural Policy, in what was called the European Economic Community at the time. It was created by the Treaty of Rome in 1957 and 5 years later, in 1962, market unity was introduced. Market unity refers to when the prices of the same product inside a single market are unified, through the removal of tariffs and quotas which are collectively known as trade barriers. In 1962, the European Agriculture Guidance and Guarantee Fund (EAGGF) was also formed. The role of the EAGGF was to manage the budget and provide subsidies for the CAP. In 1972, farmers got increased support. Farms with high yields were supported in order to further increase their outputs, while farms that suffered due to their geographical location were also given support.

Figure 4

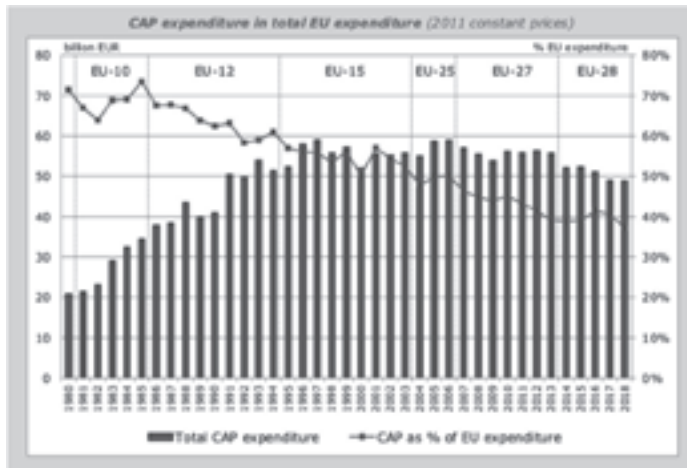


Source: *Economics Online*

This graph represents a simple supply and demand curve, and it shows that when prices are guaranteed at P_1 due to government intervention, farmers will be able to sell their produce for at least P_1 , and their revenue levels are higher than when there is no government intervention.

The aims of the CAP were to provide affordable prices for consumers as well as ensure income for farmers, and to increase productivity so that yields can be maximised.

Figure 5



Source: European Commission, 2019

This graph shows the CAP as a percentage of EU expenditure. In the 1980s, the CAP accounted for around 70% of the expenditure, which clearly was a concern, however in 2018 this fell to 38% by eliminating unnecessary production.

5. Farming methods

Farming conditions have become increasingly difficult as a result of climate change, but I will now be moving on to talk about farming methods which should be implemented. Generally, organic farming in the EU has risen in popularity. In 1997, 1.5% of the farmland in the EU was organic, but in 2017, this increased to 7%. Organic farming increases the quality and water content of soil therefore it will not contribute to soil degradation. Compared to conventional agriculture, it relies less on fertilisers.

However, the issue with organic farming is that although 7% of EU farmland in 2017 was organic, there are disparities in the amount of organic farmland among different countries in the EU. For example, although Austria is outside the EU, 21% of their farmland is organic, in comparison to the Netherlands, where only 2.9% of the farmland is organic. In France, the percentage of organic farmland is 6%. These disparities occur because the subsidies provided by the government towards organic farming differ between countries within the EU.

Another method that may be useful to reduce soil degradation is crop rotation. Crop rotation is when different types of crops are grown in succession on the same patch of land. The benefit of rotating crops is that it prevents them from losing their nutrients and protects them from insects. Leaving the land to recover without growing anything on them, otherwise known as leaving fields fallow, is necessary in order to continue using the farmland for a long period of time.

6. Agriculture in France

France has many types of climate zones – the northern regions are famous for agriculture, the central areas grow wheat and barley, livestock is prevalent in the west and wine is made on the Mediterranean coast. 52% of their land is used for agriculture, making France extremely internationally competitive. Even though a large number of countries rely on France for their imports, French farmers are abandoning agriculture due to the low and unstable income. Top-down solutions to combat this are cuts in taxes and increased subsidies so that farmers have more financial support. Farms can also use their produce as a means to increase their revenue through manufacturing and selling food. Moreover, tourists can interact with various animals, including feeding animals, milking cows and riding ponies by opening farm stays for them.

7. Agriculture in Japan

Conversely to France, farmland only consists of 20% of the total land in Japan. 60% of the farmers are over 65 years old and in order to attract the younger generation to do agriculture, the government has introduced financial support for people under 45, guaranteeing them with 1,500,000 yen, which equates to approximately €12,400. The aim for this support is to cover the start-up costs for the new farmers, and if farmers need financial aid, they can take out a loan with no interest from the Japan Finance Corporation.



Rice field art in Inakadate, Aomori

These pictures of “rice field art” illustrates a rice field which exists in Inakadate, Aomori Prefecture, located in Northern Japan. When pointing one’s camera on their device towards

these special types of rice fields, the device reads it like a QR code, redirecting the visitor to a website where the rice produced in the preceding field can be purchased. It is evident that this implementation of technology has led to a multitude of benefits in comparison to 2008. The number of visitors has increased threefold, sales volume has surged, and entrance fees have become another revenue stream for farmers. Thus, technology can be another way to make agriculture more attractive.

8. Conclusion

I hope you understood some of the main differences in European agriculture and agriculture in Japan. Please feel free to ask any questions you have, and I would be happy to answer them.

References

- ・ 市田 (岩田) 知子「EUの構造政策の展開と経営支援」『J-STAGE』 pp.22-23、https://www.jstage.jst.go.jp/article/fmsj1963/35/4/35_22/_pdf (2020年1月17日にアクセス)
- ・ 森晋也「青森、田舎館村の田んぼアート、人気沸騰の裏に悩み」、『日本経済新聞』2016年7月23日、https://www.nikkei.com/article/DGXLASFB22H46_S6A720C1L01000/ (2020年1月17日にアクセス)
- ・ 「持続可能な農業に向かう農業大国フランス」『Kubota Corporation』2015年12月、<https://www.kubota.co.jp/globalindex/france/01.html> (2020年1月17日にアクセス)
- ・ 「共通農業政策 (CAP) 50周年を迎えて」『EUMAG』2012年9月14日、<http://eumag.jp/feature/b0912/> (2020年1月17日にアクセス)
- ・ 「フランスの農林水産業概況」、『農林水産省』2017年8月3日、http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_gaikyo/fra.html (2020年1月17日にアクセス)
- ・ 「2018年版 農業補助金の制度と仕組み」、『マイナビ農業』、2019年12月9日、https://agri.mynavi.jp/2018_06_07_28817/ (2020年1月17日にアクセス)
- ・ Annes, Wright “Creating a room of one’s own: French farm women, agritourism and the pursuit of empowerment,” HAL, 2015, <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-01564768/document> (accessed January 17, 2020)
- ・ Brouwer, Lowe. *CAP Regimes and the European countryside.*: CABI Publishing, 2000.
- ・ Hickman, “Global Warming: has the rise in temperature ‘paused’?,” *The Guardian*, January 10, 2013, <https://www.theguardian.com/environment/blog/2013/jan/09/global-warming-met-office-paused> (accessed January 17, 2020)
- ・ Roser, “Employment in Agriculture,” *Our World in Data*, <https://ourworldindata.org/employment-in-agriculture> (accessed January 17, 2020)
- ・ Walton, “Methods of Regenerative Agriculture: Cover Cropping and Crop Rotation,” *Green America*, February 27, 2018, <https://greenamerica.org/blog/methods-regenerative-agriculture-3>

(accessed January 17, 2020)

- “Price Stabilisation,” *Economics Online*, https://www.economicsonline.co.uk/Market_failures/Price_stabilisation.html (accessed January 17, 2020)
- “CAP expenditure in the total EU expenditure,” *European Commission*, July 2019, https://ec.europa.eu/agriculture/sites/agriculture/files/cap-post-2013/graphs/graph1_en.pdf (accessed January 17, 2020)
- “Organic crop area continues to rise in the EU,” *Eurostat*, November 16, 2017, <https://ec.europa.eu/eurostat/web/products-eurostat-news/-/DDN-20171116-1> (accessed January 17, 2020)
- “Organic Farming Statistics,” *Eurostat*, January 2019, https://ec.europa.eu/eurostat/statistics-explained/index.php/Organic_farming_statistics (accessed January 17, 2020)
- “Climate change to impact European agriculture as climate zones migrate north” *EU Science hub*, September 11, 2019, <https://ec.europa.eu/jrc/en/science-update/climate-change-impact-european-agriculture-climate-zones-migrate-north> (accessed January 17, 2020)

報告要旨

近年、第三次産業の成長により、第一次産業である農業従事者の減少がEU、そして日本の両方で問題視されている。日本ではフランスのような農業人口の減少だけではなく、日本特有の農業人口の高齢化という問題にも直面している。さらに、環境問題や気候変動も起きていて、農家を悩ませている。本報告の目的は、両国の農業の問題点とその対策を探ることである。結論では、現代社会、そして今後にも通用するような農業改革を提案する。

欧州諸共同体の経済的統合の一環として制定された「共通農業政策」は大別すると「価格所得政策」と「構造政策」の2つにある。「価格所得政策」は政府による農作物の価格に対する介入により、合理的な価格で十分な食料を供給すること、そして農業者に対して公正な所得水準を確保することを目標としている。市場価格が欧州諸共同体の定めた最低価格水準より低い場合は政府が買い入れをし、価格の変動を抑えるため、価格と収入の保証という重要な役割を果たしている。他にも、フランスでの農業離れを促進している原因である収入の低さと不安定さを解消するには通年雇用は必要な条件であると考えられる。さらに、「価格所得政策」のみでは解消しきれない収入の低さと不安定さを解消するためには、乗馬や飼育体験ができる宿泊施設を開くことや、農家で収穫を加工して販売することが有効である。農業以外の産業を行うことによって農業では避けることが難しい閑散期にも収入を確保することが可能となる。

「共通農業政策」のもう一つの柱である「構造政策」とは、農業生産性の向上、そして不利な条件で農業を営む地域や農業市場における競争力を欠く農家を支援することである。気候変動により、生産条件が悪化した地域が増加している。25%の温室効果ガスは農業を通して発生しているものであり、農業が環境変化を引き起こす原因とならないよう、農業生産方式の改革が必要である。この問題は「構造政策」のみでは解決しきれないため、従来

の農業を変えていくことを提案する。有機農法を取り入れることによって、土壌の中にある有機物が増え、土壌の栄養素を保ち、水もちが良くなる。このように有機農法によって、土壌の負担が軽減され、長期的に肥料や農薬に頼る必要性が減ると考える。他には、一定年ごとに生産作物の種類を循環させながら土地を使う輪作は菌や害虫などから土を守り、養分を保ち、土質を劣化させることなく、生産活動の継続を可能とする有効な手段である。

2015年の日本での農業従事者は209万人であり、5年前の2010年から2割減少している。更に、農家の平均年齢も66.3歳、そして60%以上の農業従事者が65歳以上であり、高齢化が顕著である。農家の高齢化と後継者不足によって、農家の減少がより一層加速し、農業のさらなる衰退を招くという懸念点が挙げられる。若い農家を増やすために、45歳以下の農業をはじめの人には150万円(=€12400)の補助金が政府から約束されている。他にも、日本政策金融公庫からは無利子で資金を借りることが可能である。このような政策を通して、政府は農業従事者の若返りを図るよう努めている。日本の農業の問題点として他には食料自給率の低さが指摘されており、これ以上農家が減少してしまう事態は避けなければならない。若い農家を増やすために「ネイチャーバーコード」のような技術を用いて農業を魅力的にする方法が重要である。

従来 of 農業の手法は土や環境への負担が大きすぎることから、今まで通りに農業を行うことは非常に困難である。そのため、ファームステイや食品の加工などを通して収入を確保し、テクノロジーの使用などを通して農業の魅力を高めていくような工夫が大切である。

※Web版日本語レポートでは、EU、日本、GCCの3つの地域の比較を行っている。

討論会報告

1. Presenting at Utrecht University



My presentation at Utrecht University

I received several questions after doing my presentation that I did not consider when creating my presentation. I briefly mentioned the use of technology near the end of the presentation, by talking about reading rice fields in Inakadate on your device like a QR code and getting redirected to the page where you can buy the rice online. This brought up a question where I was asked about the potential of IoT on farming and agriculture. My answer to this question was that rice field art suggests that there is a large potential, however I did not step into the details of IoT in terms of agriculture.

After my presentation, in order to prepare for my next presentation at Paris University, I did some research about the use of IoT in farming. Through “smart farming,” productivity can be enhanced by optimizing the use of fertilisers and monitoring the quality of the farmland in terms of conditions such as temperature, light and soil moisture. Through the real-time data provided by “smart farming,” land management decisions can be improved, and water usage can be better managed – it has been said that 30% of the water consumption could be reduced. I have highlighted the issues about the declining population in farmers in my presentation, and IoT is likely to make farming easier, especially for those that newly enter the market as “smart farming” provides detailed information about the farm, and IoT will definitely be a key factor in the transformation of agriculture in the near future. However, there are downsides to this as well. Initial costs are extremely high to implement “smart farming,” therefore it is highly unlikely that ordinary farmers will be able to afford the technology. Because farming heavily relies on nature and weather conditions, it may be difficult for the technology to correctly analyse and make the right decisions, and there is a possibility that the soil may be damaged instead, especially because the technology is still new.

Another question was about the self-sufficiency of Japanese agriculture. I answered this question by saying Japan’s self-sufficiency rate for food is relatively low, and that they import approximately two thirds of their food.

When exploring this in more detail, I found out that Japan produces 37% of their food on a calorie supply basis and imports the rest, therefore it can be said that they have a heavy reliance on imports. One key reason to this low self-sufficiency rate includes the limited amount of farmland. Only 20% of all land in Japan is farmland, and compared to 1961, when there was the largest amount of total farmland ever in Japan, the amount of farmland has shrunk by 25%. The reason why the amount of abandoned farmland is increasing is primarily because of the ageing population of farmers. 45% of abandoned farmland is because of this reason. Younger generations do not want to become farmers as farming easily gets affected by weather and natural disasters. The government

has been lending the abandoned farmland to people that wish to begin farming, however abandoned farmland is usually unpopular because of the difficult farming conditions, especially in mountainous areas. Utilisation of abandoned cultivated land will result in an increase in production, making Japan more self-sufficient. Subsidies to support farmers that struggle in these farms are likely to act as an incentive however it may not be enough to attract farmers to use the abandoned land.

The minimum price has been implemented in order to keep the price that farmers receive for their produce above the market equilibrium. I was asked a question where I was told that by setting a minimum price, farmers could be likely to overproduce because there are policies where governments buy the excess supply. I replied by highlighting the importance of setting the minimum price because if this is removed, it may lead to farmers leaving the market.

After my presentation, I looked into the minimum price scheme in more detail. Here, setting a quota for the amount of production is important or farmers will overproduce and issues with a surplus in supply such as the butter mountains in the EU are likely to happen, making farmers in Africa suffer as the excess supply gets sent to Africa, affecting their market prices. The EU went through this problem because they have no barriers for trade, however quotas for production would be suitable for agriculture in Japan. That said, Japan imports over 60% of their food, therefore in order to protect farmers in Japan, the price of imports should be controlled so they are more expensive compared to local produce by using taxes and tariffs, or local farmers may go out of business. In 2015, the Japanese government decreased their self-sufficiency target from 50% to 45%, emphasising that it is unrealistic despite providing large amounts of subsidies in order to encourage farmers.

2. Presenting at Paris University



My presentation at Paris University

At Paris University, because the questions asked were thought of prior to my presentation, I was asked to explain in more depth about which farming methods would be suitable for the future. I emphasised that using farmland without damaging it is important, and that new methods such as vertical farming may be more suitable for a country like Japan where farmland is limited.

Through the use of hydroponic and aeroponic growing methods, year-round crop production can be achieved ensuring produce and income for farmers. The government has not been very keen about vertical farming in Japan due to the cost of equipment and artificial sunlight, therefore there have been no subsidies provided. Ordinary farmers therefore face an extreme barrier to vertical farming. In A-plus, located in Fukushima, 20,000 lettuces a day are produced. An upside of vertical farming is that the supply of produce does not get affected by weather conditions or natural disasters, providing stable income for farmers.

Another question was about the use of social media in order to attract new farmers to the market. I was surprised by this question, because in Japanese society, I cannot imagine people being persuaded to become a farmer through the use of social media. I explained that nothing like that is going on at the moment, and that it is unlikely to influence the thoughts of Japanese people enough to persuade somebody to become a farmer.

When researching about the use of media on farming, like the rice field art in Inakadate, the use of social media to promote the produce and the farms itself is becoming increasingly popular. In Hokkaido, the farm *Yumeyasai* successfully tripled their income through the use of social media. Rather than using social media to directly persuade young people to become a farmer, through social media pages used by farmers, the result could be an increased interest in farming by young people.

3. Conclusion

I was asked about the reason to why farm succession is failing at both universities therefore I felt that this should have been included in my presentation, since I highlighted that the ageing population of farmers is a severe issue. I should have also considered possible questions and prepared for them, which I did after my presentation at Utrecht University. When I did my presentation for the second time at Paris University, I was told that I covered all the questions that were thought of prior to my presentation therefore I think that the preparation I did after my presentation at Utrecht University was effective.

When I did my research in order to prepare for this presentation, I used a good number of

both English and Japanese sources, however I used only a small number of books and many of my sources were websites. The reason to why I used a large number of online materials was because they had relatively new figures. Using more books may have been useful though, especially when explaining about the history of the EEC and how agriculture has changed over time.

The History of ESG Investment and What Japan Can Do to Increase It

Rise Komura

How should Japanese government increase its ESG investment in order to achieve SDGs and realize sustainable city?

We will look at cases from the UK and Japan.

1. Introduction

Hello, everyone. Before I start, I want to ask you a question. Do you know what ESG investment means? Basically, ESG stands for Environment, Social, and Governance factors and it is an investment that seeks not only financial but also social returns. In 2018, assets managed using a broad definition of the ESG approach reached \$31trillions, about 30% more than two years before. Please take a look at this chart. This shows the comparison of ESG investment in each country or region between 2016 and 2018. In Japan, the total amount of ESG investment reached \$2trillion, which was 4.6 times as much as in 2016. However, the point is that the amount of ESG investment in Japan is only one-sixth that of the United States and one-seventh that of Europe. Among European countries, the UK, where social impact investment first started, has the greatest amount of ESG investment. So today, I'm going to focus on policies in the UK and how to increase ESG investment in Japan.



2. The History of the ESG Investment

First, let me briefly summarize the history of the ESG investment. It was started by British Protestants during the seventeenth century. They believed that people should invest their money with social responsibility. They brought the idea into the US at the beginning of the twentieth

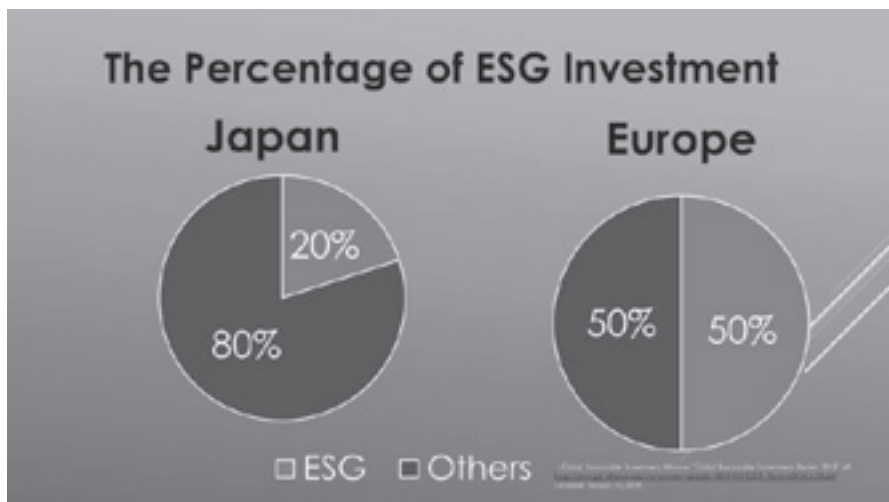
century. At first, ESG investment was just about avoiding investing in companies related to gambling, alcohol, and cigarettes. From the 1960s to the 1980s, ESG investment principles were adopted by the civil rights movement, and were used against the Vietnam War or Apartheid. From the 90s, more and more people began to care about the environment. In 2006, the United Nations announced PRI, or Principles for Responsible Investment, which asked worldwide institutional investors to sign them and start taking ESG into account. The initiative was quite successful in convincing many people that the ESG approach does not contradict what institutional investors are supposed to do, which is to maximize profits for their beneficiaries. PRI says that an ESG approach actually has positive effects on investments. PRI thus drastically increased the number of institutional investors that considered ESG. Also, the great recession in 2008 made lots of people regret the fact that institutional investors had stuck to short-term profit, which also gave a massive boost to the popularity of the ESG investment. In addition, in 2015, the United Nations provided its Sustainable Development Goals. This accelerated the ESG movement and now more than 30% of investment is ESG-related in one way or another.

3. The ESG Investment in Japan

Okay, so let's move on to the next part. In Japan, the majority used to be against ESG investment because of a couple of major events. The worst event was that in 2007, the Social Insurance Agency, which manages pensions, was found to have lost around 50 million pension records due to sloppy data handling. This had such a big impact that the Liberal Democratic Party had to leave office for the first time in 13 years. It also had a disastrous impact on the image of pension funds, which was why they could not take novel actions like ESG investment. However, in 2012, the Abe administration started to try and make Japanese companies consider ESG because he wanted foreign investors to invest in Japanese companies. Foreign investors, in general, care a lot about corporate governance. Prime Minister Abe introduced two codes, the Stewardship Code and the Corporate Governance Code, both of which imitate similar sets of principles in the UK. They try to make sure that institutional investors have very important roles and responsibilities in society. These codes finally changed the way GPIF invests in 2017. GPIF stands for Government Pension Investment Fund and is the biggest investor in the world. Even though Japan had almost no ESG investment until 2014, it is now the third largest ESG investor thanks to GPIF.

4. What the Japanese Government Can Learn from the UK.

However, as I already mentioned, Japan still has a lot of room for improvement considering its GDP. In Japan, ESG investment shares only 20% of total investment compared to 50% in Europe.



Eurosif "European SRI Study 2018"

So, what can the Japanese government do to increase ESG investment? In order to get some hints, let's look at the UK. The total amount of ESG investment in the UK is actually three times as much as that of Japan, which is incredible because Japan's GDP is almost twice as big as UK's. Why is it that the UK has such a large proportion of ESG investment? I think there are two reasons for this. The first is education. The idea that people invest with social responsibility is deeply rooted because of religious and historical factors in the UK. I guess that this is reflected in education. In the UK, junior high school students have to learn how to invest at school, which actually most Japanese college students have no idea about. Under the status quo, I asked a question about ESG investment to 30 students at my college which provides education mainly in law, sociology, economics, and commerce. Sadly, it turned out that only 3 people knew what it meant.



筆者によるアンケート調査。一橋大学国立キャンパス、2019年6月

I suggest that the Japanese government change the compulsory education law to include guidelines on how to invest and why ESG investment can lead to social and financial returns. The second reason is that the UK government economically incentivized each sector to increase ESG investment. For example, the Ministry of the Environment built a fund that lends money to companies which contribute to society. Also, it gives tax breaks to investors who fund companies in the countryside. For these reasons, the UK has lots of ESG investment. On the other hand, the Japanese government has tried to increase ESG investment simply by announcing two “Codes”, which I don’t think is enough. I believe it's going to work if the government lends money to companies which work for ESG or gives tax cuts to investors that contribute to ESG.

5. Conclusion

In conclusion, Japan has made rapid progress in ESG investment but I strongly believe it could do it better. The examples from the UK suggest that changes in education or economic incentivization will work well for increasing ESG investment.

References

日本語文献

- ・ 足達英一郎「増える ESG 投資の運用残高 3300 兆円、質向上課題に」『日本経済新聞』、2019 年 4 月 29 日。 <https://www.nikkei.com/article/DGXXKZO44195860V20C19A4X93000/> (2020 年 1 月 15 日にアクセス)。
- ・ 足達栄一郎、村上芽、橋爪麻紀子『ESG 読本』、日経 BP 社、2016 年。
- ・ 小方信幸「わが国における ESG 投資の現状と展望」、2018 年。 https://www.jstage.jst.go.jp/article/cjaros/10/3/10_8/_pdf/-char/ja (2019 年 7 月 25 日にアクセス)。
- ・ 鎌田浩子「イギリスにおける金融教育」、2015 年。 <http://sir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/7929/1/kusiroron-47-04.pdf> (2020 年 1 月 15 日にアクセス)。
- ・ 木村富美子「ソーシャルファイナンスの動向—SRI から ESG への展開—」、2018 年。 tusinkyoikuburon-syu0_21_02.pdf (2019 年 7 月 25 日にアクセス)。
- ・ 中村みゆき「公的機関投資家における ESG 投資戦略 —政府系ファンド (SWFs) の考察から」、2018 年。 file:///C:/Users/rise0/Downloads/sokakeieiron-syu42_2_2.pdf (2019 年 7 月 25 日にアクセス)。
- ・ みずほ総合研究所「年金コンサルティングニュース SDGs と ESG 投資」、2018 年。 https://www.mizuho-ri.co.jp/publication/sl_info/pension/pdf/pension_news201811.pdf (2020 年 1 月 15 日にアクセス)。
- ・ 宮崎正浩『持続可能性経営—ESG と企業価値との関係を考える—』現代図書、2016 年。

英語文献

- ・ Eurosisif “European SRI Study 2018”, <http://www.eurosisif.org/wp-content/uploads/2018/11/European-SRI-2018-Study.pdf> (accessed January 15, 2020).
- ・ Global Sustainable Investment Alliance ”Global Sustainable Investment Review 2018” p9, http://www.gsi-alliance.org/wpcontent/uploads/2019/03/GSIR_Review2018.3.28.pdf (accessed January 15,2020)

報告要旨

近年、ESG投資は世界中で盛り上がりを見せている。ESGとはEnvironment（環境）、Social（社会）、Governance（企業統治）の略であり、ESG投資とは経済的利益だけでなく社会への影響も考慮した投資のことである。ESG投資はその名前や定義が時代や地域によって異なるが、ESG投資とほぼ同義である社会的責任投資の歴史は長く、17世紀にイギリスのプロテスタント教徒が初めて社会的責任投資を始めたといわれている。1990年代以降、グローバル化が進み、世界中で環境や社会問題に対する意識が高まり、ESG投資は欧米を中心として拡大した。国連による2006年のPRI（責任投資原則）や2015年のSDGs（持続可能な開発目標）で勢いが加速し、広義のESGアプローチによる資産運用額は2018年に30.7兆ドル（約3300兆円）になり、2016年からの2年間で3分の1ほど増加した。日本では、2014年頃まではESG投資はほとんどなかったが、安倍政権によって海外投資家を意識したコーポレートガバナンス・コードやスチュワードシップ・コードなどが定められ、また2017年に日本の年金基金を運用する世界最大の機関投資家GPIFがESGアプローチをとるようになった。その結果、日本のESG投資総額が2兆ドル（約220兆円）に達し、二年間で4.6倍にも増えたため、世界三位のESG大国となった。

しかし、依然として日本はヨーロッパの国々やアメリカに比べて後れを取っている。日本のESG投資総額はアメリカの6分の1、ヨーロッパの7分の1にすぎない。ヨーロッパの中でもイギリスは、そのGDPが日本の半分程度であるにもかかわらずESG投資総額は日本のその3倍もある。逆に言えば、日本が成長する余地は大きいと考えられる。日本は他の国に比べてESG投資が普及し始めるのが遅かったために発展途上といえる。このレポートでは、欧米中心のESG投資の歴史とともに、おもにESG投資の発祥地であるイギリスに注目し、日本政府がどのようにすればESG投資をさらに増やすことができるかについて考える。その理由はイギリスが、政府主導でESG投資を促し、成果を上げていることである。日本がイギリスから学ぶべき点が二つあると筆者は考える。日本では、ESG投資の知名度が他の国に比べて低いだけでなく、そもそも金融リテラシーが著しく低い。イギリスでは法律によって中学生が投資などについて学ぶことが定められているが、日本のほとんどの大学生はそれについて知識が不足している。よって日本の義務教育で金融リテラシーを高め、その際にESG投資についても学ぶべきである。二つ目は、ESG投資に貢献する様々なセクターに補助金を出すことで経済的なインセンティブ付けをすることだ。日本政府も外

部機関が環境対応を審査する費用を補助することでグリーンボンドの発行支援などを始めたが、さらなる拡大が必要であると考えている。

討論会報告（ユトレヒト大学）

先ず場や学生の雰囲気について感じたのは二つのことです。一つ目は、学生が様々な国から来ていたということです。私が聞いただけでも、オランダだけでなく、ドイツ、イタリア、さらにはアフリカのエリトリア出身の学生がいました。質問の中でも、様々な国の事例を聞くことができるとも勉強になりました。二つ目に、非常に積極的に質問する空気ができていたということです。途切れることなく、様々な方向から質問が飛んできて、欧米の教育と日本の教育に差を感じました。

質問は二つ出ました。「なぜ政府系機関がESG投資の増加のために重要なのか」、「イギリスという他国の成功例を、多くの異なる点を持つ日本に単純に当てはめることができるのか」と考えるのはなぜか」というものでした。一つ目の質問に対しては、「日本ではだれもESG投資を始めていない段階では民間セクターが前例の少ないため、民間主導で始めることはリスクだと感じられるため難しい。そのため政府が補助金や税の優遇制度を活用することで民間がESGの流れに乗るきっかけになると考える。」と答えました。この回答に関しては、できたことに関しては最後まで相手の質問を確認し続け、丁寧な回答ができたと思います。しかし改善すべき点としては、この質問は想定できる質問だったにもかかわらず、準備段階での思考が浅かったために回答に時間をかけすぎてしまったところです。二つ目の質問に関しては「確かに宗教的な部分や歴史的な部分を変えられないが、民間企業は経済的利益をもとめるのが万国共通であるため、経済的インセンティブは機能すると考える。教育で投資について学ぶことに関しても、実用的なものであるため宗教や文化を超えてうまく機能すると考える」と回答しました。この回答に関しては、良かった点は、論理的に的確な回答ができたことですが、抽象的な回答に終始してしまったため、具体例などを交えることが改善点として挙げられると思われます。

以下は問題設定、調査の仕方、分析の視点に改善点があったのかについてです。問題設定に関しては政府主導で日本でESG投資を増やすという目的を達成すること、というものでした。しかしなぜそもそもESG投資が社会的・経済的利益につながるのかという部分についての勉強の甘さと言及の少なさのために、僕の行った研究自体の重要性がうまく伝わらなかったと考えます。また、ヨーロッパの学生の方が日本と比べてESG投資などへの関心も強いと想定していましたが、実際には一人の先生を除き誰も知らなかったため、関心を読み違えていました。しかしESG投資が世界の投資の30%以上を占める今、このトピック自体は十分に意義のあるものだという考えは変わりませんでした。文献に関してはESG投資はここ数年で大きく状況が変わったため、紙媒体の書籍よりもネットの論文を中心に

行いました。それに関しては理にかなったアプローチだと考えましたが、問題は海外の論文やデータ調べの少なさです。日本人の視点から見たものが多くなってしまったため、海外の事例を交えればもっと関心を持ってもらえたと思います。

まとめると、現地の人々のESG投資に対する関心の程度がわからなかったため、まずはそのトピック自体の重要性を伝え方に工夫をすべきだと考えました。

討論会報告 (パリ大学)

先ず、教室に入って驚いたことは日本語学科の学生が60人程度と想像以上に多かったということです。彼らは歴史や文化、食事、アニメ、ゲームなど様々な切り口から日本に興味を持ち、日本に行ったことのある学生も何人もいました。「日本大好き」と目をキラキラさせてくれる彼らと話して、世界からみた日本の良さを客観視し、日本人であることのほこりを感じることができました。

質問は全部で3つ出ました。「個人としてESG投資をすることはできるのか。できる場合はどのようにしてできるのか」、「SRIとESG投資の違いは何か」、「現在の政府の動きは十分か」の三つです。一つ目の質問に対しては、「個人がESG投資をすることはでき、それは例えば証券を買う際のポートフォリオに、環境への良い影響をもたらさうる産業を含むことを通してできる。」と回答しました。この回答に関して改善すべき点だったのは、そもそも投資自体への理解が想定していたほどなかったため、どこから説明すべきか確認してから回答すべきだったということです。二つ目の質問に対しては、「大きな違いはないが、歴史的にはSRI(社会的責任投資)という用語が使われ、国連が2006年にPRI(責任投資原則)を宣言してESG投資という用語が初めて使われて以降、ESG投資という用語が使われるようになった。この国連の意図はそれまでSRIに反対していた人々に受け入れられやすいように新しい名前を考えたといわれている。」と答えました。この回答に関してよかった点は、なぜほとんど同じ意味を持つ二単語が存在するのかという背景まで答えられた点です。一方、改善すべき点は、確かにある論文の中で上述の国連の意図に触れたものはありましたが、その情報がどこから来たものなのか、どれほど信頼できるものなのかは回答時には確証がなかったということです。また三つ目の質問に対しては「数年前までは全くと言っていいほど不十分だったが、最近は東京都が環境債への経済的援助をするなど公的機関の積極的な働きもみられる。」と回答しました。この回答に関してよかった点は具体例を挙げられたことです。一方、改善すべき点は、具体例といっても、どこの企業がどのような形で恩恵を受けたのかという細かい部分に関する調べが不十分であったことです。環境債を発行するために必要な第三者の調査依頼に関する費用を東京都が負担するという事は調べていたものの、説明が複雑になるということで省いてしまいましたが、努力して丁寧に説明すべきだったと考えました。

研究テーマに関する今後の課題としては、そもそもなぜESG投資が経済的・社会的利益

につながるのかに関する調査と、具体的な企業名などを交えた例に関する調査を進めたい
と考えました。

Initiatives for the Fourth Industrial Revolution in Japan and Germany

Ryo Takizawa

*For reviving their manufacturing industries,
what should developed countries do?
What do Japan and Germany have as strengths?*

1. Introduction

Hi, my name is Ryo Takizawa. I'm a Hitotsubashi University student and major in Economics. I'm especially interested in Industrial Location Theory. These days, many factories are located in developing countries, such as Southeast Asia, Mexico, and South Africa. I researched the probabilities of reviving manufacturing industries in developed countries, and the "Fourth Industrial Revolution" has been given as one solution.

First, I'll explain about what the Fourth Industrial Revolution is and its merit. After that, I'll talk about initiatives and strengths that have been undertaken in Japan and Germany. In this presentation, I'll focus on Japan and Germany. These two countries have much in common. Both countries have sophisticated technologies. There are many hard-working workers in both. And it's sad that these two countries' economies are not growing so much at the moment.

Finally, I'll focus on Japan. I'll talk about what Japan should do to prepare itself for the Fourth Industrial Revolution.

2. What is The Fourth Industrial Revolution?

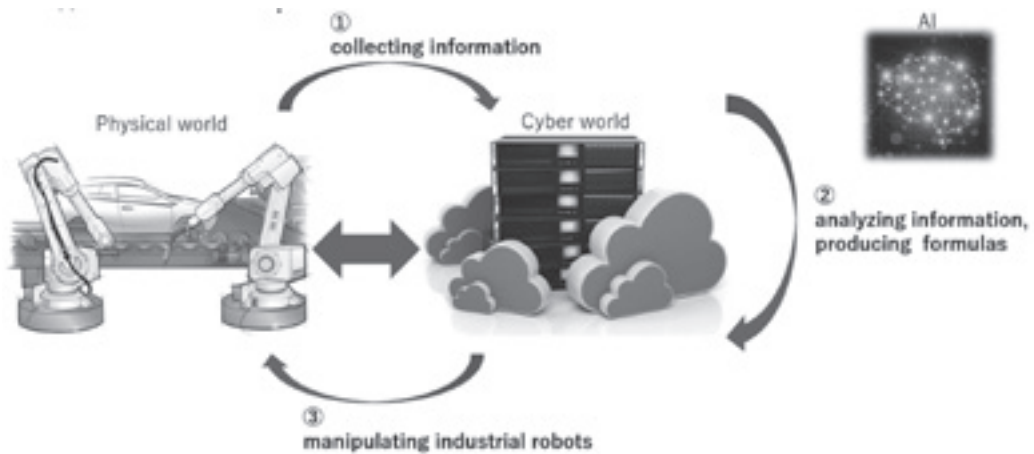
First of all, I have to mention that the Fourth Industrial Revolution hasn't been realized yet. The Japan government says that it will occur in almost twenty or thirty years.

The goal of the Fourth Industrial Revolution is the realization of "smart factory". "Smart factory" requires only minimal labor by humans who supervise computers. Industrial robots replace manpower as much as possible. By cutting labor cost, smart factory can reactivate developed countries' manufacturing industries.

Smart factory will be built taking advantage of Cyber Physical System, CPS. CPS is a combination of some cutting-edge technologies, and in particular the Internet of Things (IoT), AI (Artificial Intelligence), cloud systems, Big Data analyzation and industrial robot. Some developed countries are developing these cutting-edge technologies.

CPS has three steps, collecting real data, analyzing these data, and operating industrial robots. First, sensors in industrial robots collect various kinds of data from the real world and accumulate

them into the cyber world. Second, in the cyber world, AI systems analyze this collection of big data and produce formulas. Third, AI systems manipulate industrial robots according to the formula.



The main point of CPS is that it is a combination of the physical world and the cyber world. This combination is the reason why using CPS can be called a revolution.

Now, let's move on to actual efforts that have been made in Germany.

3. The initiatives of Germany

In 2011, the Fourth Industrial Revolution was presented by the German government for the first time in the world. In their presentation, the German government released a project, "industry 4.0". Industry4.0 is an organization to achieve the Fourth Industrial Revolution. Many companies in Germany participated in industry4.0, such as BMW, Mercedes, SAP and so on. Germany has two main strengths. First strength is its vision of a Fourth Industrial Revolution. Because Germany showed it for the first time in the world, Germany leads the world to the Fourth Industrial Revolution now. Germany's second strength is international standardization. Industry4.0 already tried to take an initiative about international standards related to IoT network technology. Industry4.0 participants started to cooperate with IoT promotion organizations in the United States. The US has the most developed IT technologies in the world. Thus, this kind of collaboration is Germany's second strength.

Next, let's move on to Japan's efforts and strengths.

4. The initiatives of Japan

In 2016, the Japanese government released "Society 5.0". Society 5.0 is a human-centered society that balances economic advancement with the resolution of social problems by a system that highly integrates the cyber and physical worlds. To sum up, in Society 5.0, people start to use CPS

systems in daily life. In order to realize society 5.0, the Japanese government announced “Connected Industries” in 2017. Connected Industries is a new concept framework in which industries will create new types of added value and solutions to various problems. The Japanese government started giving subsidy to companies.

Connected Industries focuses on Japanese strengths. First, Japan has sophisticated technology. Japan has a lot of high technology data because of the industrial prosperity, it achieved before developing countries’ industries started growing rapidly. Second, Japan has the best industrial robot technology in the world. For example, Yaskawa Electric Corp has the biggest share of such technology in the world.



5. For the Fourth Industrial Revolution

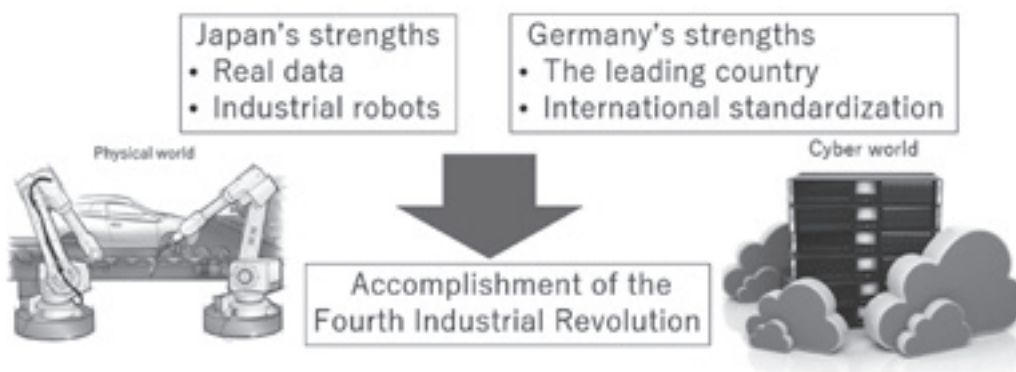
I have briefly explained what the Fourth Industrial Revolution is and the initiatives that Japan and Germany have undertaken in preparation for it. Finally, I’d like to argue that Japan should pay attention to two points regarding the Fourth Industrial Revolution.

First, Japan should take advantage of its strengths – high technology data in the physical world. High technology data in the physical world is an essential part of the Fourth Industrial Revolution. These superior know-hows will be absorbed by deep learning technology. In addition to superior know-hows, Japan has the best industrial robot technology. To sum up, Japan has the initiatives in the physical world. Japan should place superior know-hows and industrial robot technology as the core achievement of the Fourth Industrial Revolution. The Japanese government should encourage different Japanese businesses to collaborate with each other because know-hows and robot technologies sometimes exists in small factories or small companies.

Second, in addition to domestic collaboration, Japan should collaborate with foreign countries, such as Germany. Germany has strengths in the areas of international standards and as the global leader when it comes to getting ready for the Fourth Industrial Revolution. Germany namely has the initiatives in the cyber world. Thus, if Japan and Germany start to collaborate in earnest, this revolution will come about earlier.

6. Conclusion

In conclusion, the Fourth Industrial Revolution is needed to reactivate manufacturing industry in Japan. Japan should take advantage of its strengths, i.e. real data and robot technology, and cooperate with other countries, such as Germany.



References

- ・株式会社日立製作所「平成28年度IoT推進のための社会システム推進事業（スマート工場実証事業）報告書」2018年3月、https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono_smart_mono/H28SmartFactory_DataProfile_Security_Report.pdf（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「2015年版ものづくり白書 第3章製造業の新たな展開と将来像 2.欧米における動向」2015年6月9日、https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/mono/2015/honbun_pdf/index.html（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「『Connected Industries』東京イニシアティブ2017」2017年10月2日、<https://www.meti.go.jp/press/2017/10/2017100212/2017100212-1.pdf>（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「『Connected Industries』Tokyo Initiative 2017」2017年10月2日、https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/connected_industries/pdf/initiative2017.pdf（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「今後の基準認証の在り方—ルール形成を通じたグローバル市場の獲得に向けて—」2017年10月11日、https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20171011001_1.pdf（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「2018年版ものづくり白書 第1章我が国ものづくり産業が直面する課題と展望」2018年5月29日、<https://www.meti.go.jp/press/2018/05/20180529001/20180529001.html>（2019年10月10日にアクセス）。
- ・経済産業省「『Connected Industries』関連政策の進捗等について」2018年6月、<https://www>

- meti.go.jp/policy/mono_info_service/connected_industries/pdf/201806_progress.pdf (2019年10月10日にアクセス)。
- ・ 経済産業省「『Connected Industries』実現に向けた官民の取組の進捗と課題」2018年10月、<https://www.meti.go.jp/press/2018/10/20181018007/20181018007-1.pdf> (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ 経済産業省「2019年版ものづくり白書 第2章我が国ものづくり産業が直面する課題と展望」2019年6月11日、https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/mono/2019/honbun_pdf/index.html (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ 総務省「平成30年度 情報通信白書」2019年7月、<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd102300.html> (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ 内閣府「日本経済2016-2017 一好循環の拡大に向けた展望— 第2章新たな産業変化への対応」2018年1月、https://www5.cao.go.jp/keizai3/2016/0117nk/n16_2_0.html (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ 内閣府「第5期科学技術基本計画」2017年1月22日、<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html> (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ ネットワンシステムズ株式会社「スマートファクトリー化がなぜ必要なのか、その理想像と越えるべき3つの壁」2018年6月27日、<https://monoist.atmarkit.co.jp/mn/articles/1806/20/news005.html> (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ METI Journal「コネクテッドインダストリーズって何？」2017年6月14日、<https://meti-journal.jp/p/2/> (2019年10月10日にアクセス)。
 - ・ Federal Ministry for Economic Affairs and Energy, “What is Industrie 4.0?”, unknown, <https://www.plattform-i40.de/PI40/Navigation/EN/Industrie40/WhatIsIndustrie40/what-is-industrie40.html> (accessed October 10, 2019).
 - ・ Federal Ministry for Economic Affairs and Energy, “CeBIT under the sign of Industry 4.0: Germany and Japan consolidate partnership and strive together for global standards and IT security”, Merch 23, 2017, <https://www.plattform-i40.de/PI40/Redaktion/DE/Kurzmeldungen/2017/2017-03-23-cebit.html> (accessed October 10, 2019).
 - ・ Federal Ministry for Economic Affairs and Energy, “The common strategy on international standardization in field of the Internet of Things/Industrie 4.0”, February 21, 2018, https://www.plattform-i40.de/PI40/Redaktion/DE/Downloads/Publikation/common-strategy-international-standardization.pdf?__blob=publicationFile&v=5 (accessed October 10, 2019).
 - ・ Federal Ministry for Economic Affairs and Energy, “Pan-European cooperation on Industry 4.0 standardization”, July 19, 2018, <https://www.plattform-i40.de/PI40/Redaktion/DE/Kurzmeldungen/2018/2018-07-19-tricoop-standardisierung.html> (accessed October 10, 2019).
 - ・ Federal Ministry for Economic Affairs and Energy, “Japan and Germany are leading the way - leveraging common digital potential”, November 16, 2018, <https://www.plattform-i40.de/PI40/>

報告要旨

本報告の目的は、かつて世界一の工業力を誇った日本やドイツがCyber Physical Systemを通して工業分野で復権する可能性について言及することである。

ドイツや日本などの先進国の工業力はかつて世界一であった。しかし、ここ数年ないし数十年、安価な労働力を背景に、中国や東南アジア、メキシコなどの発展途上国の工業が急成長している。今でも先進国は発展途上国よりも先端技術力では優れているが、工業生産自体は発展途上国が中心となっている。再び先進国が工業生産で復権するためには、第四次産業革命を達成することが可能性の一つとして考えられる。第四次産業革命では、「人のいない工場」である「スマートファクトリー」が実現されると考えられている。スマートファクトリーでは人件費を削減できるため、これまでより安く生産ができる。

第四次産業革命において軸となる技術はCyber Physical Systemである。つまり、現実世界と仮想世界を協同させることである。具体的な手順としては大きく三段階に分けられる。まず、センサーを搭載した産業用ロボットが現実世界の情報を収集する。次に、その収集したデータをIoT (Internet of Things) 技術を通して、仮想世界である、クラウド上に集める。そして集めたデータをビッグデータ分析技術によって解析する。最後に、解析により最適化された分量や力加減といった生産方式をAIが産業用ロボットに指令し、生産する。

ドイツは世界で最初にスマートファクトリー化に言及した国である。2011年の「High-Tech Strategy 2020 Action Plan」という戦略的施策の1つとして「Industry 4.0」を提唱した。以降Industry4.0として産官経が連携して第四次産業革命に向けて取り組んでいる。ドイツの強みとしては、世界で初めて言及したことによるリードや、IT技術で優位を持つアメリカのIoT推進団体との連携がある。特にアメリカのIoT団体「Industrial Internet Consortium (IIC)」とは、IoT技術の国際規格策定について協力することに合意しており、国際標準化において、ドイツはイニシアティブを持つ。

ドイツやアメリカなどに比べるとかなり遅いスタートとなっているが、日本は2017年に「Connected Industries」を提唱した。データを介して、機械、技術、人など様々なものがつながることで、新たな付加価値創出を目指す産業のあり方である。IoTによる付加価値だけではなく、人と機械・システムの協働による付加価値 (Internet of Human) も含まれる。具体的政策としては、重点分野への補助金の拠出や、企業間のデータ連携のための制度創設を行う。日本の強みとしては、まず、現場での技術力がある。中小企業での技術的な暗黙知はディープラーニングと相性が良く、今後産業用ロボットとAI技術の進歩によって、スマートファクトリーの実現に大きく貢献する。また、もう一つの強みとして、産業用ロボットの技術力、シェアが世界一であることがある。安川電機は世界一のシェアを誇り、ファナックも世界三位のシェアを誇る。国内で稼働している産業用ロボットの数も世界一である。

まとめとして、こうした先進国はもともと持つ強みを生かしたうえで、積極的な国際協力をすることにより、早期に第四次産業革命を達成するべきである。特に、日本とドイツは産業構造が似ていることや、経済成長が伸び悩んでいることから、二国間の協力には特に意味がある。

討論会報告



ユトレヒトでは三つの質問があった。一つ目は、ドイツと日本の間での具体的な協力は行われているのかという質問であった。事前に調べていたので、事実私私の意見を添えて答えることができた。2017年にハノーバー宣言にてドイツと日本の大臣が第四次産業革命に向けて協力を進めることを同意したという事実と、それではまだ具体性に欠けるので協力として不十分であるという私の意見である。事前に想定し、調べていたのでしっかりと答えることができた。

二つ目は、第四次産業革命が達成された後、人は働ける場所があるのかという質問であった。これは、第四次産業革命の実現に際して、よく危惧されている問題であり、私の見解を答えることができた。私は、日本で既にIoT技術を導入している企業を具体例としてあげ、コンピューターを監視する役として人が必要であることには変わらないことを理由に、今後も最後は人間が手を加えることになるだろうと答えた。また、工場での作業員としての働き口は確かに減るだろうが、コンピューターを最終的に管理する人は必要であると答えた。後から振り返ると、この問題については専門家でもまだまだわからないことがあり、第四次産業革命の進展に合わせて議論されるべき問題だということを加えると、さらに良い回答になったと考える。

三つ目は、第四次産業革命のための高度な技術を作るために、教育システムをどう変えるかという質問であった。対して私は、日本政府は教育分野にあまりたくさんのお金を出していないのが現状であり、教育への補助金をかけるべきであると答えた。教育を切り口

とする質問は事前の想定から抜けており、具体的な事例を言うことはできなかった。例として日本政府が医療制度や国民保険制度にお金をかけていることを付け加えられると、論に具体性が増してよりよい答弁になっていたはずだ。



パリでの討論では、私一人に5人程の学生がつき、少人数でプレゼンをしたため、ユトレヒトより多くの討論ができた。また、彼らは日本語学科であり経済に強くなかったので、ドイツと日本の最先端技術をテーマとした私のプレゼンを難しかったと言っていた。しかし、積極的に質問をしてくれたので活発で距離の近い議論ができた。日本語学科の学生は、意欲的に日本語を学んでいて感銘を受けた。

一つ目の質問として、第四次産業革命によって先進国と開発途上国の経済格差が広がるかどうかという質問があった。私は、第四次産業革命後すぐは確かに格差が広がるかもしれないが、次第にスマートファクトリーも開発途上国に移っていけようし、多国籍企業が開発途上国での生産を続けるだろうから結果としてそこまで広がらないと回答した。後から振り返ると、もっと根本的なところから丁寧に答えられたらよかったと思う。つまり、現在は第四次産業革命を実現しそうな企業は様々な国で多国籍に活動しており、先進国での産業革命の恩恵も開発途上国に以前の産業革命よりも早くもたらされるだろうということだ。鋭い質問でたじろいだが、彼らが日本語を専攻する学生であることを考えて、より丁寧に答えるべきだったと思う。少人数での討論だったので、質問の意図を私から聞き出して答える姿勢をもっと出せたら良い討論になった。

パリでのその他の質問は、ユトレヒトでの議論と被ったものや、第四次産業革命自体についての質問が多かった。私はユトレヒトでの議論を生かし、第四次産業革命後の社会について、より具体的に話すことができた。第四次産業革命後の社会は私にとって良いものになるだろうし、実現してほしいと伝えた。また、ユトレヒトでの議論とパリでの議論の間の振り返りが有益だった。その振り返りでは、私が第四次産業革命を良いものと捉えているのか悪いものと捉えているのかをパリでは伝えようと反省し、それがしっかりとできたのはとても良かったと思う。

事前準備の総括を述べると、全体的には想定範囲内の質問であったので、それなりに

答えることができた。改善すべき点としては、日本語以外の文献をもっと読んでおけばよかったという点である。理由は二つある。一つ目の理由として、日本語以外の文献を読めば、第四次産業革命に関する語彙や表現を学んでいたと思うため、それらを利用し語学的にもっとスムーズに答えられたと考えるからである。また、二つ目の理由として、日本語以外の文献により、欧米の人々の論点を学んでいたと考えるからである。日本人著者の本は、第四次産業革命についての知識が中心のものが多く、それに伴い発生する社会問題や社会の変えるべきところについての言及は決して多くはない。一方で、今回の研修で討論した欧州の学生は、第四次産業革命自体よりもその問題点にフォーカスした質問や、私がどう考えているのかを質問した。このような発想の質問が多いと把握していたら、ユトレヒトでも私自身が第四次産業革命の実現についてどう考えているのかを事前に考え、もっと説得力のある回答をできていた。



最後に、本研修の討論会では、自分が問題に対してポジティブなのかネガティブなのかをはっきりさせることが大事だと学んだ。自分の意見をはっきりとさせることで、討論の際に説得力のあることを言え、討論相手も問題に対する自分の立場を持つことができるのだと思った。また、自分の意見を持つことで、事前準備もより軸がはっきりすると思うので、より説得力があり具体性のある説明をすることができたと思う。

Renewable Energy Policy in Germany, Comparing with Japan

Asahi Kurita

I am going to research what the differences between Germany and Japan are in terms of renewable energy. Japan has little fossil fuels in its land, so renewable energy, which Japan can generate on its own, is important to solve energy problems. Then, what can we do to spread renewable energy?

1. Introduction

Hello, everyone. I am Asahi Kurita. I'm in the faculty of social sciences at my University. I'm glad to see you today to discuss this. And thank you for coming here to listen to our presentation. My presentation topic is renewable energy. So today, I am going to talk about renewable energy policies in Germany, comparing with those of Japan.

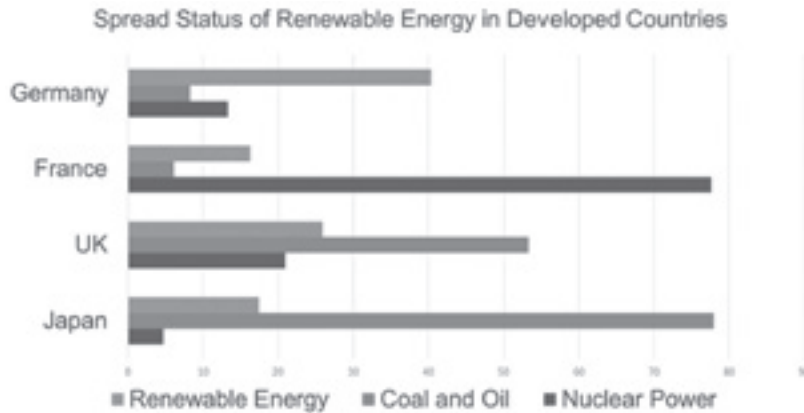
I think Germany is one of the most successful countries in terms of environmental problems in the EU. For example, the German government has clearly decided to stop using Nuclear Plants as an electrical source and aim to make its percentage 0% in the future, although they had used nuclear power like Japan until a while ago. In addition, they are focusing on generation of energy made by renewable energy and are currently successful to introduce it.

On the contrary, Japan now seriously depends on fossil fuel and thermal generation, but Japan doesn't have fossil fuels in its land at all. If some serious troubles concerning energy happen overseas, Japan cannot provide enough power generation by itself. Also, thermal-power generation has a bad impact on the environment such as emitting greenhouse gas. Thus, I guess Japan should process a change in its energy component as soon as possible. So, I suggest Japan follows Germany to spread renewable energy as their model.

Therefore, I think it is meaningful for Japan to compare their differences in detail.

2. Spread status of renewable energy in advanced countries

First, please take a look at this chart. This chart shows the spreading status of renewable energy in developed countries. According to this picture, Germany is the most advanced country in renewable energy out of the major European countries (excluding hydropower). The reason why I excluded hydropower from renewable energy is because it has a bad impact on the environment, and it is almost impossible for Japan to develop new hydropower plants because of the shortage of suitable rivers for dams. Therefore, I think it is not proper to include hydropower.

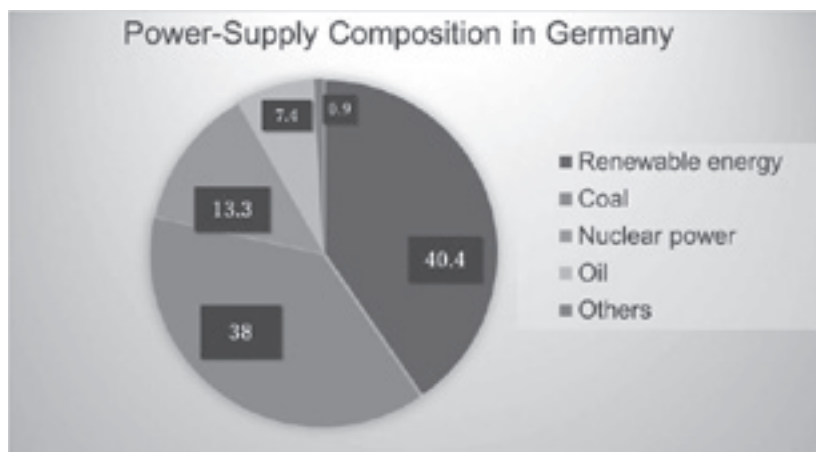


「自然エネルギー財団」HP「2018年の電源構成：世界15カ国（更新日：2019.9.19）」
 (<https://www.renewable-ei.org/statistics/international/>) を元に筆者作成

3. Renewable energy policies in Germany

OK, let's move on to the next slide. This shows the ratio of renewable energy for total power generation. Renewable energy accounts for 40.4% in Germany, and it accounts for 17.4% in Japan in 2018. Japan lags double score with Germany. So, here is a question. Why is the difference between Japan and Germany so large?

To find an answer, let's move to the next slide. This chart shows power compositions of Germany. As you can see, renewable energy accounts for the biggest part of Germany. Why does Germany succeed in spreading renewable energy like this? In Germany, an important system to spread renewable energy has been introduced a while ago: it is called the FIT system. Then what is the FIT system? Let me explain it. The FIT system means Fixed-Price Purchase System. It is a law which forces the power companies to buy power generated by renewable energy at a certain price.



(https://www.energy-charts.de/downloads/electricity_production_germany_2018_2.pdf)
 を元に筆者作成

This slide shows a series of Laws on the renewable energy in Germany. At first, in 1991, Law on Feed-in of Electric Power from Renewable Energy into Power Grid was enacted. The FIT system was first established in Germany by this law. However it lacks attraction because it didn't have that many new points.

Later, in April 2000, Law on Renewable Energy was enacted. By this law, renewable energy was spreading increasingly than before.

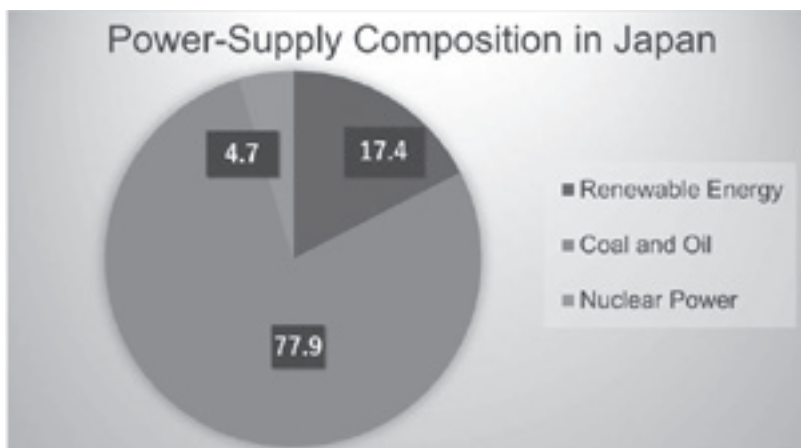
A Series of the Laws on Renewable Energy in Germany

In 1991, Law on Feed-in of Electric Power from Renewable Energy into Public Power Grid was enacted, and This law has started FIT system in Germany

In April in 2000, Law on Renewable Energy was enacted, and renewable energy were spreading increasingly after this law

4. Renewable energy policies in Japan

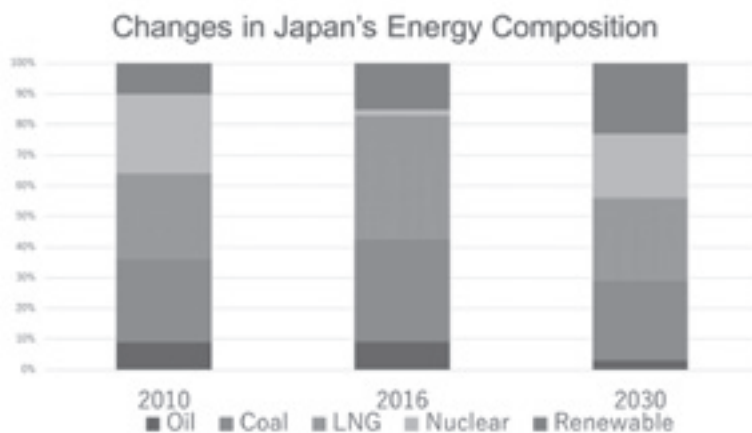
On the other hand, this shows Japanese power composition in 2018. Coal and oil account for the biggest part by 77.9%. You can see Japan completely depends on fossil fuel. A while ago, Japan depended on nuclear power by 20-25%, so coal and oil were not so much of a big figure like this chart until 2011.



Isep 「2018年（暦年）の国内の自然エネルギー電力の割合」
(<https://www.isep.or.jp/archives/library/11784>) のデータを元に筆者作成

In 2011, as you may know, a big nuclear accident happened in Fukushima, a Japanese prefecture, because of a big earthquake and Tsunami. This accident made Japanese people's attitude to renewable energy negative, and almost all nuclear plants stopped their operation. So instead of nuclear power, Japan has imported fossil fuels and depended on thermal power since then. However, this costs Japanese power companies a lot of money.

Then, please look at this picture. This picture shows changes in energy composition. In 2012, the FIT system was introduced in Japan. Since then, the proportion of renewable energy has risen dramatically. The Japanese FIT system seems to be successful, but it has several problems. Only the amount of solar power generation has risen, but other energy has not risen so much. For example, geothermal power is a good option for Japan, but it doesn't spread. Now, Japan is facing difficult problems to deal with a wider spread of renewable energy.

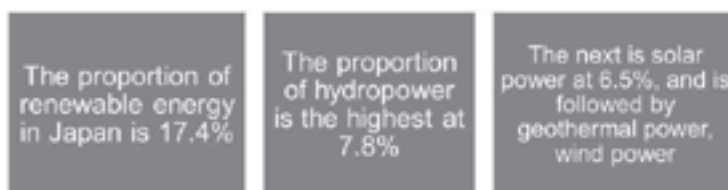


経済産業省「H27.7 長期エネルギー需給見通し」

(https://www.enecho.meti.go.jp/committee/council/basic_policy_subcommittee/mitoshi/pdf/report_01.pdf) を元に筆者作成

So, this is the current situation of renewable energy in Japan. First, the proportion of renewable energy is 17.4%. Then, the proportion of hydropower is the highest of that at 7.8%. The next is solar power at 6.5%, and is followed by geothermal power, and wind power.

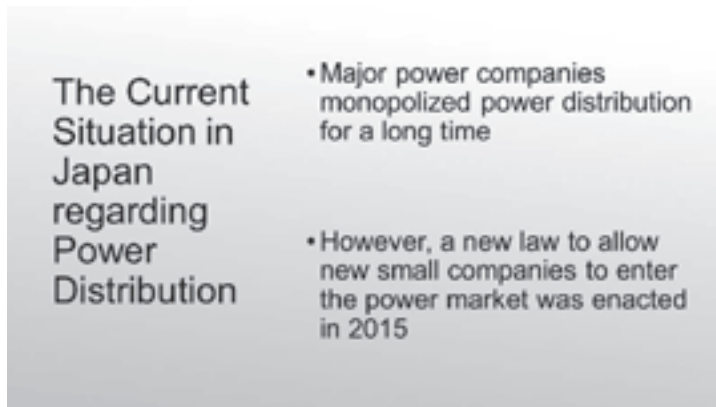
The Current Situation regarding Renewable Energy in Japan



This graph shows changes in Japan's energy composition, compared with past data. According to documents of the Ministry of Economy, Trade and Industry, the Japanese government aims to raise the ratio of renewable energy to 22-24% by 2030. It seems like they are raising their ratio gradually at a glance. This is, however, not enthusiastic goal compared to other advanced countries. For example, the German government says that they are going to raise its ratio to 80% in 2050!!

5. The current power situation in Japan

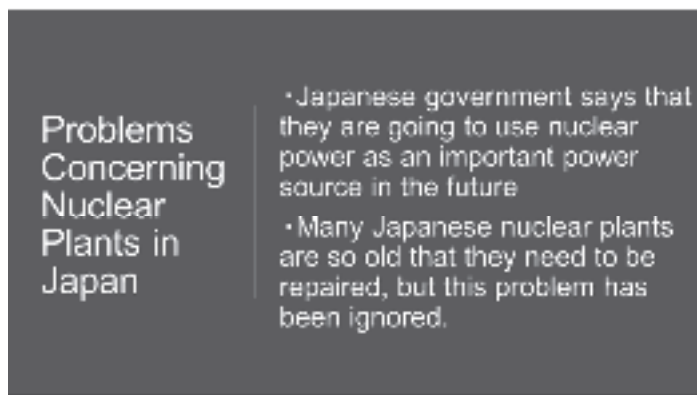
Let's move on to the next topic. I want to talk about the current situation in Japan regarding power distribution. Until recently, almost all power generation and distribution were completely monopolized by 10 major power companies. However, a new law to allow new small companies to enter the power market and retail power to consumers was enacted in 2015. Because of this reform, Japan's power situation of being monopolized by major power companies has been changing step by step, but we need more improvement to make a success.



The Current Situation in Japan regarding Power Distribution

- Major power companies monopolized power distribution for a long time
- However, a new law to allow new small companies to enter the power market was enacted in 2015

Also, Japan has big problems concerning nuclear plants. The Japanese government says that they are going to use nuclear power as an important power source in the future regardless of they cannot find a suitable disposal site yet. Moreover, many Japanese nuclear plants are so old that they need to be repaired, but this problem has been ignored.



Problems Concerning Nuclear Plants in Japan

- Japanese government says that they are going to use nuclear power as an important power source in the future
- Many Japanese nuclear plants are so old that they need to be repaired, but this problem has been ignored.

6. Conclusion

Finally, I want to summarize my opinion. First, I believe the Japanese government should increase subsidy for renewable energy. They invest much less money than Germany, so they should invest more budgets in them.

Second, we should break conventional system established by major power companies such as Tokyo Power Company and so on. Almost all Japanese power are currently transmitted and distributed by them. We should support emerging small power companies using renewable energy. In order to promote this suggestion, the Japanese government should make a better environment. For instance, local governments adopt a policy that requires company to use renewable energy at a certain percentage. I believe this promotes spreading renewable energy in Japan even more.

Conclusion

① The Japanese government should increase their subsidy for renewable energy

② Breaking the conventional system established by major power companies

That's all. Thank you for listening. If you have any questions, ask me anything.

References

- 市田知子『EU条件不利地域における農政展開—ドイツを中心に』農山漁村文化協会, 2004
- 今泉みね子『ここが違う、ドイツの環境政策』白水社, 2003
- 大島憲一「再生可能エネルギー普及に関するドイツの経験—電力買取補償制の枠組みと実際」『立命館人文科学研究所紀要』No.88, 2007
- 環境エネルギー政策研究所「国内の自然エネルギー政策の現状と課題」『自然エネルギー白書』, 2017
- www.isep.or.jp/2017report/chapter1/1-3 (Accessed on January 20, 2020)
- 環境エネルギー政策研究所「2018年(暦年)の国内の自然エネルギー電力の割合(速報)」2019.04.08
- <https://www.isep.or.jp/archives/library/11784> (Accessed on January 20, 2020)
- 環境省「ドイツのエネルギー変革に関する動向調査」, 2016, <https://www.env.go.jp/earth/report>

- /h29-03/h28_ref01.pdf (Accessed on January 20, 2020)
- 橘川武郎『日本のエネルギー問題』NTT出版株式会社, 2013
- 経済産業省「長期エネルギー需給見通し」, 2015
- <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ondanka/kaisai/dai30/sankou1.pdf> (Accessed on January 20, 2020)
- 経済産業省資源エネルギー庁「第5次エネルギー基本計画」, 2018
- https://www.enecho.meti.go.jp/category/others/basic_plan/ (Accessed on January 20, 2020)
- 国土交通省国土技術政策総合研究所・藤木修「水質保全のための流域管理—日米欧の比較」, 2007
- 田口里穂『なぜドイツではエネルギーシフトが進むのか』学芸出版社, 2015
- 中津孝司『日本のエネルギー政策を考える』創生社, 2012
- 「ドイツ再生エネ46%、初めて化石燃料を上回る19年—欧州の「脱炭素」裏付け」『日本経済新聞』, 2020.01.04
- <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO54032220U0A100C2000000/> (Accessed on January 20, 2020)
- 「日本は再生可能エネルギー後進国から巻き返せるか—「経済合理性」から世界で普及進む」『BUSINESS INSIDER』, 2018
- <https://www.businessinsider.jp/post-164597> (Accessed on January 20, 2020)
- 諸富徹『環境税の理論と実際』京都大学経済学部経済学科博士論文, 1998
- https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/68504/1/D_Morotomi_Toru.pdf (Accessed on January 20, 2020)
- 渡邊斉志「ドイツの再生可能エネルギー法」『外国の立法』, 2005
- Bechberger, Mischa “Renewable energy policy in Germany: pioneering and exemplary regulations.”, *Energy for Sustainable Development* 8, no.1 (March 2004)
- Hedberg, Annika “Germany’s energy transition: making it deliver.”, *EUROPEAN POLICY CENTRE* (Oct 9, 2017)
- https://wms.flexious.be/editor/plugins/imagemanager/content/2140/PDF/2017/Germany_energy_transition.pdf (Accessed on February 12, 2020)
- “Germany’s Energiewende in brief.”, *CLEAN ENERGY WIRE*, Jan 7, 2019
- <https://www.cleanenergywire.org/germanys-energiewende-brief> (Accessed on February 12, 2020)
- “Erneuerbare Energien in Zahlen”, *Umwelt Bundesamt*
- <https://www.umweltbundesamt.de/themen/klima-energie/erneuerbare-energien/erneuerbare-energien-in-zahlen#textpart-1> (Accessed on January 20, 2020)

報告要旨

今回私はドイツの再生可能エネルギーについて、日本と比較しながら調べることにした。私がドイツと比べてみようと思った理由は、ドイツはEUの中でも環境先進国であり再生可能エネルギーの分野においても世界に先んじているからである。日本をそのドイツと比較することで、日本との違いを調べ、再生可能エネルギーの導入に遅れている日本がどのような政策を行うべきなのかを検討するのが私の目的である。

2018年のデータを見ると、ドイツは総発電量に占める再生可能エネルギーの割合がすでに4割を超えており、水力を除いた再生可能エネルギーの割合ではドイツは堂々の世界第1位である。翻って日本はというと、東日本大震災の影響もあるにせよ、発電量のほとんどを石炭や石油等で賄っており、再エネの割合は17.4%と、2割にも満たない。ドイツはすでに2050年までに再エネの割合を8割にまで引き上げることを政府目標としているのに対し、日本は2030年までの目標で24%に上げることを目標にしており、彼我の差は歴然としている。

さて、ドイツはなぜここまで再エネの普及に成功しているのだろうか？これにはおそらくFITシステムといわれるシステムの導入が関係していると思われる。FITシステムとは固定買取価格制度のことで、電力会社が政府の定めた価格により再エネによる電力を買収することを義務付けた法律である。ドイツではこの制度の導入を定めた法律が1991年に成立して以来、再エネの割合は確実に増えている。さらに原発からは将来的に完全に撤退することを政府は決定している。

それに対し、日本政府は将来の電源構成に関して再エネは2割超に引き上げるものの、同時に原発の割合も増えており、震災以前の水準に近い割合まで戻すことを予定している。これでは結局震災による原発事故の教訓はほとんど生かされていないのではないだろうか？結局、政府はこれからも「脱炭素社会の実現」のための重要な電源として原発を使い続ける予定である。しかし、それらの原発の中にはやはり安全性が疑問視されているものもあり、最終処理場の問題も解決されていない。

ここで日本の電力事情も併せて紹介したいと思う。日本では長らく大手電力会社による電力の独占状態が続いており、新たな参入はなかった。しかし、2015年に成立した法案で電力小売事業の自由化が達成され、徐々に新たな会社が参入し始めている。しかしまだ、大手電力会社による体制を打ち壊すには至っていない。

結論としては、まず政府は再エネ買取のために、電力会社に賦課する買取価格を引き上げるべきである。これにより新興の小規模な会社でも再エネ市場に参入しやすくなると思われる。次に、従来の大手電力会社による独占体制を打ち壊すことが必要である。大手電力会社はすでに火力発電や原子力発電に依存した電力供給の体制を整えており、保守的な雰囲気である。再エネを積極的に利用する新興の会社による競争を促進する必要があるのではないだろうか。

討論会報告

1. 現地の討論会で出た質問

(1) ユトレヒト大学にて

Question 1; I cannot understand why the Japanese government wants to make or use nuclear plants as electrical sources. So, what is the advantage of using nuclear plants for Japan?

Answer; I think the Japanese government wants to use them because it costs less money to create new nuclear plants and conservative major power companies disagree with that.

Question 2; Do you think it is possible for Japanese new power companies to make nuclear power plants?

Answer; It depends on the situation, but it can. However, it is difficult to make nuclear plants because Japanese people are strictly against nuclear power because of the nuclear accident in 2011.

(2) パリ大学にて

Question 1; Why did you want to research Germany?

Answer; Because I thought Germany is the most successful country to spread renewable energy in terms of the ratio of that energy.

Question 2; How many nuclear plants does Japan have now? And why will the Japanese government continue to use them in the future?

Answer; Before an accident in Fukushima, they had over 40 nuclear plants, but after the accident, we have a few plants operating now. And for the second question, I guess it is economical in a sense for Japan to generate energy by nuclear plants because they cost less than renewable energy, and many Japanese major power companies do not want to withdraw nuclear power.

Question 3; What does the young generation in Japan think about nuclear power and renewable energy?

And do they already have information like things you gave in your presentation?

Answer; In my opinion, many young Japanese do not agree with continuing its use of nuclear power because it can cause a terrible accident like Fukushima, but maybe older people tend to agree to use nuclear power, for they are conservative. Unfortunately, the Japanese government is unwilling to publish information concerning nuclear power, so maybe a certain number of people do not know about this.

このようにどちらも原子力関連の質問だったことから考えても、学生たちの原子力発電への関心は高いことがわかる。ここについてはあまり調べ切れていないところであったので、もう少し調べておくべきだったと感じた。しかし一方で自分が質問されると思っていた日本とドイツの再生可能エネルギー政策の違いについてあまり質問が出なかったのは意外であった。自分がうまく伝えきれていない可能性もあるので、もう少し情報を増やすことを検討したい。

2. 調査テーマの適切性について

今回私が調査テーマとして選んだのは「ドイツの再生可能エネルギー政策について；日本の政策とも比較しながら」であったが、今このテーマが今回の研修の目的等に照らし合わせ妥当であったかを考えると、やや否定せざるを得ないような気がする。

確かに私は環境問題やエネルギー問題への関心があり、それをヨーロッパとも比較しつつ日本の将来に還元できるようなこのテーマを選んだわけであるが、少しテーマが大きすぎたのではないかと自分でも思った。本来ドイツの再生可能エネルギー政策について比較するには膨大な文献をあさり、大量の情報を収集する必要があるわけだが、実際にはそこまでの時間をかけることができず、分量的にも大変なことになるため、断念した。

その結果、何かぼんやりとした、表面的な情報の収集に終わってしまい、何か新規性のあるような発見や考察にまで昇華させることはできなかった。もしもやるのであれば、最初からテーマをもっと絞ったうえで集中的にその分野の文献にあたる必要があると感じた。例えばドイツの再生可能エネルギーについてであれば、最初に風力発電か、太陽光発電か等を選んだうえで、日本とその分野について比較をするという形であればよりやりたいことが明確に見えてきたのではないかという気がする。

さらにはやはりこの手の研究についてはほかにも研究なさっている方がたくさんいるため、なかなか自分がほかの人と被らないような研究をするのが難しかったというのが率直な感想である。調査を始めるにあたり先行研究を精査することを怠ったことがその原因であるように思われる。

自分の考察に関しても、もちろん調査に基づいてしたもの、あまり中身の無いものになってしまい、調べて得たことを十分に生かすことができなかつたように思われる。

3. 自分がこの研究テーマを選んだ理由

私がこの研究テーマを選んだのは、以前にも述べた通り私が個人的に日本の環境問題やエネルギー問題に関心があり、それを解決するための手段として環境にもやさしく、国内に資源のほとんどない日本でも自給することの可能な、再生可能エネルギーに着目し、その再生可能エネルギーにおいて世界でも最高水準に進んでいるドイツを範とすることは有意義ではないかと思ったからである。そのドイツの政策を調査し、これを日本の政策と比較したうえで日本に应用可能なところなどは取り入れていき、エネルギー問題解決への自

分なりの見解を示そうと思ったのである。

この研究は、たとえばそこからより詳しく現実的な実現可能性を考慮したうえで日本政府が政策としてそれを取り入れてくれれば、日本の再生可能エネルギーの普及に役立てることができる。ひいては、日本のエネルギー自給率の向上、再生可能エネルギーでの代替による原子力問題の解決、火力発電の割合の減少による環境負荷の減少などといったように地球社会に貢献することができるのではないだろうか。



News

🏠 News Events Dossiers Background In the media Opinion Publications DUB

4 February 2020

Students and staff of Hitotsubashi University visit U.S.E.

In the context of a long-standing collaboration between the Utrecht University School of Economics and the Faculty of Economics of [Hitotsubashi University](#) (Tokyo, Japan), a delegation of Japanese students and lecturers visited U.S.E.

on Friday 24 January. The students presented research projects to students and staff of the Entrepreneurial Ecosystems course, hosted by [Erik Stam](#) and [Friedemann Polzin](#) at [UtrechtInc](#), where they also had a short tour introducing them to this Utrecht based incubator for startups.



FROM ROCKET SCIENCE INDUSTRY TO RENEWABLE ENERGY POLICY

The eleven students of Hitotsubashi University, mostly in their second Bachelor's year, presented their current research projects. Students and staff from the Entrepreneurial Ecosystems course gave them feedback on their presentations. The subjects were ranging far beyond entrepreneurship, from 'A comparison of the Agricultural Policies in the EEC and Japan', to 'Comparison of the Rocket Science Industry of the EU with Japan and the US' and 'International Labour Mobility and Immigration in France and Japan' to 'Renewable Energy Policies in Germany – a comparison with Japan' and much more.

DIFFERENT PERSPECTIVES

It was an interesting day of presentations, discussion and insights in current issues and development in Japan en Europe. For the students from Hitotsubashi University this day offered the opportunity to get a rather different, international perspective on their research subjects. The tour of UtrechtInc also introduced them to a new, different and inspiring way of thinking about entrepreneurship.

After this day at Utrecht University the group of students and staff of Hitotsubashi University travelled on to visit universities in Belgium and France.

Share



Why Do Cities Choose “Art” for Regional Activation?

Yukiha Oka

Why do cities choose “Art” for solving their regional problems?

We will look at cases from Spain and Japan.

1. Introduction

Hello, my name is Yukiha and I am a senior student studying law at Hitotsubashi University. In my presentation, I'd like to talk about “regional activation through art”. Two years ago, I visited a city as a tourist and was surprised to see that there were many art productions on every corner, while no historical connection with art was to be found. It turned out that all art products were part of an activation measure, which had only started 5 years ago. In fact, many local governments are trying to energize their cities through art worldwide. However, why have they chosen “art”, of all things, for regional activation?

Let's think of possible reasons together throughout this presentation.

2. The concept of “regional activation”

Before going into “the regional activation through art”, we need to clarify the concept of “regional activation”. It is the creation of an autonomous, sustainable and attractive society by utilizing the characteristics of each region. Cities in developed countries often face various problems such as employment issues, environmental issues, declining birthrates, aging and so on. Recently, most of them have either utilized existing cultural assets for regional activation or have become tourist destinations, like Paris for example. On the other hand, many organizations have started to rethink ways of creating sustainable cities, and it is said that utilizing the arts might be a relatively new and effective way to do that.

To elaborate on this, I'm going to show two examples, Bilbao in Spain and Niigata in Japan. I chose these cities for three reasons. First, the measures for regional activation in both cities were taken by their governments. Second, the results in both cities are highly regarded internationally. Finally, these two cities differ greatly in their size and adopted strategies.

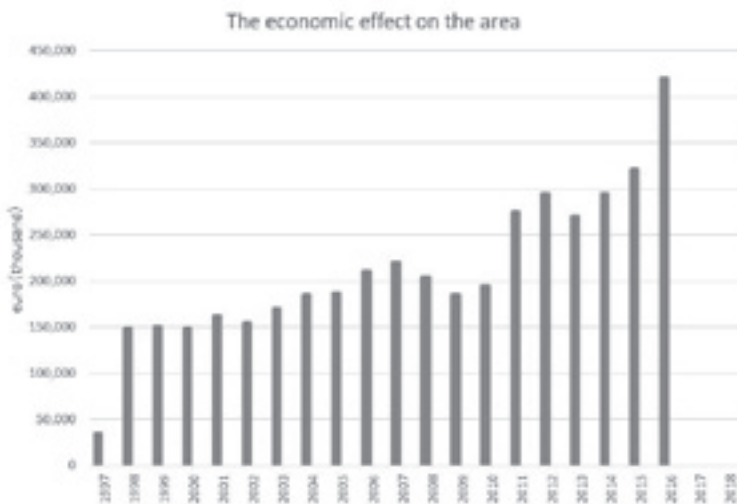
3. Bilbao in Spain

Bilbao, located in the north of Spain is the fifth largest Spanish city with a population of 340,000 and an area of 40 square kilometers. Bilbao had flourished as an industrial city until the 1970s, but since the 1980s its industries have declined due to competition from Asia, while the city has also suffered from environmental and employment issues as a negative legacy of its past

industrialization. To solve these problems, the governing state proposed a “Bilbao Metropolitan Revitalization Strategy Plan”, including urban remodeling of infrastructure – for example, harbor and main street maintenance. As part of this policy, the government also built the Bilbao Guggenheim Museum. Here is the annual number of visitors to the museum and the economic effect on the area. It was named the “Bilbao effect” by people who were surprised by the impact. It amounted to 400,000 euros in 2016, and is increasing year by year.



(Source of photo: <https://www.guggenheim-bilbao.eus/>)



(Source: Bilbao Annual Report 2017)

4. Niigata in Japan

Next, I will introduce another type of regional activation through art, this time in Japan. Echigo-Tsumari in Niigata prefecture is a city with a population of 74,000 and located 300 kilometers away from Tokyo, the capital of Japan. Echigo has been suffering from a declining birthrate and population aging.

The Echigo “Daichi art festival” first started in 2000 and is held every three years. The most distinguished characteristic of this festival is its exhibition style. The artists can do their art using the whole city. For example, they make their artwork in closed elementary schools or tunnels that are no longer in use, or make use of natural features like rice terraces. Also, there are official festival supporters called “kohebitai”. They are mainly young volunteers from all over the country who not only help the festival management but also contribute to alleviating the aging problem.

As we have seen, both Bilbao and Echigo have tried to solve their problems by using art, whether through building museums or organizing art festivals. According to surveys, most citizens of both cities do appreciate the ensuing economic effect.



(Source : the Annual Report of the Daichi Art Festival 2018)

5. Analyses

Here is a table comparing the two cities from a cost efficiency perspective.

According to a report, the total annual expenditure of Bilbao was 30 million euros, and the economic effect was 330 million euros. In other words, the cost efficiency has been about 10 times. The total expenditure for holding an art festival in Echigo-Tsumari was 1.8 million euros, while the economic effect was 17.61 million euros. So, the cost efficiency there was about 9.64 times. This strongly suggests that there is no significant difference in cost efficiency between museum management and art festival management. Since the triennial art festival is as cost-effective as

the art museum, we may say that depending on the size of the city, the exhibition format and the framework can and should be carefully customized.

City	The Annual Expenditure	The economic impact	the cost efficiency
Bilbao	30 million (euro)	330 million (euro)	10 times
Echigo	1,8 million (euro)	17.61 million (euro)	9.64 times

(Source : Annual Report of Bilbao 2018 and Annual Report of Daichi Art Festival 2018)

6. Conclusion

Why do cities choose to do regional activation through art?

If a city has not had a tradition of art culture, I think it can start to appeal to people from a brand-new perspective. If a city had been culture-oriented for a long time, new art culture and artists might be considered a threat. So, how should governments work on the sustainable regional regeneration through art in the future? First, governments should try to change the style of their exhibitions depending on the size and population of the city. Second, they should involve their citizens in implementing art policies, as in the case of “kohebitai” in Niigata. It is always important to establish a system that can narrow the gap between governments and citizens and make reconstructing the city by everyone a reality.

References

- ・ 岡部明子『EUの地域・環境戦略サステイナブルシティ』学芸出版社、2003年。
- ・ 岡部明子『公共空間を人の手に取り戻す—欧州都市再生の原点』東京大学出版会、2003年。
- ・ 熊倉純子『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』株式会社水曜社、2014年。
- ・ 佐々木雅幸・水内俊雄『創造都市と社会包摂』水曜社、2009年。
- ・ 橋本敏子『地域の方とアートエネルギー』学陽書房、1997年。
- ・ 宗田好史『創造都市のための観光振興—小さなビジネスを育てるまちづくり』学芸出版社、2009年。
- ・ 山口裕美『現代アートの入門の入門』光文社新書、2002年。
- ・ 大地の芸術祭『越後妻有アートトリエンナーレ2015 記録集』現代企画室、2015年。
- ・ 「大地の芸術祭統合報告書2000」
<http://www.city.tokamachi.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/4/000013094.pdf> (2020年1月17日アクセス)。
- ・ 「大地の芸術祭統合報告書2018」

http://www.city.tokamachi.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/4/soukatsuhoukokusyo2018_honpen190507.pdf (2020年1月17日アクセス)。

- ・ “Bilbao Guggenheim Museum Annual Report 2016”, <http://www.guggenheim-bilbao-corp.eus/wp-content/uploads/2011/06/Annual-Report-2016.pdf> (2020年1月17日アクセス)。
- ・ “Bilbao Guggenheim Museum Economic Financial Report 2017”, <http://www.guggenheim-bilbao-corp.eus/wp-content/uploads/2011/06/CUENTAS-FUNDACION-EN-2017.pdf> (2020年1月17日アクセス)。
- ・ “Bilbao Guggenheim Museum Annual Report 2018”, <http://www.guggenheim-bilbao-corp.eus/wp-content/uploads/2011/06/Annual-Report-2018.pdf> (2020年1月17日アクセス)。

報告要旨

本発表の目的は、スペインと日本におけるアートを活用した地域再生の事例に関して、そのプロジェクトの成立背景や内容について分析し、「文化資源に乏しい都市が、地域課題を解決し都市再生を図る方策としてアートを活用する理由」を明らかにするものである。分析材料として、国際的に「成功した」と評価されている2つの事例、スペインのビルバオにある「ビルバオ・グッゲンハイム美術館」と日本の越後妻有で開催されている「大地の芸術祭」を取り上げる。ビルバオは環境問題・失業問題、越後妻有は少子高齢化や若者の地方離れという課題をそれぞれ抱えていた。そこで、行政がこれらの課題を解決するために、アートによる都市再生に取り組んだという背景が共通項として挙げられる。初めに述べた理由を分析し、今後同じような都市再生の取り組みを行う都市への考察を行う。

討論会報告

【ユトレヒト大学】

ユトレヒト大学では、「行政は市民の参加を促すことで意見の乖離を防ぐ必要がある」という主張に対し、「行政だけでなく民間組織の働きかけについてどう考えるか」という意見が出た。これに対し、私は地域活性化を支援する母体としての役割を担う民間組織は実際に存在しており、その存在は行政と市民の仲介にとって必要であると回答した。しかし、その回答は不十分であったと考える。民間組織、例えばNPOについての知識を十分に持っていなかったため、一般論としての回答となってしまったことが反省点として挙げられる。越後妻有を例に、上記質問に対していかに回答すべきかを検討する。大地の芸術祭をNPOの立場から支援している特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構のレポートによると、地域再生ビジネスにおけるNPOの役割は、参画する主体が一部の市民や行政機関に依存する構造からの脱却を支援することと、公共投資への依存を分散させ、事業として自立することである。そのために越後妻有里山協働機構は、これまでに芸術祭に関わった人材の蓄積のないエリアへのノウハウ提供や、地域住民への活動の周知や広報を行っている。これらの活動から、民間組織の役割とは行政と地域住民を繋ぐ単なる橋渡し機能だけでなく、

行政からも市民からも独立した、かつ、芸術祭運営スキルを活かして活動する機能をも備えていると考えられる。

【パリ大学】

パリ大学では、日本語学科の生徒約60人に対して、2回のプレゼンテーションを行った。英語でのプレゼンテーションに対し、日本語での質問、英語での回答というスタイルだったため、お互いに臨機応変に英語・日本語・フランス語を使い分けて意思疎通を図った。質疑応答では、「あなたにとって芸術とは何か」という質問や「アート以外に都市再生を実現する方法として何が挙げられるか」という、ルーヴアン大学よりも個人的な想いに関する質問がされた。パリ出身の生徒が多かったこともあり芸術に対する先天的な関心が日本人よりも高いように感じた。第二部の日本語でのコミュニケーションタイムでは、お互いの国のことや個人の関心ごとについて、気になっていることを聞いたり聞かれたりした。日本語を学習するきっかけとして日本文化・伝統への関心を挙げる生徒が多く、日本の生徒が大学で外国語を選択する際の理由と異なることに驚いた。日本のアニメや漫画で日本語を覚えたという生徒も多く、カルチャーの影響力の高さを直接知ることができて嬉しかった。

【全体を通して】

今回は自分の問題研究のテーマとして、街づくりの素材としてアートが用いられる背景を選んだ。4月から日系のディベロッパー会社で働くため、街づくりについて考えてみたいと考え、ヨーロッパの街づくりと日本の街づくりについて地域再生・アートの二つの観点に絞り考察を行った。

今回二つの大学でプレゼンテーションを行い、感じたことが二つある。

一つは自分のプレゼンテーション能力の低さである。事前に原稿を覚えてはいたものの、本番になると緊張してしまい、また内容を忘れてしまうことが怖く、原稿を半分以上見ながら発表を行ってしまった。聞き手の反応を見ることで、適宜説明を追加することもできたと思う。学生生活でプレゼンテーションリベンジをする機会のないまま社会人になることに不安はあるが、悔しさを覚えて次に活かしたい。

もう一つは興味を持ってもらえるプレゼンテーションとは何か、という問いである。今回はEUと日本の比較という区切りの中で、自分の興味のままにテーマ決めを行った。しかし、現地の学生が知りたいことや興味があることは何か、ということをもっと入念に調べてからテーマ設定に臨むべきだったと感じた。日本語学科の学生が聞き手であれば、日本のことを私の言葉で話す時間を多く取った方が相手の関心も高まったと思う。また同じテーマ設定でも、一例としてその国で有名な美術館の例を挟むなどの構成面を工夫することで、興味関心を持ってもらうことができたと思う。同じバックグラウンドの仲間プレゼンテーションするのではなく、異なる国の初めて会う相手に楽しんでもらえるプレゼン

テーションをするということをもっと意識して作るべきだったと思う。単に共通語を使うだけではいけないのだと身をもって感じた。



ユトレヒト大学の討論会にて

Future prospects for the Public Healthcare Insurance

Haruki Misu

How should the Japanese government reform the public insurance to reduce the cost and achieve the fiscal consolidation?

We will consider this serious problem by comparing the Japanese and the French system.

1. Introduction

Hello. My name is Haruki and I am a second year student studying Economics at Hitotsubashi University. The topic of my presentation is the future prospects for the public healthcare insurance of Japan.

First, let me explain why I chose to talk about this. In the last semester, I took a class about German and Dutch insurance. These countries are famous for their drastic reforms. On the other hand, in my country, Japan, while public insurance is facing a possible collapse, an effective plan of reforming public insurance has not yet been launched. Therefore, I decided to consider what kind of changes might be needed in our system by comparing it to the French system. France was chosen because its public insurance system also has problems which are similar to Japan's, while at the same time some drastic reforming policies have been carried out.

2. The Japanese system

2-1 of the system

So, I will start talking about the Japanese system. In Japan, all people can get public insurance regardless of their income. There are various kinds of insurers and workers' employers decide which insurer they want to work with. In addition, if someone's age is over 65, that person has to join a special system. Ordinary people have to pay 30% of their medical treatment when using the insurance, but the elderly only pay 10 or 20%. And the particular thing is that the premium is supplied to hospitals directly from the insurers.

2-2 The reform that has already been planned

Next, let's take a look at the reforms which have already been planned. In the 1980s, the government started to realize the problems of the existing system and began thinking about reforming it. However, as the economic situation got better and the problems were not that serious at that time, little was actually done. However, from 1990s, since the Japanese economy took a downturn and the number of the elderly started to increase, they had to increase the social security tax. But, as the ruling Liberal Democratic Party didn't have enough power in the Diet, they gave

up attempting to carry out the policy. Then, in 2000, Prime Minister Koizumi determined the fundamental principle of reforming public insurance. Since he had enough power in parliament, he started increasing social security expenses and excluding some diseases from the insurance coverage. And in 2006, each prefecture started making their own plans for decreasing the premium in the area. But from 2008 and 2012, the reform was stopped because of the financial crisis and changing the ruling party. After 2012, the ruling party changed and parliament restarted the reform. Additionally, the parliament also increased the consumption tax twofold.

2-3 Problems

Finally, let me outline the main problems of the Japanese system. The first one is the lack of money. Decreasing birthrates and the aging Japanese population are one of the most essential causes. Second, because citizens don't have to pay the total cost of their treatment, they don't realize how much they use the benefit for their healthcare. The third problem is that the government uses bonds to cover for the shortage of the premium. As a result, about 40% of the budget spending is used for paying back today's government bonds.

3. The French system

3-1 of the system

Next, let's move on to the French system. People choose their insurance according to the kind of jobs they have, such as CCMSA or RSI. French people also continue to hold the same insurance after retiring. But since public insurance in France doesn't cover some necessary treatments, 80% of citizens also purchase additional insurance policies offered by private organizations. In contrast, people who have find it difficult to afford additional insurance, like disabled people for example, can get their benefits through the CMU system. By combining these systems, universal health insurance is achieved in the country.

3-2 The reform that has already been planned

However, though the system was compact, there were problems for several decades. In 1970s, the cabinet had to cope with the social security deficit by increasing the expenditure. After that, the Chirac cabinet launched increased taxes and out-of-pocket payments, which the Barre cabinet started to carry out. Then, in the 1980s, the Mitterrand's administration continued the policy. Mitterrand further increased the government's income and finally decided to exclude hospitalization from insurance coverage. However, after 1990s plans which reduced the expenditure were unsuccessful. On the other hand, GSP, a new tax targeting only public insurance, was established. From 2000, many drastic reforms are introduced. Firstly, the cabinet tried shifting costs from public insurance to supported insurance, and in 2004, a GP (General practitioner) system was launched

which limited people's direct visits to doctors.

3-3 The problems

As the above illustrates, this system has several problems. First, they will also have to deal with decreasing birthrates and aging. In addition, the government has to guarantee that all people get opportunities to receive treatment completing insurance. For dealing with the problem, the government uses the system of the UNOCAM. Third, owing to the GP system, some patients might not be able to receive the care they need quickly enough.

4. The implication for the Japanese system

Finally, let me talk about the implications of the French system for Japan. First, I will focus on the good points. The first one is that the basic idea of the policy has not been denied for several decades though the ruling parties changed many times. Second, the French government distinguishes increasing taxes from decreasing the expenditure. For instance, if a group of doctors resist the reform, the government prioritizes taxation. Finally, since the cabinet had tended to lead enforcing policies, they could carry out a drastic policy such as GP system.

Based on the above, the effective reform in my country should contain these ideas. First, the government should increase not only social security expenses but the consumption tax too. Since social security expenses have a problem of progressivity in my country, some people might be excluded from the public insurance. Second, we have to abolish the old system. According to the Ministry of Finance, this system is one of the main factors of tight finance. In addition, other developed countries don't have the same system, which means it is unrealistic to maintain the system for the future. Third, the government should continue their long-term plan without considering the ruling party. Of course, it will be challenging because most politicians in the Diet concur with the policy. However, the Dutch system recovered their debt with a long-term reform, while in France, as we saw just now, the same kind of policies have been executed for many years. Finally, people should pay the total cost of their own treatment. The important thing is to realize how much they use the benefit.

This is the end of my presentation. Thank you for your listening.

References

- ・ 尾玉剛士『医療保険改革の日仏比較:医療費抑制か、財源拡大か』明石書店、2018年。
- ・ 笠木映里『社会保険と私保険:フランスの補足的医療保険』有斐閣、2012年。
- ・ 加藤智章『医療保険と年金保険:フランス社会保険制度における自律と平等』北海道大学出版会、1995年。
- ・ 厚生労働省『2018年海外情勢報告』<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/19/> (最終ア

クセス 2020年1月)

- ・坂本圭『国際比較分析による我が国の医療費政策の課題』http://www.kawasaki-m.ac.jp/soc/mw/journal/jp/2006-j15-2/17_sakamoto.pdf (最終アクセス 2020年1月)
- ・財務総合政策研究所ホームページ「『医療制度の国際比較』報告書について」『医療制度の国際比較』<https://www.mof.go.jp/pri/research/conference/zk087.htm> (最終アクセス 2020年1月)
- ・シャン＝クロード・バルビエ、ブルーノ・テレ『フランスの社会保障システム:社会保障の生成と発展』ナカニシヤ出版、2006年。
- ・Wim Van Damme, “World Social Health Insurance: Strengthening Health Systems in Low-Income Countries”, *PLOC MEDICINE*, US National Library of Medicine National Institute of Health, March 2007, <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1831747/#idm140153494281424title> (最終アクセス 2020年1月)

報告要旨

本報告では、日本の公的医療保険制度について、フランスの制度と比較したうえで今後すぐに必要となるであろう制度改革の在り方について考察している。

日本の公的医療保険制度は、歴史的背景もあって就労している企業、団体によって加入する保険制度が異なり、前期高齢者、後期高齢者については自己負担の割合が減少する仕組みになっている。また、国民皆保険を達成している先進国の中では珍しく償還払いではなく、保険者から医療機関に直接保険給付を行う方式を採用している。この制度は非効率的な医療費の配分を招き、近年の少子高齢化の影響も相まって財政圧迫の原因となっている。政府も長年にわたって対策を施そうとしていたが、政権基盤の問題や医師会との合意形成の難しさなどから効果的な対策が立てられないでおり、結局赤字国債の発行で対処し続けてきた。現在は社会保険料や消費税をはじめとした税金等の値上げによって対応しようとしているものの、財政の健全化には程遠い現状といえる。

一方フランスでは、日本も導入している職域保険を採用しているものの、退職後の高齢者も引き続き同一の保険に加入することになっており、特別な制度は存在しない。また、日本と比べて医療給付の対象となる医療行為が限定されており、その補填として八割を超える国民は民間の経営する補足的医療保険に加入している。しかし、このように競争原理を制度の中に導入したフランスでも財政逼迫が長年の課題であった。ただ、フランスでは与野党の垣根を超えた合意形成が行なわれ、社会保障財源の拡大と医療給付総額の削減を巧みに使い分けることで医師組合や国民の反発をかわしながら、入院医療費に対する保険給付の大幅な削減、GP制度(いわゆるかかりつけ医制度)の導入による被保険者のフリーアクセスの制限など、大胆な改革を進めてきた。

このように、フランスは日本も有する先進国特有の問題を抱えながらも改革がある程度成功を取ってきていることから、フランスの制度改革の特徴で、日本の今後の制度改革の

在り方に活かせる部分があるのではないかと考えた。最終的には、社会保障税と比べて逆進性が少なく一般に経済成長に影響の少ない消費税増税や、高齢者向け医療制度の廃止、日本は被保険者個人がいかに保険給付を受けているのか理解させるための償還払い方式の採用が必要であると結論付けた。

討論会報告

まず、各大学での討論会の質疑応答の概要について述べる。ユトレヒト大学では、学生からの質問が一つ、教員、学生からのコメントがそれぞれ一つ出た。

質問はなぜ比較対象としてフランスを選んだのかであった。プレゼンテーションの中で日本とフランスの制度が似ていて、問題の抜本的な解決に至っていない点を挙げていたものの、根拠が不十分であると感じたようだった。そのため、オランダなどその他の西欧諸国は、政府のシステムや国家の規模が大きく異なること、オランダで数十年間にわたり実行されてきたデッカープランは小規模国家だからこそなしえたという側面があり、同一程度の人口を有する国の方が比較に意味があると考えたと説明した。反省点としては、前期に作成したレポートで、世界各国の制度概要を調査したうえでフランスとの制度比較を最終的に決定したことも付け加えるべきであったと思う。

教員からは、あくまでも個人的な意見であるとしたうえで、被保険者から医療機関へ一時的に医療費を全額負担する制度の導入については低所得者世帯が必要支出のため借金を作る可能性もあり病院へのアクセスを阻害することから導入に反対との意見をいただいた。一方欧州では一般的なかかりつけ医制度については、がん患者など早期の医療提供が望まれる患者にとってリスクとなることもあるため例外を設けるべきだとした。医療費の一時的な全額負担についての問題点は確かに存在するが、健康に異常がない高齢者の過剰受診など日本の抱える問題点を意識しすぎた結果、社会的弱者への対応を考慮に入れていなかった。これについては再検討の余地があると思う。例えば高額になりやすい特定の診察のみ間接給付を認める一部例外の容認、低所得者向けの追加的制度の導入などが考えられるだろう。

またコメントを出した学生は、高齢者への治療は継続的に必要となるケースが多く、必要不可欠な出費であるとはいえるものの医療費上昇の主な要因は少子高齢化であり、高齢化問題は本当に悩ましいと述べていた。

パリ大学では日本語学科の人々から日本語で質問を受けたため、相手の日本語能力が二年目のキャリアとは思えないほどの熟達ぶりであったとはいうものの、この報告の内容に関する質問はほとんど出なかった。唯一問題となったのは、本報告で用いた“premium”という単語の意味がわからないという質問であった。保険料率、すなわち公的医療保険制度で定められた自己負担率のことであると英語で説明し理解は得られたが、本報告の中でも最も重要なキーワードを正しく説明できていないという問題点が明らかになった。この他には今回のテーマに絡めて年金問題に関する意見を述べる者が一人おり、財政健全化を目

指すマクロン政権の政策を支持するものであった。それに対する反論は述べられず、私もその主張に賛同すると述べた。

ここからは今回の発表、それに先立って行った調査研究の方法について検証する。

まず発表方法について、時間内に多少どもることやスライド送りを間違える場面があったものの、準備段階として著しく不十分であった点はなかったように思う。英語での発表は経験が浅く内容が伝わるか多少懸念していたが、パリ大学の学生に確認をとったところ問題なく理解することができたと返答されたため、さほど問題はなかったものと考えられる。ただ専門用語については、パリで指摘されたように相手側が理解できていない可能性があるという認識が欠けていた。これらの特殊な用語については逐一丁寧な説明を心掛ける必要があったと思う。次にコメントの数、対応について、いずれの大学でも質問が少なく、コメントも私の発表に対する自らの意見表明であった。質問が少なかった理由としては、私の英語の発音が聞き取れなかったこと、そもそもオランダでは社会保障制度改革がある程度改善されてきており現在大きな問題となっていないため学生の問題関心が薄かったこと、起業を応援するための特殊な学部や日本語学科の学生に対する発表であったためそもそも興味をそそる発表でなかったことが考えられる。私の印象ではユトレヒト大学ではフランスの医療保険制度に興味を持つ者がほぼ皆無であり、パリ大学では議論しようにも日本語が出てこないため意思疎通が困難であったためのように見受けられたが、私の乏しい英語能力に起因する可能性も否定できないため、今後もさらに英語コミュニケーション能力の強化を図っていきたい。

テーマ設定に関して、こちらも特段の問題は感じられなかった。西欧諸国と日本との比較という縛りの中で医療保険制度について考えようとした場合、よりよい他の選択肢が考えつかない。事前に提出したレポートでは、比較検討を行う前に各国の医療保険事情を広く調査しており、それに基づいてフランスと比較することが日本の保険制度を考える上で最も有益であることを確認していたため、事前にテーマ設定を十分検討できていたと考える。

分析方法についても、医療保険制度改革については政府機関や民間で多くの研究が行われている分野であったため、私が行ったのはそれらによってすでに存在している主張を比較してよりよいものを考えるというものであった。このほかの方法としては経済理論などを用いた独自の分析、先行研究の再検証などが考えられるが、私の知識や経験、海外調査に費やす時間に鑑みてもいずれも不可能であることから、調査研究の視点としてはこれ以上行うことができなかつたように思う。

他方で参考文献の選択に関しては改善の余地があったと思う。レポートをまとめている時は書籍や論文、政府機関のウェブサイトなどを数十冊参照し、さらにそこから参考文献を絞っていったため文献の妥当性、量はともに問題なかったと思われた。ただ発表を終えて振り返ってみると、テーマ選択のきっかけが大学の通期授業であったこともあり、当該授業の担当教員の主張に似通った文献が多かつたようにも感じる。特に、同一筆者の著作

を多用してしまったことは反省点として挙げられる。今後は対立する主張を行っている文献を参照することに留意すべきだ。

考察についても参考文献と同様のことがいえる。調査中は自らの独自性を持たせて考察を書いたと自負しており、検証する必要性を全く感じなかったが、前述の通り授業の担当教員の影響を色濃く受けた考察となってしまう可能性があり、客観的に再検討すべきだったと考えた。

What Is the Best Way to Live Together with Immigrants?

Banri Endo

*How to live together with increasing immigrants in a society?
What kind of lesson can Japan learn from Spanish developed policy?*

1. Introduction

Hi, I'm Banri Endo from Hitotsubashi university, and I'm a 2nd year student, belonging to sociology department. Today, I want to talk about "what is the best way to live together with immigrants in a society". I'll compare the Japanese and Spanish immigration policies because these two countries are said to be relatively new to dealing with immigrants. So, I'll show you the current situation related to immigrants in Japan. Today, in Japan, there is a heated dispute about immigrants. The government and the ruling Liberal Democratic Party say, "The number of immigrants in Japan is zero. We only have foreign workers." However, some media and experts maintain that "foreign workers" are "immigrants" in reality. Based on their views, Japan seems to be the 7th largest immigrant country. Under these circumstances, Japanese society is trying to enhance its multiculturalism. However, it is said that this comes a bit too late.

2. Japanese immigration policy: multiculturalism

So, let's overview Japan's immigration history. After WW2, there were a lot of former colonies, especially Korea. They had been "Japanese" since 1910. They accounted for the majority of immigrants in Japan from 1945 to the mid-1980's. From 1986 to 1991, there was a big boom in the Japanese economy. It was called the "Bubble Boom". During this period, many factories had difficulty in securing sufficient human resources. So, they started to accept foreign workers, especially from South America, because there are a lot of second/third generation Japanese-Brazilian people. In 1990, the number of immigrants was over 1 million, and in 2007 it exceeded 2 million. According to the latest data, there are 2,731,093 immigrants in Japan.

They account for 2.2% of total population. The largest immigrant population is Chinese, followed by Koreans, Vietnamese, Filipino, and Brazilians.

In Japan, the government currently adopts a "Multiculturalism" policy. It's comprised of 3 factors: "Protection of human rights of minorities", "Abolition of racial discrimination" and "Approval of cultural diversity". Recently, some local authorities have been trying to develop this policy, and this movement is called "Multiculturalism 2.0".

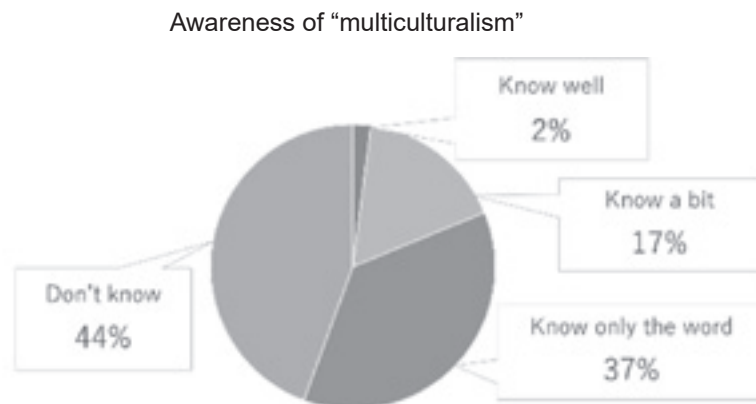
3. Two case studies in Japan

Next, let me introduce two advanced cities in Japan. One is Hamamatsu city in Shizuoka prefecture, and the other is Shinjuku district in Tokyo. Hamamatsu city is located in the center of Japan. This city is famous as the birthplace of Ieyasu Tokugawa, who started the Edo shogunate.

The city has 24,500 foreign residents, which corresponds to 3% of the total population, and about 40% are Brazilian because during the bubble economy period, many Japanese Brazilians people came here to work in factories.

In Hamamatsu, there have been a lot of efforts to ensure the smooth coexistence of locals with foreign residents. The city holds festivals to enhance exchange and special language lectures for Japanese people by foreign residents. The city has a Foreign Resident Study Support Center and also provides employment support to foreign residents.

However, judging from some public opinion polls, these efforts still have room for improvement. This pie chart shows the awareness of “Multiculturalism”. Surprisingly, about 80% of citizens are almost unaware of the concept.



(Awareness survey of Japanese and foreign citizens in Hamamatsu city (2018))

This next pie chart about Socializing with foreign residents also suggests unfavorable reality. About 60% of Japanese people almost never socialize with foreign residents.

Socializing with foreign residents



(Awareness survey of Japanese and foreign citizens in Hamamatsu city (2018))

This bar chart explains citizens’ opinion about what should be done by the administration. About 45% think that they need chances to experience foreign cultures or communicate with foreigners on a local level. However, as I mentioned, the city already holds the festival once a year and there are some special language classes. I guess that these administrative efforts may still be not very well-known to citizens.

What to be done by the administration

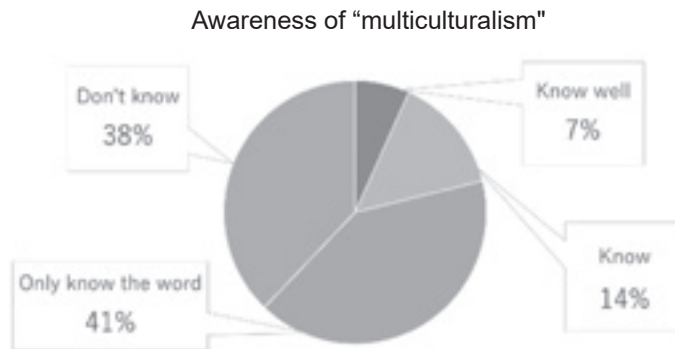


(Awareness survey of Japanese and foreign citizens in Hamamatsu city (2018))

So, let’s take a look at another city - Shinjuku. As you may know, Shinjuku is located in the center of the Tokyo metropolitan area. And, it’s one of the most popular cities for foreign tourists. Kabuki-cho, in particular, is said to be the biggest downtown in Japan. This city has 42,000 foreign residents, which accounts for 12% of the total population. There are 2 reasons for this. First, many foreign workers work in Kabuki-cho because there are a lot of foreign restaurants. Second, in the Shinjuku area, there are a lot of Japanese language schools. So, this city also makes big efforts to live together with foreigners, such as holding the “Shinjuku Dance Festival” and setting up a

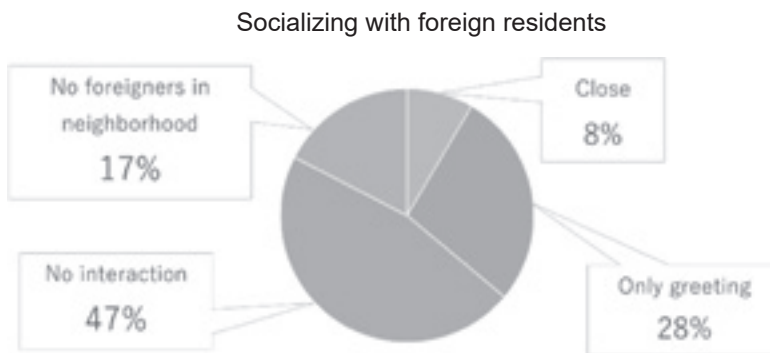
Shinjuku Multicultural Plaza to encourage intercultural exchange. It also offers Japanese language schools and multicultural interaction programs.

However, the data shows that this has also been largely ineffective. This pie chart indicates awareness of “Multiculturalism”. Similar to Hamamatsu City, about 79% almost don’t know about it.



(Fact-finding Survey of multiculturalism in Shinjuku district (2015))

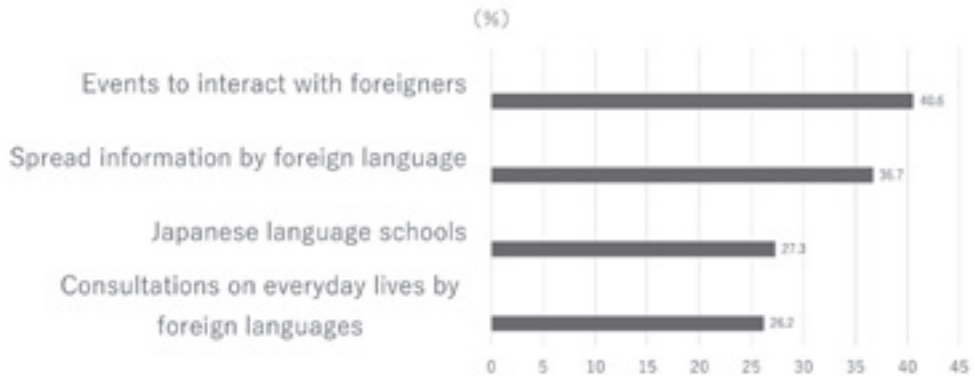
This pie chart illustrates socializing with foreign residents and the figure for people who have a close relationship with a non-Japanese person is only 8%.



(Fact-finding Survey of multiculturalism in Shinjuku district (2015))

This bar chart indicates citizens’ opinions about what needs to be done by the administration. Most of the policies have already been offered by the administration.

What to be done by the administration



(Fact-finding Survey of multiculturalism in Shinjuku district (2015))

By comparing these two cities, I found that their administrations' efforts and residents' recognition show a surprisingly similar trend. Their attempts transcend conventional livelihood support and contain some efforts to establish an "intercultural city". However, on the citizens' side, their awareness of multiculturalism is extremely low, and there is little interaction with foreign residents. Administration officials' efforts should be made much better known to the general public.

I suppose that under the current circumstances, a citizen who voluntarily and actively collects information and participates in various events can make many foreign friends. On the other hand, passive citizens can't receive any information. Furthermore, I wonder whether those who have racist thoughts and prejudices toward immigrants would willingly take part in such events. So, with the Japanese situation in mind, let's us next take a look at the Spanish case.

4. Spanish immigration policy: Intercultural City

First, let's overview the Spanish immigration history. Before the 1970's, many workers and members of the intelligentsia in Spain were out of the country because of the civil war. In 1980's, the situation changed, Franco's despotism ended, the Spanish society started to move towards democracy, and Spain entered the EC in 1986. In addition, some Western European counties later began to be intolerant to immigrants because of the economic depression. Because of this, the number of immigrants in Spain increased dramatically. In 2000, there were less than 1 million, while in 2012 the number was about 5.4 million. According to the newest data, Spain has 4,570,000 immigrants. It accounts for 10% of total population. In terms of nationality, the biggest number of immigrants come from Morocco, with Romania second.

The latest public opinion polls suggest that Spanish society shows a relatively tolerant attitude toward immigrants as a whole. Other kinds of data also support this. Research by the EU suggests

that Spaniards who think that immigration is the main concern at a national level account for only 6% of the population as of March 2018, although this figure was 19% in November 2018, and 16% in June 2019. The figure is becoming bigger year by year, but if you consider the Spanish geographical location on the Mediterranean coast, I think this figure is not too high. According to other research, 86% of Spanish citizens are in favor of accepting asylum seekers. This figure is the highest among all EU countries.

What is behind such data? It may be because of all the memories from Franco's era. Some experts point out that "Because many Spanish people share the terrible memory of the Franco fascist regime which lasted for more than 30 years, they are willing to accept immigrants."

On the other hand, some experts point out another side-effect of Franco's rule. During that era, schools offered patriotic education such as "Spanish will be future universal language" or "Blacks are an unimaginative and terrible tribe". The impact of such education remains to this day. For example, in the soccer stadium, Spanish supporters sometimes jeer black players by throwing bananas and things like that. In addition, in the 2019 elections, VOX, the extreme right-wing party, got into parliament for the first time. It won 24 seats in April, and 52 seats in November. Furthermore, it is said that the Spanish economy is now on the way to recovery from the economic crisis. In 2019, the unemployment rate is 15.3%. The figure for the younger generation is 34.4%.

These two opposite actual conditions are very confusing. It's difficult to identify which is the "true" Spain. So, in this presentation, I'll expand the discussion on the assumption of "some Spanish think of Spain as No.1", while others, the majority, accept immigrants as their new friends." Actually, the Intercultural City program plays a big role here.

So, what is an Intercultural City? It's one of the newest concepts. There are two famous traditional concepts regarding immigrants. One is assimilation and the other is multiculturalism. Assimilation says that immigrants' special nature will disappear. Such a policy is seen in France. Multiculturalism says that immigrants' special nature should be protected. It's traditionally seen in Japan and the UK. "Interculturalism" tries to utilize advantages of both concepts. It means that immigrant's special backgrounds should not be emphasized too much.

The council of Europe started an Intercultural city program in 2008. It supports cities in reviewing their policies through an intercultural lens and developing comprehensive intercultural strategies to help them manage diversity positively.

The key point of "Interculturalism" is here: to regard diversity as a resource rather than a problem and accept that all cultures change as they encounter each other in the public arena.

Today, I have picked up Barcelona as a successful case of an Intercultural City. In Barcelona, the immigrant population has increased dramatically. In 2000, there were 55,000 immigrants, and in 2017, the number of immigrants was 290,000. Crimes committed by immigrants have also

increased, from 200 in 2012 to 3,400 in 2017. However, the proportion of citizens who think of immigrants as a problem has decreased from 15% in 2008 to 3% in 2016.

So, what kinds of policies have been implemented by the local administration? There are two famous policies. One is the so-called Anti-rumor Policy. The administration trains anti-rumor agents who can object to unfounded rumors (such as “immigrants take away our jobs”) based on objective evidence. This policy aims to get rid of ignorance in people’s daily lives. The other is Barcelona’s Intercultural library. By mixing same-genre books written in various languages such as Spanish, English, and Chinese on the same shelf, it is trying to enhance active interaction among citizens.

Through these policies, Barcelona is said to have been successful in trying to live together with immigrants.

5. Conclusion

Finally, I’ll compare the Japanese and Spanish immigration policies. Did you notice some differences between the two countries? I think that Spanish Intercultural City policy is more than just “providing international exchange chances for those who are interested”. The opposite can be said for the Japanese policy. In addition, the concept of multiculturalism is not clear to most Japanese citizens. So, if the administration calls on them to enhance multicultural society, it’s not likely to succeed. Needless to say, the “Multiculturalism 2.0” or “Intercultural city” measures haven’t been successful. The government and administration should make a stronger effort to increase awareness of these key words. Last but not least, it’s important to make sure that “a larger number of immigrants is a strong point of the city” is a concept that takes deeper roots in society. We need to provide Japanese people with more chances to realize that is true, by increasing opportunities for international exchange, and I also want to see administrative bodies make much more effort to spread information related to immigrants and their respective cultures.

References

- ・ 石塚良明「多様性を生かしたまちづくりで外国人が活躍する社会へ」毛受敏浩編『自治体がひらく日本の移民政策』明石書店、2016年、127-134ページ。
- ・ 上野貴彦「移民をめぐる認識転換に向けた住民参加の拡大と継続—バルセロナ「反うわさ」にみる間文化主義と公共圏の再編」『移民政策研究』第11号(2019年)、145-155ページ。
- ・ 内野桂子「新宿区の多文化共生施策の現状と課題」『専修大学法学研究所所報』第56号(2017年)、54-69ページ。
- ・ 大泉陽一『未知の国スペイン』原書房、2007年。
- ・ 大泉常長『激動の欧州連合(EU)の移民政策』晃洋書房、2017年。
- ・ 梶田純子「多民族国家スペイン」川成洋・坂東省次編『現代スペイン読本』丸善、2008年、86-98ページ。

- ・ 楠貞義『現代スペインの現代社会』勁草書房、2011年。
- ・ 小井土彰宏「スペイン 新興移民受入国のダイナミズム」小井土彰宏編『移民受入の国際社会学』名古屋大学出版会、2017年、221-251ページ。
- ・ 駒井洋『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』明石書店、2006年。
- ・ 望月優大『ふたつの日本「移民国家」の建前と現実』講談社、2019年。
- ・ 藤田ラウンド幸世「新宿区で学びマルチリンガルとなる子供たち」川村千鶴子編『「移民国家日本」と多文化共生論』明石書店、2008年、211-214ページ。
- ・ 堀永乃「多文化共生社会に資する地域の取り組みー浜松の事例」三田千代子編『グローバル化の中で生きるとは』上智大学出版、2011年、99-110ページ。
- ・ 渡戸一郎「〈多文化共生〉再考ー〈多文化主義〉と〈インターカルチャリズム〉の狭間で」『移民政策研究』第11号（2019年）、188-203ページ。
- ・ 外務省「海外安全情報ページ テロ・誘拐情勢 スペイン」https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcterror_161.html（2019年10月5日アクセス）。
- ・ 外務省「スペイン王国基礎データ」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/spain/data.html>（2019年10月5日アクセス）。
- ・ カラム・ペイトン「「サル」「奴隷」…移民サッカー選手が差別語で差別に抗議」, *Newsweek*, 2019年6月3日、<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/06/post-12244.php>（2019年9月20日アクセス）。
- ・ 公安調査庁「世界のテロ等発生状況」<http://www.moj.go.jp/psia/terrorism/index.html>（2019年9月20日アクセス）。
- ・ 白石透牙「スペイン総選挙、与党過半数届かず 極右第3党に」『日本経済新聞』2019年11月11日、<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO52011370R11C19A1000000/>（2020年1月13日アクセス）。
- ・ 新宿区「住民基本台帳 外国人住民国籍別男女別人口 令和元年9月」<https://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000268901.pdf>（2019年10月12日アクセス）。
- ・ 「国際都市新宿・踊りの祭典」『新宿文化センター』<https://www.regasu-shinjuku.or.jp/bunka-center/odorinosaiten/>（2019年10月12日アクセス）。
- ・ 新宿区「平成30年度新宿区多文化共生関連施策一覧」<http://www.city.shinjuku.lg.jp/content/000249873.pdf>（2019年9月20日アクセス）。
- ・ 新宿区「平成27年度新宿区多文化共生実態調査」https://www.city.shinjuku.lg.jp/tabunka/tabunka01_002063.html（2019年9月20日アクセス）。
- ・ 徳橋功「多様性を活力にするために -「インターカルチュラル・シティの最前線ーバルセロナの取り組みからー」講演レポート」『My Eyes Tokyo』2016年1月18日、<https://www.myeyestokyo.jp/52167>（2019年9月20日アクセス）。
- ・ 『浜松市外国人学習支援センター』<http://www.hi-hice.jp/u-toc/index.php>（2019年9月20日アクセス）。

- ・浜松市「浜松市における日本人市民及び外国人市民の意識実態調査報告書」<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/documents/2018houkokusyosyo.pdf> (2019年9月20日アクセス)。
- ・浜松市「平成30年度市民アンケート調査結果報告書 浜松市戦略計画2018について」https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/koho2/politics/simin_tyosa/h30/12.html (2019年9月20日アクセス)。
- ・『フェスタ・サンバ』<http://hamamatsu-samba.jp/> (2019年9月20日アクセス)。
- ・法務省「在留外国人統計」<http://www.moj.go.jp/content/001237697.pdf#search=%27%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E4%BA%BA%E5%8F%A3+%E6%8E%A8%E7%A7%BB%27> (2019年9月29日アクセス)。
- ・法務省「平成30年末現在における在留外国人数について」http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html (2019年9月29日アクセス)。
- ・Aasim Saleem , “Personal stories 'I fear Spain will not be the same in a few years from now'”, *Info Migrants*, January 24, 2019, <https://www.infomigrants.net/en> (accessed October 12, 2019).
- ・AFP “Barcelona mayor reelected after beating separatist” ,THE LOCAL, June 16, 2019, <https://www.thelocal.es>, (accessed October 12, 2019).
- ・Álvaro Sánchez, “Spain is the most welcoming EU country for refugees, survey finds” *EL PAIS*, September 21, 2018, <https://elpais.com>, (accessed October 12, 2019).
- ・Council of Europe “Intercultural Cities”, <https://www.coe.int/en>, (accessed October 12, 2019).
- ・Daniel Wittenberg, “Fears of rising tide of racism after vicious attacks on migrant children in Catalonia” *INDEPENDENT*, March 17, 2019, <https://www.independent.co.uk>, (accessed October 12, 2019).
- ・European Commission, “Standard Eurobarometer 89,90,91”, <https://ec.europa.eu/commfrontoffice/publicopinion/index.cfm/survey>, (accessed October 12, 2019).
- ・OECD, “Working Together for Local Integration of Migrants and Refugees in Barcelona”, *OECD library*, July 26, 2018, <https://www.oecd-ilibrary.org>, (accessed October 12, 2019).
- ・Raphael Minder , “Spain Took Them in as Migrants, but Scorns Them as Street Vendors” *The New York Times*, September 2, 2018, <https://www.nytimes.com/> (accessed October 12, 2019).
- ・Stephen Burgen, 'Tourists go home, refugees welcome': why Barcelona chose migrants over Visitors” *The Guardian*, June 25, 2018, <https://www.theguardian.com> (accessed October 12, 2019).
- ・Stephen Burgen, “It’s about racism’ - Spain’s street vendors caught up in immigration row” *The Guardian*, August 14, 2018, <https://www.theguardian.com> (accessed October 12, 2019).

報告要旨

2019年の改正入管法の施行にもみられるように、近年日本では「移民問題」「外国人労働者問題」が大きく取り沙汰されている。現実問題として日本に定住する外国人の数が増加し、識者によっては世界第7位の移民大国ともいわれる現在の日本社会において、彼らをどのように受け入れればいいのか、また日本が現在抱える問題点は何かについて考察した。その際、日本と同様に「21世紀の新興移民受入国」でありながら日本よりも移民との共生に成功しているとされるスペインとの比較を行い、とりわけ欧州評議会が行っている「Intercultural City」というプログラムに着目した。これは、従来の同化主義・多文化主義の両者の反省を踏まえた「移民の特殊性は強調されすぎではならず、異文化間の交流こそ重要である」「移民が多く居住することはその都市の強みである」という考えに基づいたもので、2019年10月時点で136の都市が参加し、日本からは浜松市が唯一のメンバーとなっている。

具体的には、日本国内で先進地域と目される静岡県浜松市と東京都新宿区の事例を取り上げ、バルセロナ市と比較を行った。これらの日本の2都市では行政の行っている施策の性質と、市民の多文化共生への認識の程度に驚くべき類似が見られた。国際交流イベントの開催や、外国語教室の開催などの行政側の努力と裏腹に、市民の側では多文化共生という言葉の認知度すら低く、個人レベルでの交流が意外なほどに進んでいなかったのである。その原因としては、従来の取り組みが「国際交流に意欲のある人向けにその機会を提供するもの」とどまっており、それ以外の人々を巻き込めていないという実情が窺われた。

それに対してスペインは、地中海を隔ててアフリカ大陸に面しており近年移民の急増に直面しているながら、彼らに対して比較的寛容であるということが各種世論調査から明らかになっている。とりわけ、今回比較対象としたバルセロナ市は、Intercultural Cityプログラム参加都市の中でも成功例として取り上げられることの多い都市である。移民人口の激増、それに伴う移民による犯罪数の増加にも関わらず、市民は比較的寛容な姿勢を維持しており、「反うわさ政策」「図書館の改革」等が行政の施策として著名で大きな役割を果たしていると考えられている。

最後に、両者の比較を踏まえ、今後の日本の地方自治体の在り方として、市民全員を巻き込んでいくという姿勢を持つことや、多文化共生という概念の認知度を高めること、また国際交流のイベント等の情報を行政側が一層積極的に発信していくことを提案した。実際に普段大学生活で自分が感じている、「キャンパスには留学生がたくさんいるがなかなか交流ができない」というもどかしさを反映した結論となった。

討論会報告



1. ユトレヒト大での質疑

- ・日本で移民が増加しているとはいっても、2.2%はごく少ない数字に過ぎないのではないか。それほど喫緊の課題ではないのではないか

→この問題が現在日本で重要な焦点として浮上しているという理由として、労働力人口の減少で人手不足が深刻化しており今後移民数の増加が社会の要請として見込まれること、また少子高齢化により日本人の人口が減少していく中で移民の割合も上昇すると予想されること、の2点を説明した。予期できた質問とはいえ、また単語の選び方が適切だったかはわからないが、2点の理由を挙げられたのはよかったのではないかと感じた。

- ・移民に対してはそれぞれの国で姿勢が異なるが、日本は開かれているのか（オープンマインドなのか）

→現時点では移民との接触の機会が少ないだけに、おそらく移民に対して正負の感情いづれも明確には持っていないのが現状ではないか、だからこそこの段階でマイナスなイメージを持たせないのが重要であるという説明をした。これはどちらかという自分の願望に近い部分もあるのかもしれない。実際にヨーロッパに来てみて、人種がいかにか混ざっていてそれが自然なことであるかを実感しており、国内で街中で外国の方を見た時の周囲の反応などから、日本人についてオープンマインドとまでいうのは少し苦しかったかと感じている。

2. バリ大での質疑

- ・なぜ日本人は移民の存在に気付かないのか

→浜松や新宿といった外国人集住都市内においてさえ、団地など特定の地域内に偏って移民がいるのが現状であり、それ以外の都市では移民との接触の機会が極めて少ないからだ、という説明をした。

- ・ 人種によって移民の働きやすさに違いはあるのか
→中国人、韓国人に関しては日本への居住の歴史が長いために、例えば各地の中華街や新大久保など、新しい移民を受け入れるコミュニティがあるので多少働きやすいのではないかという説明をした。
- ・ 移民はすぐに働けるのか
→一応日本ではブルーカラーの労働者は原則受け入れてこず、特定技能制度の導入でそれが変わりつつあるというのが実態であるが、その辺りの細かな事情を適切な言葉で説明することはできなかった。この部分に関しては、準備不足が否めない。
- ・ Interculturalismは日本で実際どのように行われていて、うまくいっているのか
→この質問には多少手間取った、というのも実際に浜松なり新宿なりでフィールドワークを行ったわけではなく、自分の実感としてうまくいっている、っていないを語るができなかったからである。数字上はまだこの両都市においても改善の余地があるようだが、今後の課題としたい。
- ・ 「ハーフ」の統合はうまくいっているのか
→日本では肌の色が異なる人の割合がやはり少なく、周囲から浮いた感じにはなっていないという実情は伝えた。質問者が誰だったかを忘れてしまったが、もしかしたら自身が「ハーフ」だったのかもしれない。フランスでどのような様子なのかを聞いてみればよかったと若干後悔している。

2回の討論会を経験して、「なぜ日本ではさほど移民の数が多くないのに問題意識があるのか」という問いが多く、「これから増えると見込まれるから」と答えると納得してもらえる部分が多かった。「研修を終えて」の箇所でもふれたように、実際にヨーロッパ社会の様子を感じる中でも改めてこの分野の必要性を再認識し、欧米の事例から積極的に学んでいく必要があると感じた。

3. プレゼンに関して

プレゼンの練習方法についていろいろ考えてはみたものの、結局準備不足が否めなかったが、原稿を持たずに自分の言葉で話せたのは良かったと思う。ユトレヒト大では一カ所飛ばしてしまった部分に後で気づいて順番を一部入れ替えて出来たのは良かった。パリ大に関しては、少人数で気持ちの余裕があったこともあり、適宜問いかけを挟んだりできて良かったと思う。ちなみに、「Interculturalism」の認知度は10人程度中1人であった。

4. 研究の内容に関して

問題設定は、おおむね適切だったと考えている。現在の知識量や限られた時間を鑑みても、無理のないテーマ設定だったのではないかと。ただ、文献の探し方に問題があったのかもしれないが、語学力の問題からスペイン語の文献を扱えず、情報量がやや少なくなってしまったことと、本家本元の文書に当たれないというのは少し好ましくなかったかと考えている。

リソースについては、国内の事例については書籍や自治体の公的な報告書、スペインの事例については国内の研究者の論文及び海外ニュース、EUの報告書を使用した。様々な制限がある中で比較的信用できる、また多岐にわたる文献に当たれたと考えている。ただ、今後量をこなすことでもう少し英語の本格的な論文も抵抗なく用いることができるようにしたい。

分析の視覚としては、今回自治体というものに絞ったが、やはり国単位であると制度等も複雑であることを考えると正しい選択だったのではないかと。その分、国の制度への理解がまだ不十分な部分が自分の中でも残っており、質疑の際に簡潔に回答できなかったのが悔やまれる。

The Economic Situation and Political Strategies Regarding Ethnic Minorities in the EU

Taishi Ogawa

*What is the ideal politic strategy to tackle with the problem regarding ethnic minorities?
Based on the two different measures taken in the past, we will search the most appropriate way.*

1. Introduction

Hello, everyone. I'm Taishi Ogawa. Thank you for attending this discussion meeting. Today, I'm going to focus on the problem of ethnic minorities and related political strategies. When you hear the word "ethnic minorities", what comes to your mind? Maybe, one of them is poverty. Actually, it is often said that there are economic gaps between the majority of people in a society and minority groups. What else? Maybe, the discord between a people with another people. These days, terrorist attacks frequently occur in EU countries. This list includes just a few examples.

Date	Location	Incident	Deaths
7-9 January 2015	France	Charlie Hebdo Shooting	17
13-14 November 2015	France	November 2015 Paris Attacks	130
22 March 2016	Belgium	2016 Brussels Bombings	32
14 July 2016	France	2016 Nice Attack	86
19 December 2016	Germany	2016 Berlin Attack	12
22 May 2017	United Kingdom	Manchester Arena Bombing	22
16-21 August 2017	Spain	2017 Barcelona Attacks	16

(<http://www.moj.go.jp/psia/terrorism/index.html> をもとに報告者が作成)

All of these terrible incidents have been caused by Islamic extremist groups. Many people say that all members of a society should be equal. Many people say that regardless of race or religion, we should maintain good relationships with each other in this globalized world. However, the reality is unfortunately different. I feel that if there are better political strategies, we can improve this situation. Through this presentation, I am going to refer to some policies and discuss what should be done. So now let me start with a definition of "ethnic minorities."

2. Defining "ethnic minorities"

What are ethnic minorities? For example, in Europe, these people are regarded as ethnic minorities, even if their situations and history differ considerably. The Roma. Catalan people. The Basques.



Roma

(<https://world-note.com/romani-people/>)



Catalan people

(<https://www.footballista.jp/interview/39857>)

Historically, these people have lived in Europe for a long time. Then, how about immigrants? Recently, and especially in Europe, the problem of immigrants is becoming bigger and bigger. In Japan, I often watch TV news or see newspaper articles about it. In this presentation, when I say, “ethnic minorities”, I want to include immigrants in the term also. This is because immigrants and minorities have a lot in common. For example, they tend to live in clusters. They tend to have different traditions and religions from the majority. Therefore, when we talk about political strategies, I think they can be an effective tool to tackle “local” ethnic problems related to immigrants as well.

3. The difficulties the ethnic minorities are facing

Next, I’d like to focus on the difficulties which ethnic minorities are facing. There is much research on this topic. According to the EU, in 2011, ethnic minorities like the Roma face an especially difficult situation. Two thirds of them are unemployed. Only 15% of Roma children graduate from high school. Immigrants also face similar difficulties. Germany is a country known for its positive attitude to immigration, that is, it actively accepts immigrants and refugees. However, even in Germany, there is data which clearly shows a large gap between the majority and the minorities. One piece of research says, “Among those who have an immigrant background, 13.3% leave school without finishing it. This rate is about twice as high as the number of “German” Germans who do not finish high school. Also, the unemployment rate is 12.4%, which is also twice as high as among members of the majority. Because of their lack of German-speaking skills and lack of education, they tend to rely on public assistance.” These are just a few examples of common problems that ethnic minorities typically face, according to existing research.

Of course, the majority can also be affected by these problems. Too much public assistance will be a big fiscal burden. Or, an even more serious problem is that when discontent within

ethnic minorities increases, the whole society will be divided more deeply and the kind of terrible incidents that I mentioned in the first of this presentation may happen again.

So, what can governments do?

4. Looking back on the politic strategies in the past

As in the EU, they have to have clear standards to protect the ethnic minorities. That is, all countries should have something like the Copenhagen criteria. According to these, a country which wants to be a member of the EU is required to achieve the “stability of institutions guaranteeing democracy, the rule of law, human rights and respect for and, protection of minorities.” Of course, I wouldn’t say this is perfectly possible in practice, but I think this requirement has had a positive influence on EU countries to some extent. For example, many countries guarantee the rights of minorities to use their own languages and forbid discrimination against them.

Also, each country has its own political strategies to try and solve the problem. Today, I don’t have much time, so I will just talk about Germany and France. This is because, in spite of their similarities in terms of the size of economy and population, they have quite different approaches. Germany has adopted multiculturalism and France has adopted a strategy of assimilation. As you know, multiculturalism is a policy which treats each ethnic group equally. This sounds nice, but, what has actually happened in Germany? I can’t say that the policy has been successful. Remember the large gaps in Germany I just mentioned. Moreover, in 2010, German Chancellor, Angela Merkel said a surprising thing. She said, “Multiculturalism has completely failed.” Of course, she doesn’t mean that Germany will not accept any more immigrants. What she implied was the fact that in a multicultural society, people tend to form clusters. This avoids ethnic minorities from adapting themselves to their surroundings. I feel the truth that many minorities can’t speak German so much is a typical example of this failure.

How about France? It is said that France has chosen assimilation. Assimilation is a policy which regards everyone in the population as one nation. So, regardless of their background, people living in France are “French people”. The official language is French only. Compared to the German multiculturalism, this approach seems much less tolerant. However, there are advantages to this policy too. Since ethnic minority groups are also French people, the minorities are in effect supposed to be equal to the majority group. France is a country of Liberty, Equality and Fraternity. But then again, is assimilation perfect? I think not, unfortunately. I feel that events like the terrible incidents at the newspaper company and the increasing power of extreme right political parties like RN imply a gap between the majority and the minority.

5. Conclusion

In conclusion, what type of politic strategy is ideal? In the world as a whole, the Copenhagen criteria are probably worth referring to. By adopting common rules and laws in international organizations like the EU, many countries will make bigger and more effective efforts. When we talk about a policy in each country, a German type of multiculturalism is not really the correct choice. I would prefer to see a policy based on assimilation. However, we have to overcome the disadvantages of assimilation. In my opinion, giving equal rights to everyone including ethnic minorities is great. Plus, we should cherish people's ethnicity. Even though all people might be regarded as one nation, that doesn't mean that their backgrounds should be erased. Assimilation has the risk of controlling people's identity too much. We need to do something to save their identity. For example, setting their languages as quasi-official language can be one measure. By doing something like that, I believe we can find a well-balanced policy.

Thank you.

References

欧文献

- Jeremy Druker, "Present but Unaccounted for," *Partin*, no.4 (1999), <http://www.geocities.ws/patrin01/unaccounted.htm>
- Robb B. Rutledge, Archy O. de Berker, Svenja Espenhahn, Peter Dayan and Raymond J. Dolan, "The social contingency of momentary subjective well-being," *Nature*, June 13, 2016, <https://www.nature.com/articles/ncomms11825>

和文献

- 「EU、ロマ人の統合促進へ国別戦略策定へ」『日本経済新聞』2011年4月13日、
https://www.nikkei.com/article/DGXNASGM0601M_T10C11A4FF1000/
- 「【移民の成功学・失敗学】フランス編 Vol.1 欧州最大の移民国家の光と影」*The Liberty Web*, 2018年10月31日、https://the-liberty.com/article.php?item_id=15061
- 「【移民の成功学・失敗学】フランス編 Vol.2 フランス的平等から見る移民政策の歩み（後編）」*The Liberty Web*, 2018年12月1日、https://the-liberty.com/article.php?item_id=15166
- 「移民問題とドイツの課題」*NewsDigest*, 2010年10月29日、
www.newsdigest.de/newsde/news/featured/3074-840/
- 欧州連合日本政府代表部『EUにおける経済的格差の現状について』2019年3月、
www.eu.emb-japan.go.jp/files/000462366.pdf
- 大島美穂『EUスタディーズ3 国家・地域・民族』勁草書房、2007年。
- 「格差を解消し経済成長を図るEUの対貧困政策」*Europe magazine* 駐日欧州連合部の公式

ウェブマガジン2015年3月31日、<http://eumag.jp/feature/b0315/>

- ・金子マーティン『「ジプシー収容所」の記憶—ロマ民族とホロコースト』岩波書店、1998年。
- ・四釜綾子「ドイツにおける移民・民族問題の現状」『高等学校 地理・地図資料』帝国書院、2009年2月号。
<https://www.teikokushoin.co.jp/journals/geography/pdf/200902/1-3.pdf#search=%27%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84+%E6%B0%91%E6%97%8F%E6%94%BF%E7%AD%96%27>
- ・『世界のテロ発生状況』公安調査庁、2020年1月18日、
<http://www.moj.go.jp/psia/terrorism/index.html>
- ・デーヴィッド・クローウェ『東欧・ロシアのロマ民族 ジプシーの歴史』共同通信社、2001年。
- ・初岡昌一郎「失敗した多文化主義と同化政策—西欧における移民集団と社会の対立—」『オルタ広場』138号(2015年)、
<http://www.altermagazine.jp/index.php?%E5%A4%B1%E6%95%97%E3%81%97%E3%81%9F%E5%A4%9A%E6%96%87%E5%8C%96%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E3%81%A8%E5%90%8C%E5%8C%96%E6%94%BF%E7%AD%96>
- ・『メルケル首相「多文化主義は完全に失敗」—今この発言に注目すべき理由』HUFFPOST、2017年1月23日、https://www.huffingtonpost.jp/yuki-murohashi/merkel_b_9063112.html
- ・「ルーマニアにおけるスイスの支援活動 貧困にあえぐロマ民族 哀愁と希望のはざままで」*swissinfo.ch*、2015年4月27日、https://www.swissinfo.ch/jpn/ルーマニアにおけるスイスの支援活動_貧困にあえぐロマ民族—哀愁と希望のはざままで/41396544

※URL最終アクセス日は全て2020年1月18日

報告要旨

以前からヨーロッパでは多様な民族が生活してきた。また、最近ではいくつかの国で移民や難民の数が急速に増加している。各国において多数派の民族と少数派の民族が存在し、その生活水準が民族によって異なることが問題となっている。一般に少数派の民族が経済的困難に直面していることが多く、経済格差を示すデータも存在する。さらに、近年ではヨーロッパにおいてもイスラム過激派によるテロ攻撃なども増加しており、移民や難民の受け入れに積極的であった各国でも移民排斥を訴える政党が支持を伸ばすなど、社会の分断が深まっている。このように、少数民族が直面している差別的扱いや経済的困難を解消することは、言うまでもなく喫緊の課題である。

ところで、少数民族と言うと、古くからその土地に定住していた民族で独自の文化などをもつマイノリティというイメージを持たれる方もいると思うが、私はこれに移民を加えたグループを「民族的マイノリティ」と呼んで議論したいと考えている。なぜなら旧来か



らの少数民族と、新たに定住するようになった移民とは共通する特徴があるからだ。例えば、両者ともにその民俗で集まって居住する傾向があったり、その国のマジョリティとは異なる宗教信仰をしていたりする。私はこのような共通点を踏まえて、「民族政策」が両者どちらにも影響をもたらすと考えている。

一口に政策と言ってもEUという組織として行うものと各国が行うものがあり、これらの組み合わせによってその効果が決まり、人々の生活環境が変化していく。この発表では政策を大きく「EU全体」と、「各国ごと」に分けて考察していく。まずEU全体の民族政策についてだが、これはコペンハーゲン基準というEU加盟の際に求められる義務を定めた基準によって、民族的マイノリティの保護

が定められている。EU加盟を目指す東欧諸国が制度を整えたり、民族的マイノリティの言語も公用語として認めたりするなど一定の効果が上がっているようだ。これに対して、一つの国として少数民族の問題に取り組むための政策には、大きく分けて多文化主義と同化主義の二つがある。多文化主義が、多様な民族がその文化を守って生活していくことを目指す考え方であるのに対して、同化主義はその国で暮らしている人々は、彼らの人種や宗教などに関係なく、皆同じ国の「国民」とみなす考え方である。ドイツが多文化主義を採用したのに対してフランスは同化主義を採用したと言われているが、ドイツでは民族的マイノリティがうまく溶け込めないという多文化主義の短所が表れた。一方、フランスではイスラム過激派の活動や、極右政党の躍進など社会の分断を象徴するかのような動きが目立つ。これらを踏まえると、全ての国民を同じとして扱う同化主義の原理に則りながら、各々のアイデンティティを保てるような政策が望まれるのではないか。

討論会報告

私はユトレヒト大学とパリ・ディドロ大学での討論会において民族問題をテーマとするプレゼンを行った。ゼミでの1年間では自身の研究に紆余曲折があった。例えば、当初EUを国単位ではないひとつのまとまりとして見て、その中で民族を単位に研究したらその差を示し、新たな示唆を得ることが出来るのではないかと考えていた。しかしながらこの課題設定には先行研究の不足など明らかな無理があり、最終的には多文化主義と同化主義の比較というところに落ち着いた。調査の進め方としては、書籍をもっと活用すれば良かったというのが反省点である。民族問題というのは近年のホットトピックであり、それ故に

インターネット上での記事などが非常に自身の研究にフィットする内容とはなっている。しかしながら、それに頼りすぎたがために実用的な内容が増えて学術的な論理はあまり含むことが出来ずバランスが悪くなったという印象は否めない。同化主義や多文化主義について、例えば社会学の視点から学問としての論理を分析すればより深くなっただろう。

研究する前の私は多文化主義という言葉の聞き心地の良さから自然に多文化主義を是とする考え方を持っていた。しかしながらそれが成功しなかった例、同化主義という手段を知ることで、それまでの固定観念に縛られず新たな解決策を探ることが出来た点は非常に有意義だったという風を感じている。

さて、ユトレヒト大学での討論会では質疑応答として「民族的マイノリティの統合は必要なのか」という質問があった。私はドイツに存在した言語教育等に関する統合プログラムの失敗例を紹介し、同化主義の考え方に基づいた方法が優れているのではないかと回答した。このトピックについてはユトレヒト大学側の学生間で意見が割れ、ヨーロッパの学生の民族問題への関心の高さを感じさせた。回答の中で、統合にしても同化主義にしてもそのフェーズにおいてアイデンティティを失わせてはいけないことを主張できればより良い回答であったと振り返っている。

また、パリ・ディドロ大学の学生からは移民問題に絡めて日本国籍取得の難しさを指摘する声や、なぜ研究の対象にフランスを選んだのかという質問があった。前者に関しては、日本語学部ということもあって日本について詳しい知識を持っていたようである。回答する中で日本の難民認定数の低さ等については弁明のしようがないことをしみじみと感じた。後者の質問については、フランスは大陸の一部であり移民・難民の流入も多いことや国際社会での影響力も大きいことから、今後日本が参考にすべき点が多いのではないかと考えて対象にしたということを説明した。実際、研究を通して日本の現状には改善が求められるということはこれまで以上に強く感じたところである。

International Labor Mobility and Immigration in France and Japan

Haruka Kanamaru

Japan has not accepted many immigrants throughout history, and is facing many issues regarding immigration today. How can Japan improve its immigration system to create an equal and comfortable society for everyone? I will seek a solution for Japan through examining France and Japan's cases.

1. Introduction

Hello everyone. My name is Haruka Kanamaru. Today I'm going to talk about international labor mobility and immigration in France and Japan. France is a country with the largest immigrant population in the EU. On the other hand, Japan is a country that has not accepted many immigrants throughout history. The reason why I chose France and Japan is because I thought that, by comparing these two countries that are at different stages in terms of immigration, I could come up with some solutions for Japan. This is the outline of my presentation. First, I will talk about France. I'll look at its labor mobility throughout history, and then talk about immigration in France today. Then, I will talk about Japan following the same steps, and after that, I'll wrap up my presentation by talking about some possible solutions for Japan.

2. France

2-1. Immigration in France

First, let me begin by explaining the situation in France. France is a country that has been active in trade for many centuries. Especially between the 16th and 19th centuries, France emerged in various countries around the world through colonization and the triangular trade. Some of the places they went to were Africa, Southeast Asia, and North America. For immigration, with the national motto, "liberty, equality, and fraternity" rooted in the French Revolution, they began accepting immigrants from the early 19th century. Today, France accepts immigrants from various countries. Within the EU, many people usually come from Portugal and Italy. These are countries that are quite close to France, but do not have a high GDP compared to it. Many people also come from Africa. The top three are Algeria, Morocco, and Tunisia. In France, the number of immigrants accounts for 15% of the total population.

2-2. France's Immigration Policy

Next, I'll talk about some of the immigration laws and policies in France. Assimilation is a

big part of the French immigration policy. The assimilation policy aims to treat everyone as equal French citizens, and unity is prioritized over diversity. In the background, there's a strong sense of nationalism and the idea that preserving the French culture and tradition is important. However, even with this law that seems to be ideal, some immigrants are feeling separated from the French community, and there are certain issues regarding this policy. Another law I want to introduce is the new asylum and immigration law that has been issued this August. This law weakens appeal rights and safeguards for asylum seekers, and also undermines access to asylum. This law was made because of the predicted surge of asylum seekers in the near future, but it has given rise to controversy, especially in the EU.

2-3. Issues in France

Now, let me explain some issues that France faces regarding immigration. One of the biggest issues is the disparity and isolation between immigrants and the French citizens. Many immigrants are experiencing inequality in various areas. For example, some foreign workers are facing gaps in education, unemployment, and poverty. These create a sense of isolation, and as a result, some immigrants are beginning to form their own separate communities like ghettos and parallel societies. This makes it even more difficult to reduce inequality. As I mentioned in the previous slide, equality is seen as very important in the French society. However, the fact that inequality is still evident in France shows that there are flaws in the assimilation policy. There may be a need to reconsider whether the policy's aim is actually being achieved or not. Another issue is about terrorism and discrimination towards certain religious groups. As most of you may know, a few years ago, there was a rise of terrorism in France. Since many of the culprits from the terrorist attacks were Muslim or descendants of immigrants, some people began discriminating against particular groups of people. According to the National Commission on Human Rights, it's said that anti-Muslim acts increased by 8% between 2016 and 2017. However, race or religion should not be tied up with terrorism, and this inaccurate image needs to be eradicated. The French government has started to take action and is improving its safety measures.

3. Japan

3-1. Immigration in Japan

I'll now talk about Japan. Japan has a unique history in terms of labor mobility. Until 1854, it was a closed country where they didn't trade with any country besides China and the Netherlands. Furthermore, they did not allow anyone to travel out or into Japan without the government's permission. After the Kanagawa Treaty was signed in 1854, Japan opened up their ports and began to trade with other countries. Some Japanese people emigrated to places like Oceania, South America, and North America as plantation workers. Immigration-wise, Japan experienced a major

economic growth after World War II, and began accepting foreign workers. Recently, the number of foreign workers in Japan has been increasing. It is said that they account for about 2% of the total Japanese population. Many foreign workers come from Asia and America.

Before I get into Japan's laws and policies regarding immigration, I want to give a quick explanation of Japan's current situation. In Japan, the population is aging and the birth rate is declining drastically. This is a map that shows the potential support ratio, which is the number of people aged between 25 and 64 per people aged 65 or over, in different countries in the world.

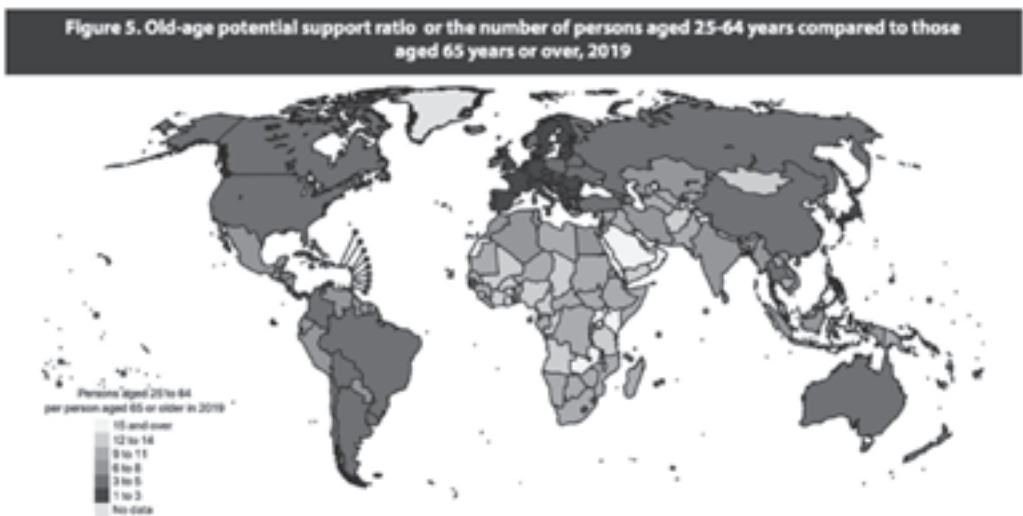


Figure 1. Old-age potential support ratio, 2019
(United Nations, World Population Prospects 2019 Data Booklet)

As you can see, Japan and many countries in the EU have a very low figure. In 2013, this ratio in Japan was only 2.5. Compare that to Saudi Arabia that had 23.6. In 2019, the situation is getting worse, and Japan currently has a potential support ratio of 1.8. This means that the Japanese population is shrinking and we are experiencing labor shortage. Japan is in a situation where we need to accept more foreign workers.

Country	Potential Support Ratio (2013)	Country	Potential Support Ratio (2013)
Japan	2.5	United States of America	4.8
Germany	3.1	South Korea	6.0
Sweden	3.3	China	8.2
France	3.6	Mexico	10.2
United Kingdom	3.7	India	12.4

Canada	4.5	Saudi Arabia	23.6
Australia	4.6		

Figure 2. Potential Support Ratio by Country, 2013
 (Nation Master, 2013. *Nation Master, "Countries compared by People > Dependency ratios > Potential support ratio"*)

3-2. Japan's Immigration Policy

Bearing that in mind, let's look at some of the laws and policies Japan has for immigration. Although the Japanese government says they are currently not accepting any immigrants that will live in Japan permanently, they are aiming to increase the number of foreign workers and exchange students. Japan has organized a few programs for foreign workers. One is a new specified skills visa that started this April. This new visa gives more opportunities for foreign workers to come to Japan legally. Another is the Technical Intern Training Program. In this program, the government of the sending country first sends a group of people to Japan. Then, the Japanese government sends them to supervised organizations, and those organizations then divide the workers into different companies or organizations. The aim is to help trainees acquire skills they can use once they get back to their own country to earn money or get a stable job. Unfortunately, this program does not allow trainees to stay in Japan for more than five years, so it is questionable whether it will solve labor shortage in the long term, but it could definitely be effective in the short term.

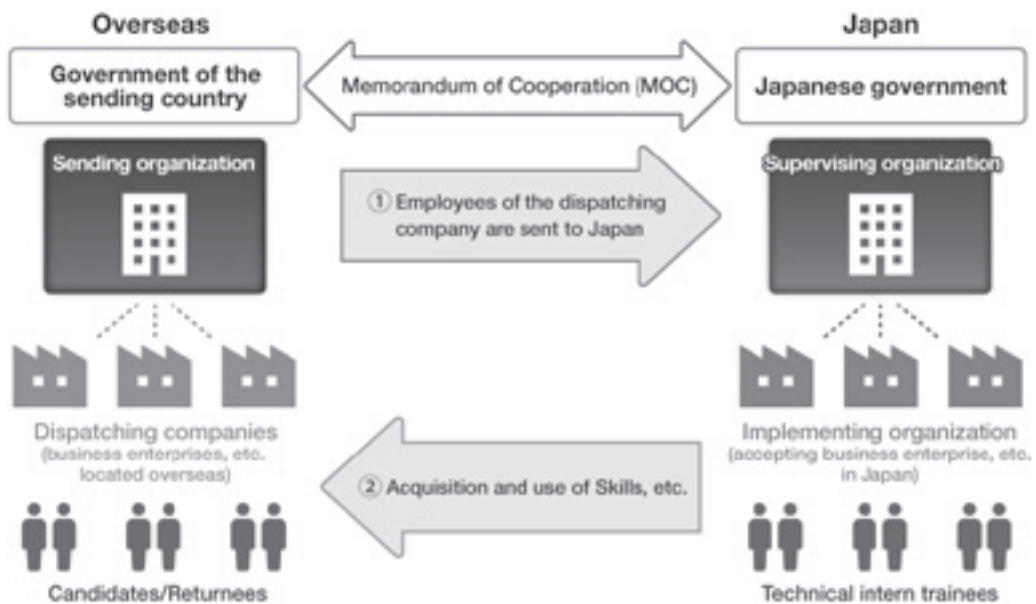


Figure 3. "JITCO." JITCO, https://www.jitco.or.jp/en/images/regulation/index/img_02.jpg .

3-3. Issues in Japan

As some of you may predict, there are countless issues about immigration in Japan. The first issue is the treatment of migrant workers. In Japan, some foreign workers are forced to work in harsh environments where they receive low wages and experience harassment and discrimination. What was shocking for me was that between 2011 and 2017, 174 people from the Technical Intern Training Program died either because of committing suicide or overworking. When I first saw this statistic, I did not want to believe that such a thing could happen in a program led by the government. Without any doubt, this is an area that the Japanese government needs to work on. Another issue is about the Japanese language and culture. First, the Japanese language is very particular, and we don't use any Western-style alphabets. So, different from languages like French, it's nearly impossible to know what the words on signs like these mean if you don't know any Japanese characters. Furthermore, Japan has some traditions and cultural values that may be very different from the rest of the world. To give an example that relates to the work environment, Japanese people value punctuality, and believe that being on time shows that you respect that person. These things that seem ordinary for Japanese people could become a barrier for some people.

4. Solutions for Japan

So, keeping those in mind, here are some possible solutions for Japan. The first solution is to renew the Technical Intern Training Program. I believe the government needs to supervise the program better and make a strict law that guarantees basic human rights for foreign workers. Another solution is to create a follow-up system for the Japanese language and culture. Many foreign workers actually come to Japan without knowing much about the language or culture. I think the government should provide support especially since they are seeking to increase the number of foreign workers in the coming years. The last idea is to raise cultural awareness. I think schools should teach more about different cultures and diversity from a young age to raise the children's understanding of various cultures. Local authorities could also hold festivals or events that combines different cultures with the Japanese culture. There is a reason why I thought diversity is more important than assimilation for Japan. For France, the assimilation policy is a way to balance preserving the French identity and helping those in need. Although it has its very own issues, I believe this policy is necessary for France and is indelible. However, I personally do not think this will work in Japan. As I mentioned before, Japan is a country with a very particular language and culture. Furthermore, many people are not exposed to foreign cultures and traditions on a daily basis. Therefore, I believe that raising cultural awareness and increasing the understanding between different cultures are more important than to expect people to assimilate to the Japanese culture.

5. Conclusion

In conclusion, France and Japan are at very different stages in terms of immigration. France is at a more matured stage, while Japan is only at the beginning. I believe France will continue to tackle their issues regarding immigration and help create a better society for both immigrants and French citizens. For Japan, I think we should look at the policies other countries have taken and carefully consider what they can apply to Japan. I hope that both countries will be able to create a society that's comfortable and equal for everyone.

References

- 稲葉佳子「欧州の移民コミュニティ見聞録」(2001年)
<http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/kanren/gaikoku/no09/001.htm> (アクセス2019年8月9日).
- 内山修「技能実習生、8年で174人死亡『不審死多い』と野党」(2018年)
<https://www.asahi.com/articles/ASLDF5F35LDFULFA029.html> (アクセス2019年9月5日).
- 金井雄一・中西聡・福沢直樹編『世界経済の歴史—グローバル経済史入門』名古屋大学出版会、2017年. 公安調査庁「世界のテロ発生状況」(2019年)
<http://www.moj.go.jp/psia/terrorism/index.html> (アクセス2019年8月9日).
- 国際日系研究プロジェクト「日本人の海外移住略史、1868年-1998年」(2001年)
http://www.janm.org/projects/inrp/japanese/overview_ja.htm (アクセス2019年8月9日).
- 佐藤俊輔『人の国際移動とEU: 地域統合は「国境」をどのように変えるのか?』法律文化社、2016年.
- 白井成彦「フランスにおける 選択的移民政策への移行の要因 —EU の影響力拡大による『共和主義の変容』と『フランス社会の右傾化』—」(2017年)
<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~takujit/course-of-faculty/dissertation/2017/2017shirai.pdf> (アクセス2019年9月5日).
- 鈴木規子「フランス移民の学校教育」(2010年) <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/61.html>
(アクセス2019年9月5日).
- 高山直也「フランスにおける不法滞在者の隔離措置の変遷」(2007年)
<https://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/legis/233/023303.pdf> (アクセス2019年8月9日).
- 知立東小学校「平成31年度知立東小学校の教育」(2019年)
<http://www.city.chiryu.ed.jp/chiryuhigashi/h31higashigaiyou.pdf>. (アクセス2019年8月9日).
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構「新移民法案提出: 移民の選別と社会統合策の強化へ」(2006年)
https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2006_4/france_01.html (アクセス2019年8月9日).
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構「移民・難民に関する法改正」(2006年)
https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2018/12/france_01.html (アクセス2019年8月9日).

独立行政法人労働政策研究・研修機構「不法滞在者、一部合法化も違法労働への罰則を強化」
(2010年)

https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2010_1/france_01.html (アクセス2019年9月5日).

法務省「平成27年における難民認定者数等について」(2016年)

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00112.html (アクセス2019年8月9日).

法務省「在留外国人統計(級登録外国人統計)統計表」(2019年)

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html (アクセス2019年9月5日).

正哲依光「日本における外国人労働者問題の歴史的推移と今後の課題」(2002年)

https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/14411/1/pie_dp52.pdf (アクセス2019年8月9日).

まつもとあつし「外国人雇用で我々の働き方は変わるのか?」(2019年)

<https://swri.jp/article/510> (アクセス2019年8月9日).

宮島喬『移民社会フランスの危機』岩波書店、2006年.

宮島喬『ひとつのヨーロッパいくつものヨーロッパ』東京大学出版会、1992年.

吉成勝男・水上徹男編著『移民政策と多文化コミュニティへの道のり—APFSの外国人住民支援活動の軌跡—』現代人文社、2018年.

蘭信三「いま振り返る『満州移民』の歴史と記憶」(2015年)

<https://www.jica.go.jp/jomm/kokai/pdf/08resume.pdf> (アクセス2019年9月5日).

BBC News, 2019年. 「日本で『搾取』される移民労働者たち」

<https://www.bbc.com/japanese/video-49471735> (アクセス2019年9月5日).

International Organization for Migration (IOM), 2018. World Migration Report

2018 https://www.iom.int/sites/default/files/country/docs/china/r5_world_migration_report2018_en.pdf (accessed August 9, 2019).

Kanchan81. *Gannenmono*, “元年者とは”.

<https://kizunahawaii.org/2018/05/24/%e5%85%83%e5%b9%b4%e8%80%85%e3%81%a8%e3%81%af/> (accessed September 5 2019).

Kastoryano, Riva. *Negotiating Identities*. Princeton University Press, 2002, 280-297.

Nation Master, 2013. *Nation Master*, “Countries Compared by People > Dependency ratios > Potential support ratio”.

<https://www.nationmaster.com/country-info/stats/People/Dependency-ratios/Potential-support-ratio#date> (accessed September 5, 2019).

Osumi, Magdalena. 2017. With new rules, Japan looks to wipe out abuse in trainee system – but critics say more must be done. *The Japan Times*.

<https://www.japantimes.co.jp/news/2017/11/01/national/new-rules-japan-looks-wipe-abuse-trainee-system-critics-say-must-done/#.XQH2HpP7Q0Q> (accessed September 5, 2019).

- SEVRAN, 2013. *The Economist*, “Forgotten in the banlieus”.
<https://www.economist.com/europe/2013/02/23/forgotten-in-the-banlieues> (accessed August 9, 2019).
- The World Bank, 2017. Age dependency ration (% of working-age population)
<https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.DPND> (accessed August 9, 2019).
- The Local France. 2016. *The Local*, "Majority in France against immigration".
<https://www.thelocal.fr/20160823/immigration-negative-for-france-majority-says> (accessed September 5, 2019).
- Thomas Henry Elkins, John N. Tuppen. Encyclopedia Britannica, France: Immigration.
<https://www.britannica.com/place/France/Immigration> (accessed August 9, 2019).
- Trading Economics. 2019年. 「フランス — 失業率」
<https://jp.tradingeconomics.com/france/unemployment-rate>. (アクセス2019年8月9日)
- UNICEF 2014, France Migration Profiles <https://esa.un.org/migmgmprofiles/indicators/files/France.pdf>, Accessed 2019.09.05.
- United Nations, 2019. World Population Prospects 2019: Highlights
https://population.un.org/wpp/Publications/Files/WPP2019_Highlights.pdf (accessed August 9, 2019).
- United Nations, 2019. World Population Prospects 2019: Data Booklet
https://population.un.org/wpp/Publications/Files/WPP2019_DataBooklet.pdf (accessed August 9, 2019).
- United Nations, 2017. International Migration Report 2017: Highlights
https://www.un.org/en/development/desa/population/migration/publications/migrationreport/docs/MigrationReport2017_Highlights.pdf (accessed August 9, 2019).

報告要旨

古くから人々は世界中を行き来していた。現在でも外国人労働者の多いフランスは、数世紀も前から近隣諸国や海を越えた国々と活発に貿易を行ってきた。特に16世紀から19世紀までの数百年間は海外進出に勢力的であり、植民地化と三角貿易を主軸に北米やアフリカ、東南アジアに進出していた。またフランス革命の「自由・平等・博愛」の精神から、19世紀という比較的早い段階から既に移民の受け入れを開始していたと言われている。フランスでは第一次世界大戦後に人口が激減した時期と、第二次世界大戦後のフランス経済が大発展を遂げた「栄光の30年」の時期に、モロッコやレバノンなどの旧宗主国や近くのポルトガルやイタリアなどからの移民が増加した。現在も旧宗主国や周辺のヨーロッパ諸国からの移民が多い。

対して日本は1854年まで鎖国状態にあり、オランダと中国以外の国との貿易や、自由に海外を行き来することが江戸幕府によって禁じられていた。しかし日米和親条約の締結に

より鎖国が解かれると、海外と積極的に交流するようになった。第二次世界大戦前まで、日本はハワイや南米のプランテーションへ移民を送る移民送出国であった。戦後は急速な経済発展に伴い労働力の需要が増加したこともあり、移民受け入れ国へと変容していった。現在日本の人口のおよそ2%は外国人であると言われている。

このような歴史的経緯の違いもあり、移民に関してフランスは日本よりも遥かに進んだ段階にいる。そのためフランスと日本では、移民問題に対する取り組み方だけでなく、抱えている問題の種類も異なっている。フランスでは移民もフランス人として平等に扱う同化政策を取っているが、全ての人が平等に扱われているとは言い難く、移民について多くの問題を抱えている。「スカーフ事件」などの宗教問題だけでなく、移民と非移民の経済格差や、ジプシーによる治安の悪化、イスラム過激派によるテロリズムなどの安全面の課題が多い。フランス政府は難民の受け入れ基準の強化や、テロリズムを防ぐため空港や国境でのセキュリティ強化などを行い、これらの問題の改善に取り組んでいる。一方日本は近年少子高齢化による働き手不足に直面しており、労働力不足に対応するために、政府は今年4月から外国人労働者の受け入れを拡大する方針を打ち出した。しかし移民を受け入れる体制は未だ整っておらず、外国人労働者へのハラスメント、言語や文化の壁という初歩的な課題が見られる。日本の言語や文化の特質性を加味すると、日本に同化政策を適用するべきではないだろう。言語と文化のフォローアップシステムや、様々な文化や言語について触れる機会を増やし、国全体の多文化への理解を深めることがまず必要だと考えられる。どちらの国も、それぞれの国の特徴を捉えたうえで、治安や労働環境の改善、文化の相互理解を行うなどし、課題に取り組んでいく必要がある。

討論会報告

At the Utrecht University, I received questions about Japan's lifestyle and attitude towards immigration. One student from Italy suggested that changing the stressed lifestyle of Japan is more important than to make laws to change people's attitude towards accepting immigrants. In the discussion, I talked about how Japanese people tend to be conservative and do not like making changes unless it is mandatory. I also pointed out how it is particularly difficult to change people's mindsets in countries like Japan, where there is a history of being a closed country and avoiding people and cultures from overseas. I explained that this is why making a law is more effective, but I should have also addressed the point that different from Europe, the Japanese society cherishes conformity. In Japan, everyone is taught to behave like others from a young age. This culture of conformity is also something that makes it difficult for people to accept changes in Japan. After the discussion, I also realized that I could have answered this question from a different perspective and explain the positive aspect of Japan's current lifestyle. After the war, Japan experienced a major economic growth and was able to boost its economy because of people's hard work. Today, some still believe that the economy is stable because of their current work style, and think that changing

it will not benefit the country or their lives. This makes it even more difficult to change people's lifestyles in Japan.

Another student asked why the Japanese government is not willing to accept immigrants when it would solve labor shortage. I said that although accepting immigrants may solve labor shortage in the short term, it could also create long-term issues such as causing safety concerns and disparities. Accepting immigrants has numerous positive effects to it, but it is also associated with many risks. Many countries that accept immigrants are also aware of the risks, but Japan is especially careful with it. This might be because Japan is not only geographically isolated from other countries, but also lacks in the diversity of its people. Not many are exposed to foreign cultures from a young age, so it is especially difficult to create a mindset that is open towards accepting foreign workers. These mindsets are not something that is built in a day or two. Throughout the Q&A session at the Utrecht University, I learned how distinct the Japanese culture and lifestyle is from European countries, and how understanding different cultural norms is quite complicated.

At the Paris University, I got questions on how Japanese people perceive those from outside of Japan. I said that although most people do not have negative opinions, not all of the reactions are positive. Some people still look at those from overseas with a curious eye, which might make them feel uncomfortable. They also do not interact with each other much. I was not able to say this in the discussion, but I should have talked about how people from overseas have difficulties integrating into the local Japanese communities since Japanese people are not used to encountering people from different countries and races, and are not exposed to foreign cultures so much.

We also talked about how one's race or nationality can change the way they are treated. One student said that often in France, people from Morocco and Algeria are discriminated because they are mistakenly tied up with the image of poverty and crimes. I said the same happens in Japan, where people from Southeast Asia are often treated unfairly because some have the impression that they come to Japan because they are poor and want to earn money. We all agreed on the idea that bias causes discrimination. We also had a discussion on citizenship. One student asked me about how I feel about unconditionally giving citizenships to those who are born in that country. I said that I support it since it is unfair for one to not earn a citizenship just because of his or her parent's nationality. However, although I spent a whole year writing a report on immigration, I had never thought about citizenships, so I did not know much about its drawbacks. I asked him if France has any issues with it, and he told me that there is controversy about those who come to France just to give birth to their children so that they can earn a French citizenship and benefit from it. Because this is a topic closely related to immigration, I should have done research about this and mentioned it in my report. This is something I was lacking from the point where I started planning my report.

Discussing these topics with the students from the Paris University gave me a deeper insight into immigration. I was surprised with some of the facts that the students told me, since it was

different from what I had read in books and websites. I was struck by how limited and single-sided secondary information could be, and realized the importance of interacting with people in real life.

Through the discussions at the Utrecht University and the Paris University, I felt that immigration is a topic that is closely related to the students in Europe, while it is a quite distant topic for Japanese students. Each student in these two universities had their own opinions about immigration, but many students in Japan do not. I was not able to realize this when I was writing my report, but after the discussion, I noticed that ignorance might be the key issue in Japan. It is impossible to solve an issue when people are not interested in it at all. I feel that Japanese people should become closer with immigration, foreign cultures, and diversity. I am glad that I participated in the discussions since it helped me earn new perspectives and realize what Japan truly needs to improve on. It's not just the systems, laws, or policies: we need to change.



At the Utrecht University



At the Paris University

Chapter 3

OUR VISITS

旅 程 表

	地名	現地時間	スケジュール
1月23日(木)	アムステルダム	15:30	アムステルダムへ!
1月24日(金)	ユトレヒト	9:30	ユトレヒト大学での討論会
1月25日(土)		終日	アムステルダム市内外視察
1月26日(日)	ブリュッセル	9:40 14:30	ブリュッセルへ! 欧州議会博物館視察
1月27日(月)	ルーヴァン	終日	Leuven KU・Leuven市内視察
1月28日(火)	ブリュッセル	10:00 18:13	欧州トヨタ訪問 パリへ!
1月29日(水)	パリ	10:00	みずほ銀行パリ支店訪問
1月30日(木)		13:15	パリ大学での交流授業
1月31日(金)		15:00 19:00	Moët & Chandon社訪問 如水会パリ支部との交流会
2月 1日(土)		16:05	東京へ!
2月 2日(日)	東京(羽田)着	12:05	帰国

The Netherlands

The Netherlands is a constitutional monarchy nation located in Western Europe, with its capital in Amsterdam. The area is 41,864 square kilometers and the population is about 17 million. The ethnic group is mostly Germanic, and the official language is Dutch.

Next, we look at the Netherlands from an economic perspective. The Dutch economy grew at a flat rate in 1993, despite the general economic downturn in European countries. Since 1994, it showed a better-than-expected recovery, largely due to the strong growth in exports. Grew 2.4%. Despite slowing export growth due to the recent rise in the guilder, export growth has continued to be stable, with the GDP growth in 2018 at 2.5% and unemployment rate at 3.84%. The Netherlands has long adopted a policy of actively attracting foreign companies, revitalizing the domestic economy and creating employment. This policy is based on excellent logistics infrastructure, high language skills of the people, and the government's investment promotion measures (35% rule on income tax). Many companies have been established mainly in the EU member states and the United States. In recent years, Japanese companies have also invested in the Netherlands as a foothold in Europe.

Finally, I will explain the relationship between the Netherlands and the EU. As one of the founding members of the EU, the Netherlands played a key role in signing the Maastricht Treaty, and the Amsterdam Treaty signed during the presidency contributed to simplifying the decision-making process and strengthening security policy. With the UK leaving the EU, many companies are considering moving to the Netherlands, and more than 100 companies have already opted to move to the Netherlands.



Krokiet



Krokiet's vending machines

In the Netherlands, the use of soft drugs such as cannabis and marijuana is allowed. The “coffee shop” is a place where you can smoke cannabis, and you've seen the signs all over the town. In the

Netherlands, croquettes called “kroket” can be bought at vending machines. It was crispy and very delicious.

コラム

道路が立っている!?

オランダと言えば、風車。風車を見るために出かけたら、日本ではあまり見られない光景が。私が橋を渡ろうとしたら、道路が垂直になってしまったのです。この珍な光景に思わずパシャリと一枚!しばらくすると、左側から船がやってきて橋を通り抜けていきました。その後は無事に橋が元通りになり、渡ることができました。



低地が多く、運河や水路が多いオランダでは、水上交通も盛んで生活に欠かせないのを肌で感じました。ちなみに、私が訪れた風車村はザーンセ・スカンスという場所。アムステルダム中央駅から電車で約25分乗り、最寄りの駅から歩いて15分で着くアムステルダム市内から一番近い風車村です。ヨーロッパ人だけでなく、日本人や中国人などアジア人にも人気の観光地。ぜひ、あなたもアムステルダムに来たときは訪れてみてください。運が良ければ、そり立った道路が見ることができるかも???

(仲吉 大輔)

Amsterdam

Amsterdam is the largest city in the Netherlands, with a population of about 830,000. In the 13th century, a dam was created at the estuary of the Amstel River and a town was built. In the 16th century it developed as a port city for shipping trade. The main industries in Amsterdam are commerce and tourism. There are plenty of tourism resources such as Anne Frank House, Rijksmuseum, Van Gogh Museum, and Rembrandt House in Amsterdam.

In Amsterdam, I visited the flower market and Anne Frank's house.

It was January when we visited, the shops sold many toy tulips made of wood, but I was impressed when I found the real tulips. In Japan, the price was generally 250 yen per piece, but 30 pieces cost 8 € (about 1000 yen).

Anne Frank's House was preserved much more realistically than I had imagined, and you could clearly see that Anne lived there 80 years ago. When I opened the secret door hidden by the bookshelf, it opened up a space that was narrow but no different from an ordinary house. The diary written by Anne, who wanted to be a journalist, was about persecution and World War II, and spoke with a high descriptive power that I could not imagine having at the age of 15. My heart was in such pain.



At the flower market

Yukiha Oka

コラム

自転車大国オランダ

オランダでの市民の足は間違いなく自転車です。逆に歩行者は少なく、自転車の人の方が多いです。BBCの記事によれば人口よりも自転車の方が多そうです。また、交通手段の中で自転車占める割合も日本の13%に対してオランダは27%と世界の中でトップの割合になっています。道路事情については、ごく一部の中心街を除けば自転車レーンが必ずといっていいほど整備されています。また、この自転車レーンの幅も日本で時々見かける自転車レーンの幅よりもかなり広く作られています。大学通りには自転車レーンが整備されていますが、幅が狭く追い越しをすることはかなり難しいです。また、歩行者がいることさえあります。

一方でオランダの自転車道は余裕で追い越しをすることができ、歩行者が間違っても自転車道に入ろうものならすぐにベルを鳴らされます。写真の様に夕方の帰宅時間になると大量の自転車が自転車道を使って帰宅していきます。また、これは現地に行くと気が付いたことですが、オランダの自転車のサドルはかなり高くセッティングされています。もともとオランダ人はかなり背が高いですが、それ



でもサドルに乗ったままでは足がつかないほど高くなっています。このようなセッティングは日本ではロードバイクの様なスポーツバイクで行われません。そしてペダルを踏む足の位置も日本だと多くの人が土踏まずで踏みますが、オランダ人は親指の付け根の母趾球で踏んでいます。実はこの踏み方は正しいこぎ方でもっとも効率的に速くこぐことができます。高いサドルと正しいこぎ方がオランダ人の快適な自転車での移動を実現しているようです。

(西川 俊吾)

Friday 24th January at 9:30

Utrecht University

Utrecht University is one of the oldest universities in the heart of the Netherlands and was established on 26th March 1636. Around 30,000 students are enrolled in total, and there have been 12 Nobel prize winners and 13 Spinoza Prize laureates (awarded by the Netherlands Organisation for Scientific Research) highlighting Utrecht University's recognition as a prestigious institution. The university has ranked as the best university in the Netherlands for over ten consecutive years on the Shanghai University Ranking. The university's motto is 'Sol Iustitiae Illustra Nos' (May the Sun of Righteousness Enlighten Us), retrieved from a Latin Bible, and its symbol is the sun.



Universiteit Utrecht

University logo

The University consists of seven faculties – Law, Economics and Governance, Humanities, Geosciences, Medicine, Science, Social and Behavioural sciences, and Veterinary Medicine. The faculty of Law, Economics and Governance and the faculty of Humanities are located in the centre of Utrecht, and the other five faculties are in the Utrecht Science Park de Uithof which is situated in the east of the city. 12 undergraduate programmes are offered and there are over 90 graduate programmes overall.

The historic city's theme is 'Healthy Urban Living,' and Utrecht strives to meet its goals in terms of sustainability, global issues, and climate change. Utrecht has been nominated as the most competitive area in Europe, making the city an extremely suitable place to study in. Not only does

the Netherlands provide a good quality life and education, but the country also guarantees a work visa for one year after graduation making the country and university a popular destination for international students. At the university, all of the courses are taught in English, and the student community is diverse, with students from nearly 120 nationalities.



*The University Hall of Utrecht University
in Dom Square*



University library

At the university, we gave our presentations to students that study ‘Entrepreneurial Ecosystems.’ ‘Entrepreneurial Ecosystems’ refers to the effect of urban and regional contexts on entrepreneurship. After giving presentations, we had Q&A sessions and we each answered around 5 questions from the students and professors of Utrecht University. As all of us conducted presentations about the EU and many of the students were from countries in the EU, we were able to hear about what actual EU citizens really think of the policies that we mentioned in our presentation, which was interesting. During lunchtime, we were able to talk to students that study at Utrecht and asked questions about university life there, and we compared it to Hitotsubashi. Other than sandwiches, some of us tried buttermilk for lunch, which is milk with a sour taste created by probiotic bacteria.

We were given a guided tour around **UtrechtInc**, which was in the building that we gave presentations at. UtrechtInc is an incubator for start-up businesses. It supports between 25 to 35 start-up companies for around two years, usually consisting of 8 to 10 members per team. In the past, UtrechtInc has helped 192 start-ups. There is a co-working space in the building, where new businesses take their first steps by



Presenting at Utrecht University

renting a small area. By spending time with other start-ups by going to lunch and having tea together, new businesses form useful networks. For start-up companies, the survival rate is usually 33%, however at UtrechtInc it is 66%, highlighting how successful UtrechtInc is as an incubator. Moreover, in 2018, UtrechtInc was recognised as one of the top 10 global university business incubators by UBI Global. The shortest program for new companies lasts for 3 months, and the longest program takes 10 months to complete. During this period, entrepreneurs go through a large number of coaching sessions. The role of UtrechtInc is to turn the idea, which is described as a seed, into a successful company by providing these coaching sessions and a positive environment for the seed to grow. The incubator also connects the entrepreneurs and scientists to people with the right skills in order to become successful. To participate in the program, there is a selection, and around 40% to 50% of the applicants are taken. Although the idea itself is undoubtedly important, forming a successful team and maintaining the motivation even during difficult times is key to succeeding as a business. I was unfamiliar with the concept of business incubators, therefore being able to learn what they are and actually seeing entrepreneurs work in the environment was an invaluable experience.



Founding partners of UtrechtInc and its logo

Erika Okada

コラム

アムステルダムの傾いた家

アムステルダムの運河沿いはメルヘンチックな家々が軒を連ねることで有名ですが、それらの中には傾いている家が多くみられます。なぜでしょう？

一つは地形的な要因。アムステルダムは地盤が緩いため、建物の高さと同じくらいの深さの杭を基礎として打ち込んで建築していたそうです。ただその杭は昔ながらの木製。空気に触れたりすると簡単に腐食して脆くなり、当初まっすぐ建っていた家もそのうち傾いてしまったそうです。現在では建て替え工事の際コンクリート製の杭に取り換えているため、傾いた家は大部分少なくなりましたが、それでも簡単に見つけることができます。

もう一つは人為的な理由。以前アムステルダムでは間口の広さによって課税されるシステムが採られており、鰻の寝床のような住宅が好んでつくられていました（京都の町屋と同じですね）。商人などの富豪は扉の位置を工夫することで家を広く見せていたくらいですから、よほど税金が高かったの

かもしれません。そのため、正面玄関が狭く引っ越しの時は家具の出し入れに不向き。代わりに屋上からロープを吊るし、それを利用して運河から窓を通じて家具などを搬入する方法が採られたようで、その際家の凹凸に家具がぶつからないよう、家を多少傾けたと言われています。その名残なのか、アムステルダム法律には危険防止のため住宅の傾き制限に関する条項が存在するみたいです。

毎日傾いた家に住んだら平衡感覚が狂う気がするのですが、居住者の方々は大丈夫なのでしょうが…

(三須春輝)



Friday, 24th January at 16:00

Utrecht

Utrecht, a city located in the central Netherlands, is the fourth largest city in the Netherlands. Because of its central position, it is an important transport hub for both rail and road transport. Many cities in the Netherlands have a canal system like a net. Utrecht also has a canal system in its urban area. Many houses and shops in Utrecht are built along the canals.

In ancient times, Utrecht was also one of the most important cities in the Netherlands. Many historical events happened in Utrecht down the ages. Utrecht's first important event was when it became a bishop's see in 696. After that, Utrecht has been a base to propagate Christianity around the Northern Netherlands.

Until Amsterdam grew rapidly in the 15th century, Utrecht gradually became the most powerful and important town in the Northern Netherlands. In 15th and 16th centuries, the Netherlands was gradually ruled by Haus Habsburg.

In 1579, the seven northern provinces of the Netherlands signed The Union of Utrecht in order to be against Spain. Finally, in 1648 the Netherlands gained the independence by concluding the Peace of Westphalia. From the middle Ages, Utrecht is the location for Dutch people to create their identity.

The main event of our inspection in Utrecht was the guided tour at the Dom Tower. We previously got a reservation of the tour online in Japan. We walked around the central part of

Utrecht for almost thirty minutes before we took part in the guided tour. While walking along the beautiful canal, I noticed several things. First of all, I understood people's life in Utrecht because the number of tourists was not so much, unlike other cities in Europe. On the other hand, there are too many tourists in some big cities of Europe. This large number of tourists often causes a social problem, overtourism.



The canal in Utrecht

However, in Utrecht there are not too many tourists because Utrecht is located far from Amsterdam, forty minutes by train. Thanks to it, almost all people around us enjoyed their usual lives and I understood that Utrecht was a bicycle-friendly city. It is the fact that almost all cities in the Netherlands were also bicycle-friendly, but I thought Utrecht was even more friendly in terms of the number of bicycle parking lots. Along the canal, lined parking lots continued to over there. People were always able to park near shops. I'm also a bicycle lover, thus I hope that people in Japan can easily park their bicycles for free. I envied Utrecht's situation a little.

Dom Tower

Because of its long history, Utrecht has many historic monuments, but thanks to its location and its height, the Dom Tower is the city's pride. The Dom Tower is located in the center of Utrecht city and is the highest building in Utrecht. For these two reasons, we can view all Utrecht city from the top of this tower. However, it's not correct because Utrecht is often covered with thick fog. When we went to the Dom Tower, we could not see very far at all. To make matters worse, the Dom Tower was under repair. This picture is the Dom Tower when we went there. I asked a guide a question when the repairs would be finished. I hope I see it someday. The outside was unfortunately covered with irons, but we can watch the inside and walked up to the top of this tower following the guided tour. The guide showed us the rooms inside of the tower and we started walking up the stairs...



Dom Tower under restoration

The Dom Tower has 465 steps inside. We had to

go up all of them. Moreover, after we finished going up, we also had to go down. It made us so tired. I hope that when I visit the Dom Tower someday in future, an elevator will have been set in the tower.

In the guided tour, the guide explained that the Dom Tower had survived violent storms, fires and occupations by foreign powers. Its history and height made me understand that people in Utrecht had a strong spirit. I respected their minds and the Dom Tower.



Hop en stork

After we visited this tower, we started to walk towards the Utrecht central station in order to go back to Amsterdam. We had several places to drop by on our way. The most memorable stop was a chocolate shop. This shop's name was "Hop en stork". I found this shop on the Internet as one of the best chocolate shops in the Netherlands. Its chocolates were as delicious as chocolates in Belgium. We drank hot chocolates at this shop. I felt that it relieved mental fatigue due to walking up the Dom Tower.

Ryo Takizawa

コラム

ベーグルに寄り添うきゅうり

私はパンが大好き、特にパンの中でもベーグルが大好きなので、ヨーロッパのベーグルを視察してやるという意気込みのもと、アムステルダムで「BAGELS&BEANS」というベーグル専門店を訪れました。店内は至る所にベーグルをモチーフにした装飾がほどこされており、ベーグルへのリスペクトがひしひしと感じられました。特に感動したのはトイレの男女別を表すピクトグラムがベーグルで構成されていた点です。

日本ではベーグルサンドはニューヨーク式やモントリオール式などアメリカやカナダなど北米スタイルを踏襲したものが多く、生地に具材を練り込んで作る日本式のベーグルも人気です。オランダのベーグルサンドはどんな発展を遂げているのでしょうか？わくわく。

生地自体はニューヨーク式のスタンダードなもの、スプレッド（ベーグルに挟むもの）もスタンダードに揃えられており、たくさんの組み合わせの中からカスタマイズできます。メニューの1つに虫を挟んだベーグルサンドがあったこと以外はスタンダードでした。可愛らしいお店に似合わない突然のパンチカ…。

私はシナモンレーズンのベーグルにはちみつのスプレッドを注文しました。店員さんが運んできて

くれたベーグルは、自分で好きなだけスプレッドを挟めるスタイル。わーい!

ふと、お皿を見渡すと添え物の立ち位置で、ベーグルの横に輪切りのきゅうりが置かれています。私が頼んだのは甘いベーグル。まさか挟むわけじゃないよね…? フレーバーのチョイスに関係なく、6人全員のお皿にきゅうりがそれぞれ2枚ずつ添えられていました。

オランダではベーグルにきゅうりはマストなのか? 口内の水分を奪われることへの配慮なのか? オランダ人はきゅうりが好きなのか? きゅうりの匂って夏だよな??

沢山の仮説と疑問が浮かび上がりましたが、もさもさするベーグルの合間にきゅうりを挟むと程よく水分が補給される気がしてきました。

あのきゅうりの存在意義とは何だったのか、真相は謎のままです。



「アムステルダムของベーグルカフェにて」

(岡幸葉)

Sunday, 26th January at 8:30

On our way

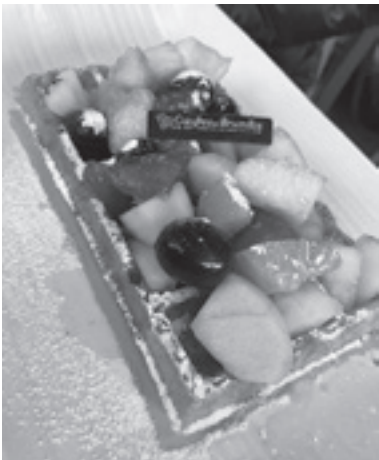
On day 4, we left from Amsterdam for Leuven via Brussels. From Amsterdam to Brussels, we used Thalys. Thalys is a high-speed international train between Paris and Brussels. It took about 2 hours from Amsterdam to Brussels. After we went sightseeing in Brussels, we went to Leuven by bus.

Shungo Nishikawa

The kingdom of Belgium

The Kingdom of Belgium is a country in Western Europe and shares borders with Germany, the Netherlands, Luxembourg, and France. The population is about 11 million and Belgium covers an area of around 30,000 km². Traditionally, most people are Catholic, but these days, since the number of immigrants from the Middle East is rapidly increasing, the percentage of Muslims are also growing.

The national income per person is over 45 thousand dollars and but the economy depends on trade because of the small size. The main industries in the country are chemicals and machinery, but domestic demand is limited because of the size, so the economic situation tends to be unstable. In addition, the country has had some domestic problems related to the races or cultures for many years. In the northern part, people speak French but in the south, people speak Flemish, which is a kind of Dutch. Additionally, some Germans live there. For many years, these people had been hostile to each other but finally chose to live together in peace. Therefore, this linguistic division



Brussels Waffle

shows us the potential of diversity.

For foreign people, Belgium is famous for beer, chocolate or waffles. There is an especially wide variety of beers in the country. According to the district, the way of making them varies. Some of them add spices or herbs, and they sometimes drink glasses of hot beer in winter. Additionally, they seem to use beer in cooking dinner by boiling beef or fish.

Most kinds of meals in Belgium are similar to French food, and they have a lot of French fries with mayonnaise or cream.

Brussels

Brussels is known as the capital of Belgium. In fact, there are 3 areas in Belgium and each area has some cities. Brussels is one of these areas and 19 cities constitute the Brussels. So there are no governors in the areas and each city has their own political structures. The city of Belgium, which is one of the 19 cities in Brussels, is defined as the capital of Belgium by the Constitution. One unique point of this city is that the EU and NATO have their headquarters there. The reason why Brussels plays such an important role is Brussels is located at the boundary of Flemish part and French part. Therefore, for the citizens in the EU, Brussels is a symbol city of cooperation with



Grand Place

different kinds of people and they often call Brussels as “*the capital of the EU*”.

In addition, there is the World Heritage site at the central part of the city, which is Grand Place. Grand Place is famous for its many souvenir shops, unique museums, and historical buildings. There are also the palace, the art museum, and other world heritage sites in the city, but we couldn’t go these places since we had only three hours until the departure time.

Parlamentarium

When we visited Brussels in the program, we went to the *Parlamentarium*. This museum explains the EU parliament and the path toward corporation in Europe in the EU’s 24 official languages. In the museum, because the way of explaining is very visual, all exhibitions will be enjoyable for all ages.

Before entering the museum, we students met Monica, who is an embassy staff of the Czech Republic. She explained the history of the country from the W.W. II until her country entered the EU, and told us about many difficulties during the days of the Soviet Union and also told us about their struggle for the independence, the so-called *Prague Spring*. During her explanation, a student pointed out children in Europe could only share the same view of the history because teachers use only some textbooks which are affected by the governments’ positions.



Parlamentarium

In addition, she talked about the effects for the citizens in her country after entering the EU. Firstly, she suggested the people in the EU are seen to have European citizenships and they can visit or study in other countries in the Schengen area. Additionally, since the driver's license is common in the EU, they don't have to take admissions for traveling and they can move quickly. On the other hand, she also stated her country cannot use the euro due to the unstable economic situation. After her presentation, students gave the comment that some citizens argue the Czech Republic should exit the EU, and that this is a serious issue for the country. And another student told her the UK decided to exit from the EU and some countries think the situation have not become better than that in the era of the Soviet Union. Then, he also asked her whether the Soviet Union or the EU is better for the European citizens. She said it was impossible to compare these two unions because the fundamental beliefs are much different, but we would be able to think about today's problems for the EU. According to her opinion, democracy is not equal to total freedom, but rather to consensus under tolerance. So, if there are some cultural, linguistic, or historical differences in the community, it might be difficult for the EU to make quick decisions and as a result, struggles would happen. Her presentation had lasted for only thirty minutes, but we understood her thoughts on the future of her country so much that it was heartbreaking.

Haruki Misu

コラム

パンよりジャガイモ？



オランダのフライドポテト

日本をはじめとした多くのアジア諸国では、お米が主食として食べられています。では、ヨーロッパではどうなのでしょう。パンやパスタのイメージを持つ人が多いかもしれませんが、実際、パンはヨーロッパ、特にフランスなどで日常的に食べられています。この研修ではパン以上に目にすることの多かった食べ物があります。それはジャガイモです。

ジャガイモは、日本では主食というより具材という認識が強いです。しかしヨーロッパではどうやら違うようで、オランダ、ベルギー、フランスの3カ国のほぼすべてのレストランでジャガイモが登場していました。それも料理の付け合せ程度の量ではなく、日本でいうお茶碗一杯分の白米レベルで出てくるのです。オランダはヨーロッパ有数のジャガイモ消費国であるドイツと接しており、ベルギーはフレンチフライ発祥の地なので、この2カ国でジャガイモが主食として食べられていてもさほど不思議ではありません。ですがフランスは、



フランスのマッシュドポテト



ベルギーのハッシュドポテト

フランスパンやクロワッサンなどのパンで有名な国です。当然主食はパンで、ジャガイモをよく食べるイメージはあまりありません。そのため私はフランスでのジャガイモの登場頻度の高さに驚いてしまいましたが、実はフランスはオランダ以上のジャガイモ生産国なのです。栄養価が高く、美味しく、さらに安く手に入るという側面から、フランスでもジャガイモが食卓に並ぶ回数が多いそうです。

ジャガイモは、18世紀にヨーロッパの人々を大飢饉から救ったという歴史がありますが、どうやら今でもヨーロッパの食事において重要な役割を担っているようです。みなさんもヨーロッパを訪れた際には、ぜひ美味しい料理とともに、ほかほかのジャガイモを味わってみてください!

(金丸晴香)

Monday, 27th January at 10:00

Catholic University of Leuven (KU Leuven)

Catholic University of Leuven is located in Leuven. It is famous as KU Leuven. It was built in 1425 and is the oldest Catholic University which has ever existed in the world. It is also the oldest university in the Netherlands. It is named ‘Catholic University,’ but it was only the education base for the Christians who were against the Protestants. Nowadays, in terms of the education, it does not bear any religious meaning and its catholic image is reflected only in the architecture style or culture.

In Leuven, the Dutch language is mainly used, so in KU Leuven’ Dutch is predominantly used too, but also English as well. Many classes are offered in English here and there are many foreign students mainly from



The library in KU Leuven

around Europe studying here. After I visited KU Leuven for real, I was able to see the western architecture and the atmosphere of the war. Most buildings of KU Leuven were medieval European architecture and among them the library was very solemn and beautiful. That library was damaged by the German invasion in World War I and it was restored after WWI. The size of Leuven city center is very small and the buildings of KU Leuven is dotted, so we were able to walk around the city and KU Leuven campus. We realized the importance of walking around the city again. By using our feet, we can have the perspective of local people and learn the city and KU Leuven and - who knows? - we may soon even be able to be a little like the locals.

Irish college

Irish college is the collective name used for approximately 34 centers of education for Irish Catholic clergy and lay people opened on Europe in the 16th, 17th and 18th centuries. The Colleges were set up to educate Roman Catholics from Ireland in their own religion following the takeover of the country by the Protestant English state in the Tudor conquest of Ireland in the 16th century. Irish Catholics also left the country to pursue military careers in the Flight of Wild Geese. Irish colleges were important for the writing of Irish history and the preservation of Ireland's rich cultural traditions. Within the colleges, printing presses in the Irish language were established and a collection of the lives of Irish saints was produced. Irish colleges were also helpful for the Irish resistance during the Nine Years' War from 1594 to 1603 in Ireland and later exile on the European continent.

The first Irish Colleges were set up in the 1580s in Salamanca and Madrid in Spain. After that, many colleges were set up in Italy, France, Belgium and Portugal. Also, in Leuven, the colleges were built on 16 October 1802.



The entrance at Irish college

We stayed at Irish college for two nights in Leuven. I had never stayed at an Irish college before, so I was a little anxious because my image of Irish college was like a monastery before staying there. However, Irish college was very clean, comfortable and like a hotel. The size of the room was very big. Actually, most of the room was a maisonette type and one room accommodates four people. In the morning, we can eat breakfast just like in a hotel. By the way, Irish college is the accommodation facility for mainly international students in KU Leuven. As I wrote above, there are many international students in KU Leuven and we were able to interact with local students.

Daisuke Nakayoshi

Monday 27th January at 13:30

Leuven

Leuven, a city in Belgium, is located about 25 kilometers east of Brussels. In Belgium, Dutch and French are spoken. Leuven is in the Dutch-speaking part of the country. On the other hand, Louvain-la-Neuve is situated 30 km southeast of Brussels, in the French-speaking part. The population of Leuven is 100,244 and is the eighth largest city in Belgium. The area of Leuven is 56km², which is about twice as large as Tachikawa city. Leuven has been a university city of KU Leuven since 1425. The main industry of Leuven is beer. Leuven is the worldwide headquarters of Anheuser-Busch InBev. AB InBev is the largest beer company in the world. InBev's brewery and main offices dominate the entire north-eastern part of the town. Moreover, since Leuven is a university city, many venture-capital corporations have been founded here. Those companies use biotech, robotics, additive manufacturing and IT technologies researched in KU Leuven. In addition, some international companies, such as Huawei, Nitto Denko and JSR, have important and research-oriented branches in Leuven.

Town Hall

The Town Hall is one of the most historical architectural sites in Leuven. It is one of the best-known Gothic town halls. It was built between 1448 and 1469. In WWII, a bomb struck the building, but it did not explode.



Town Hall

Oude Markt

Oude markt is a square of bars and cafés. It is called the longest bar in Europe. We can enjoy Belgian beer in this square. However, we went there in the examination period. We could not see a lively market!

AB InBev

Anheuser-Busch InBev SA/NV is the largest beer company in the world. The company was expected to have a 28 percent market share of global volume beer sales in 2017. In 2015, InBev, which is a Belgian beer company in Leuven, acquired Anheuser-Busch, which is an American beer company and known as a producer of Budweiser, and AB InBev was founded. The main brands of AB InBev are Budweiser, Corona and Stella Artois. In Leuven, there is a Stella Artois brewery. This brewery was established by 1366.

Beer tour

Most breweries were closed on Monday. We tasted 5 beers in the guided tour by KU Leuven. The first beer was made from champagne yeast. It was very sour. The second one was developed by research in KU Leuven. As a result of the long-term research, it is the best beer. The third one was black beer. It tasted like caramel. While we drank this, we tried an old game for drinking. The game was that people throw two stones to the wall which had slits and each slit showed points. We competed for the point. The fourth one was very old-style beer. It was made in about 10C. It was very sour. The last one was whiskey beer. When we drank it, we felt the smell of whiskey smoke. However, it was 12% alcohol. We must make sure not to drink too much.



1



2



3



Game



4



5

Shungo Nishikawa

コラム

ベルギーの修道院ビールについて

ベルギーの名物といえば何を思い浮かべますか？チョコレートやワッフルはもちろん有名ですが、ベルギービールも忘れてはいけません。中でもトラピストビールと呼ばれる、トラピスト会の修道院で造られるビールはベルギーで特に有名であり、度数が高く濃厚であるという特徴を持ちます。度数が5%程度で、飲みやすさを売りとする日本のビールとは、味も飲み方も驚くほど違います。

右の写真はシメイブルーという、ベルギーのエノー州シメイにある、スクールモン修道院で造られるトラピストビールで、ベルギーのトラピストビールとしては特に有名な一本です。実際に飲んでみましたが、芳醇な苦味と柑橘のようなフルーティーな香りのコントラストが非常に美しいビールでした。日本ではビールはガガガバ飲むイメージですが、このビールはどちらかというとワインの飲み方に近いような、味わって香りを口の奥で楽しむものでした。また、ベルギービールの特徴として、ビールメーカーがほとんどすべての銘柄に、専用のグラスを製造していることが挙げられます。シメイビール専用のグラスはワイングラスのような形状をしており、飲み口が広いので、飲むときに鼻からも香りを楽しむようになっています。

最初、修道院がお酒を造ることを不思議に感じたのですが、考えてみれば、ワインの発展も教会の歴史とともにありました。例えば、ボルドーやブルゴーニュといったワインの名産地でもブドウ畑や醸造所は教会の持ち物である場合が歴史的に非常に多いです。研修後に調べてみたので



すが、ビールの場合も同様に、中世における知的特権階級であった修道士が研究を重ねていたことが分かりました。なんと、ビールにホップを使いはじめたのも彼ら修道士であり、今日のビールの発展は中世の修道院を抜きにしては語れないのです。

ベルギービールは生ビールでなくても楽しめるものも多いので、日本でも楽しむことができます。ぜひみなさんもベルギービールの奥深さに触れてみてほしいです。

(瀧澤亮)

Tuesday, 28th January 10:00-14:30

TOYOTA Motor Europe (TME)

In the 1960s, TOYOTA started exporting its products to Europe, which is the place where a lot of car manufacturers competed. TOYOTA's fuel-efficient and high-quality vehicles got more and more popular in this market where small ones prevailed. At first, it sold well in Northern Europe because it did not have regulations against imports. Since the 1990s, it has shifted to local production. In the 2000s, Toyota expanded business in Russia and Eastern Europe and established a solid foothold for expanding its European business. In 2010, cumulative European sales reached 20 million units.

In 2005, Toyota Motor Europe NV/SA (TME) was built in Brussels, Belgium to organize its European business. TME reported that the number of automobiles sold increased for these four years in a row. YARIS, which is the equivalent of Vitz in Japan is the most popular model in Europe. However, TME has difficulty in how to react to Brexit. Even though most of the other automobile companies decreased their production in the UK, TME, on the contrary, increased its production because it wanted to increase the production of Corolla, which is a hybrid car.

We visited the headquarters of TME in Brussels, in Belgium. There are employees from more than 50 countries, mainly from Europe. A general manager of management, Mr. Ueda gave us presentations on Europe as a whole. He graduated from Hitotsubashi University in 2020. Actually, the Vice CEO of TME also graduated from our college. These facts show how important roles the alumni of Hitotsubashi play in worldwide companies.



@ Toyota Europe

I heard two interesting stories. First, TME has great diversity in the office, which made me wonder how well that diversity works so I asked a question on the impacts of diversity. He told me that it works very well and it's quite interesting to see how different people are depending on which country in Europe they are from. For example, German tend to push their opinion and they are very careful about everything. People from Northern Europe are more open to any opinion while people from Southern Europe are always optimistic. He said everyone is so proud of their own country although Japanese people often generalize Europe as a whole. Another interesting thing we heard is that how long people work each day depends on which country they are from even in a company. There is a clear difference between Japanese and Europeans. For example, Europeans cherish time with their family so they go home early. On the other hand, Japanese are more likely to stay two hours longer than them maybe because Japanese are used to working for long hours. That's why it's not easy to hold "nomikai". However, they understand each other through daily communication. This story makes it sound like men's working in Japan is much harder than in Europe, which isn't true according to another Japanese employee. She mentioned that European men do the chores and take care of their children a lot more than Japanese men. Therefore, the idea that European men are lazy is not true.

In conclusion, we learned what it is like to work in a global company. It has much less context than in Japan, which means that it is very important to make themselves understood through conversation. Otherwise, that's where misunderstanding and troubles come in.



Rise Komura

Wednesday, 28th January at 19:45

France

France is a country located in Western Europe. The population is about 67 million (Japan: 120 million). The area is about 544,000 km² (Japan: 344,000 km²) and 70% of that area are plains. The capital city is Paris. As you know, the spoken language is mainly French, and the currency is the Euro. In terms of the religion, it is said that many French people believe in Christianity. Catholicism is most prevalent. French people regard three concepts important: Liberty, Equality and Fraternity. These concepts are derived from the French Revolution.

Concerning the industry, the scale of the agriculture in France is the largest in Europe. Chemistry and machinery also play big parts. In addition, high-tech industries like the aerospace and nuclear industries are well developed too.

Paris

Paris is a city located in the Northern part of France. The area is 105.4 square kilometers. There are 20 political jurisdictions and Seine river flows through the city. Paris is the capital city of France and, the biggest city in France.

Moreover, this city is the center of the politics, economy and culture in France. Concerning the economy, Paris is valued as one of the biggest economic cities in the world. There are a lot of headquarters of multinational enterprises. In terms of the culture, there are famous art museums (e.g.

Louvre Museum), and Paris is also known as the leading center of the fashion.

Thanks to these features, there are a lot of people coming for the purpose of sightseeing. In fact, the number of foreign tourists there is the largest among all cities in the world.

We visited some famous sightseeing spots during our stay in Paris. So, let me introduce those places. As you know, the Eiffel Tower and Arc de Triomphe are two of the most famous sightseeing spots in Paris.

The Eiffel Tower was built in 1889, for the purpose of the world exposition. It is 324 meters high and was the highest building in the world at that time. When we visited, unfortunately, the highest observation deck was under renovation and we couldn't go up. However, the tower had a great impact as a symbol of Paris.

In 1806, Napoleon commanded to build Arc de Triomphe. The finish of building was after his death, 1836. The purpose of this arc is to pray for the soldiers who fought for France and died. Therefore, there are many plates to pray here. You can also climb up Arc de Triomphe. I actually climbed. From the top, I saw beautiful scenery. However, I have to say one thing. You should visit Paris in summer if possible. It is rare that it is sunny in winter...



Eiffel Tower



Arc de Triomphe

Taishi Ogawa

コラム

ヨーロッパ美術館巡り

「海外旅行先での美術館巡りが好き!」という人も多いのではないのでしょうか。私もそんな一人です。異国の地での、名作鑑賞。とっても贅沢な時間ですよね。そんなわけで、自由時間を使っていろいろな

美術館を回ってきました。

まずはフェルメール、レンブラント、ゴッホと名だたる画家を輩出しているオランダ!今回はファン・ゴッホ美術館とアムステルダム国立美術館を訪ねました。ファン・ゴッホ美術館は名前の通りゴッホの作品をたくさん展示している美術館です。自画像もたくさんあって作風の変化を感じたりできました。もちろん、有名な「ひまわり」を鑑賞することも出来ます。ゴッホが好きな人なら必見の美術館ですね。ゴッホ美術館からわずか徒歩10分ほどでアムステルダム国立美術館に到着です。遠くからでもわかる大きくて立派な建物。美術館って外観が良いとそれだけで期待が高まったりしますよね(笑)。こちらの美術館の最大の目玉はレンブラントの「夜景」です。ドーンと飾られていました。個人的ハイライトはフェルメールの「牛乳を注ぐ女」でしょうか。作品数の非常に少ないフェルメールですが、ここアムステルダム美術館では4作品を楽しめます。幸せですね。アムステルダム国立美術館は大きいので、時間がない場合は有名作品を集めた「名誉の間」だけを回るのもアリだと思いますよ。

残念ながらベルギーでは美術館タイムを取れなかったのでフランスへ。まずは誰もが知っているルーブル美術館!広い!広すぎる...!衝撃の広さでございました。正直申し上げますと、館内滞在時間の8割は地図を見ていました。作品を見に来たのですが...。館内にはレオナルド・ダ・ビンチの「モナ・リザ」を始め誰もが知っている作品も多く収蔵されています。もちろん素晴らしいのですが、滞在時間が約2時間しか取れず。大半は道に迷っていたこともあり、不完全燃焼な感じもしております。次こそはじっくりゆっくり回ってみたいです。最後にご紹介するのがオランジュリー美術館。モネの「睡蓮」を心ゆくまで楽しめる「睡蓮の間」が最高です。個人的にはモネがとても好きなので大満足でした。私が行った時は、オランジュリー美術館の館内では、フランス人をしのぎ日本人が最大勢力でした(笑)。それぐらい、日本人のモネ人気を感じられる場でもありますね。

オルセー美術館など、まだまだ見るべき美術館は他にもあるのですが、時間の都合上私の美術館巡りはここまでとなりました。ぜひ皆さんも足を運んでみてください。



(小川大志)

Thursday, 29th January at 10:00

Mizuho Bank

Mizuho Bank is one of the largest banks in Japan, and it is called a “Megabank” because of its scale. Mizuho Financial group was established in 1999, when Daiichi Kangyo Bank, Fuji Bank, and Industrial Bank of Japan had merged, and then Mizuho Bank was established. Its name of “Mizuho” means another name of Japan, “Mizuho no Kuni”. This word means the fertility of crops. The bank has at least one branch in each prefecture, this is an important characteristic of the bank. Other Megabanks don’t even have one branch per prefecture.

Then, let’s talk about the situation of Mizuho Bank in foreign countries. According to the official website of the bank, “Paris Branch has been established since 1982 and is licensed by Banque de France under bank code 18529. Paris Branch provides a comprehensive range of banking services such as corporate finance, structured finance, acquisition finance, trade finance, deposits, foreign exchange, remittances and cash management services.”

To be frank, I was not enthusiastic about going to Mizuho before visiting because I was not interested in finance and banks, actually. Therefore, I had not much motivation to go to Mizuho. When we arrived at Mizuho Bank, Mr.Goto, a president of Paris branch, welcomed us frankly. His attitude was very soft and polite to us.



@ Mizuho Bank



@ A group photo in front of the building of Mizuho Bank

He told us about his bank’s operations and gave us some rough information about France and Paris. As I listened to Mr.Goto, my attitude towards the bank gradually changed. Originally, my academic interests

are energy problems and environmental problems, so I thought I could not commit such problems at the bank, for I thought a bank was not much involved in environmental issues.

However, I realized what I thought was definitely wrong. He said we could be involved in such problems even in the field of finance. For example, his company tried to invest more money in eco-friendly companies. Though he was not successful in trying to spread that method in his field, he seemed to be confident about it. But thanks to that, I found that even in a bank I could be involved in my interests in university. I had little interest in banks and finance before I had heard Mr.Goto, but after that, my attitude to banks has changed positively.

Asahi Kurita

コラム

ヨーロッパのフルーツ

突然ですが皆さん!東南アジアに対してどのようなイメージを持っていますか?賑やかで混沌とした街、親切な人々、などなど様々あると思います。しかし、マンゴーやパイナップル、パパイヤといったいわゆる「南国フルーツ」も大きな魅力ではないでしょうか?それでは、ヨーロッパのフルーツについてはどうでしょうか?考えてみたこともない、という人が多いのではないのでしょうか?そこで今回は写真と共に今回の研修で出会ったフルーツを紹介していきたいと思います!



←アムステルダムのホテルの朝食のピュッフェより。ここでは(当たり前ですが)和梨がないので、梨といえば洋ナシのことを指します。ヨーロッパに来たのだということを実感させられる出来事でした。丸ごと置かれていて度肝を抜かれました。

→ブリュッセルのワッフル。「With fresh fruits」をオーダーしたら想像以上に盛りだくさんの果物が載っていてフォトジェニックでした。イチゴ、ブドウ、メロン、リンゴ、パイナップル、キウイなど。もはやワッフルの存在感が薄れています。





←パリのジェラート。20種類ほどの中からフレーバーを3種類選べ、店員さんが綺麗にバラの形に盛り付けてくれます。今回はマンゴー・ラズベリー・ヨーグルトをチョイスしました。ちなみにフルーツ系はこの2種類しかありませんでした、

→オランダからフランスまで、街のあちこちにこのようなオレンジジュースのメーカーが

ありました。ボトルを選んでセットし、レバーを引くとその場での上のカゴにあるオレンジを絞ってくれます。まさにフレッシュジュースです。価格は設置場所等によってかなり異なっている印象を受けました。



いかがでしたでしょうか？ヨーロッパに行ったら、ビュッフェの果物のラインナップに注目しつつ、街中ではオレンジジュースサーバーをぜひ探してみてください！

(遠藤万里)

コラム

ヨーロッパ点描～パリ市民のある行動について

というわけで僕の方からは、パリに行った時に僕が驚いたパリ市民の行動について、皆さんにお伝えしたい。まずパリと聞いて皆さんは何を思い浮かべるだろうか。綺麗な街並み、おしゃれなカフェに美味しいフレンチ、ルイ・ヴィトンに代表されるような高級ブティック、数々の名画が展覧されている美術館、等々。これは皆正しい、フランスは美食の国として名を馳せている通り料理はどれも美味しく、街を歩けば至る所でコーヒブレイクを楽しむパリ市民の姿を目にすることができる。(しかもこの寒い時期に彼らは外のテラス席で漫談している、我々日本人には想像できない話である。)世界一の美術館として音に聞くルーブル美術館は広すぎて1日かけても回り切ることは不可能である。

このようにパリは我々観光客を楽しませることに余念がないが、観光客としてパリを楽しむだけではもったいなかろう。僕はフランス人と日本人の行動様式の違いについて、少し分析してみることにした。もちろん数日滞在しただけなのでいささか情報量は少ないが、僕が最も驚いた違いは、フランス人は歩きスマホをほとんどしないということである。

僕は文字通り、町の通りや横断歩道などにおいて、ほとんどスマホを操作しながら歩いている人を見かけなかった。これはどういうことだろうか。我々日本人とフランス人の民度の違いが如実に現れているということだろうか。私は敗北感を感じかけた。

否。どうもそうではないらしい。もちろん現地の人に直接聞いたわけではないので確証は得られな

いが、要するにスリ対策なのではないだろうか。フランス、殊にパリではとてもスリが多いのである。僕も最初はそんなこと言たって気をつけていれば大丈夫だ、とタカを括って余裕で歩いてたわけだが、実際にスられかけてしまったのである。気付いたらリュックの小ポケットのチャックが開けられていたのである。僕と友人が振り向いて怪訝な眼差しを向けると、その男は怪しげな笑みと共に去っていったのである。幸いにも何も盗まれてはいなかったが。その時僕はパリの治安の悪さを体感してしまった。あるいは、治安的な理由で早く日本に帰りたいと一瞬思ってしまった。

閑話休題。その話は置いてくとして、歩きスマホの話である。本当に歩きスマホをしている人がすくなかった。これは路上だけの話ではなく、地下鉄や電車の車内においてもスマホを取り出してきている人はほとんどいなかったのである。やはりスられやすいからであろう。理由はおそらく、スリが多くて狙われたらひとたまりもないからであろうが、それにしてもそのような人が少ないのは我々も見習うべきではないだろうか。日本においては、皆当然のように歩きスマホをし、それでいてぶつかっても謝らないような無礼な人間も数多い。理由はともかくとして、我々日本人の歩きスマホ問題について考えさせられた瞬間であった。

(栗田旭)

Thursday, 30th January at 13:15

Paris University

Paris University, also known as Paris 7, is one of the seven prestigious universities of the Paris public higher education academy. The university was founded in 1971, but its history dates back to 1150 since it is one of the heirs of the University of Paris, which is said to be the second oldest university in Europe. Its name comes from a famous French philosopher called Denis Diderot. The university mainly teaches humanities and social sciences, science, and health, and there are numerous faculties varying from English, geography, history, odontology, linguistics, medicine, to hematology. There are also professors specialized in cultures and languages all over the world. Some students major in Japanese and learn about Japan in their four-year undergraduate curriculum. The university is especially famous for discovering primary results of the theory of probability at one of their research centers. Its library, the Central University Library, is the largest library in Paris and is full of resources from different genres. According to the university's website, there are currently 23,000 students studying humanities and social sciences, 27,000 studying health, and 12,250 studying sciences. 5,600 of them are exchange students, and there are many Japanese students and teachers as well.

At this university, we gave presentations to a group of sophomores majoring in Japanese and exchanged our opinions on each of our topics afterwards. There were around seventy students in total, and we each presented to groups of five to ten students. We gave our presentations twice in

English, but in the Q&A session, we used both English and Japanese. Although the students from the Paris University had only studied Japanese for over a year, they were able to speak Japanese very well. The students told me that they do not only study the Japanese language, but also learn about Japan's culture, history, and current affairs as well. I was extremely impressed with their Japanese, and was also excited by the fact that so many French students were willing to learn about Japan, a country that is miles away from France. I asked a few of them why they wanted to learn Japanese. They all said they love Japan and its culture. Surprisingly, a lot of them knew more about Japanese anime, comic books, and music than I do.



Paris University

After the Q&A session, we had time to talk over some snacks. We brought Japanese snacks like *Yokumoku* cookies, and students from the Paris University also had some French snacks ready for us. We talked about each of our cultures, food, hobbies, and our daily lives. Time flew and all of us wished we had more time to spend together. We followed each other on our social media accounts and promised to keep in touch. A few of them said that they are going to study in Japan this year, so I hope we can reunite with them and show them around Tokyo. Some of the



Discussing Our Presentations at the University

students from the Paris University were kind enough to come to the Grand Mosque of Paris with us after the event.

Exchanging ideas and communicating our thoughts with students from different backgrounds



At the Grand Mosque of Paris

was a precious experience. It helped me realize the importance of having a broad perspective and being open-minded. I would like to thank all of the teachers, staff members, and students from both Paris University and Hitotsubashi University who organized this event and made it so memorable. Thank you very much!

Haruka Kanamaru

Thursday, 30th January 17:25

Grand Mosque of Paris

Grand Mosque of Paris, known as The Paris Mosque or The Great Mosque of Paris, was built for Islamic soldiers who had been killed in WWI. It's located in the 5th arrondissement in Paris. This architecture is modeled on Alhambra in Spain and said to be the biggest mosque in France and the 3rd biggest in Europe. It was built in 1926 and the oldest mosque in Metropolitan France. During WWII, it protected a lot of Muslims from the Nazis.

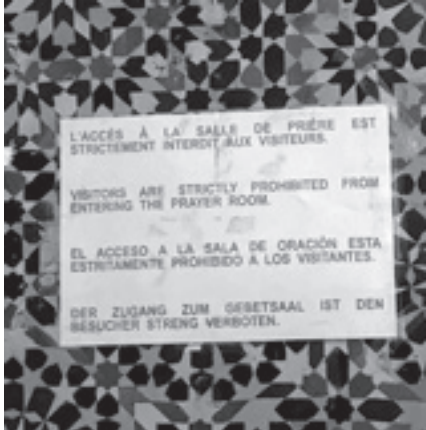
It's the center of Islamic culture in today's France and plays an important role in promoting the visible penetration of Muslims. However, sometimes it has become the target of multiple attacks by Islamophobic people.

It includes a traditional restaurant which serves the cuisine of the Maghrib, along with a tearoom.

After the exchange with Université de Paris, we visited Grand Mosque of Paris, along with some students from the university. It was my first time to visit a mosque and I didn't have any idea about it except some pictures of its outside. The inside of the mosque was decorated in geometrical colorful tiles, however they were not satisfactory to me. It may be because I compared them with luxurious Christian



Colorful tiles



Warning

churches or Buddhist temples with depictions or statues of God, but of course I felt their effort to make the mosque gorgeous under the principle of Islamic law which forbids the worship of icons.

In addition, to my surprise, visitors were strictly prohibited from entering the prayer room, which seems to be the appealing spot of sightseeing for visitors, and I realized its holiness. By catching a glimpse of the prayer room from the open door, I found Muslims prostrating and praying – all in one direction on the carpet.

Some students from Université Paris have their roots in North Africa, and their personal narrative added precious experience to my visit. One of the boy students had French nationality, but his Muslim mother was born in Morocco. His father is French and Christian. Under his parents, he grew up an atheist. His mother can't eat pork or drink alcohol but doesn't force her husband and son to obey the role. And actually, she doesn't worship five times a day. What he stressed was that all people should have freedom.

It was an invaluable experience to touch the reality of Islamic society, where are various ways or extent of religion.



Courtyard



Prayer room

Banri Endo

コラム

パリの名店で食べた美味しいスイーツ♡

パリはスイーツの聖地として有名です。実際にパリで食べ比べた中で美味しかったものをスイーツが大好きな私が紹介します。

① シャンゼリゼ通りのLadurée本店

どのガイドブックにも掲載されているLaduréeは1862年に創業したマカロン発祥のお店と云われ、シャンゼリゼ通りに位置するLadurée本店でお茶をすることは女子の憧れ!パリではマクドナルドやスーパーなどでも手軽に手に入るマカロンですがやはり別格です。そんなLaduréeではロゼのスパークリングワインとレモントルトをいただきました。レモントルトはレモンの酸味とメレンゲの甘さの相性が抜群でタルト生地もサクサクで美味しかったです。スパークリングワインはフルーティーでレモントルトとマッチしていました。帰国前に空港のLaduréeで購入したマカロンはベルサイユ宮殿をイメージした期間限定の可愛いピンクのボックスに入ったものをゲットしました。



② Carl Marletti

ミルフィーユはパイ生地が何層にも重なっていることから「1000枚の葉」という意味であることをご存知でしょうか?パリ在住の現役大学院生の方にオススメされ、ミルフィーユを求めてこちらのお店に行きました。日本でよく見る、中にイチゴが入っているミルフィーユとは異なり、ぎっしりとカスタードクリームがつまっていました。本場パリで食べるミルフィーユのクリーム濃厚さとパイ生地のサクサクさに感動しました。



③ Lemoine

カヌレの代表店として有名なLemoine。日本人スタッフの方もいらっしやいました。表面をカリカリ、中はモチっとした食感にするためには長時間生地を寝かす必要性があり、温度管理が非常に難しいとお伺いしました。他にもエッグタルトが絶品でした。パリでエッグタルトとカヌレの食べ歩きはいかがでしょうか？



(岡田絵里佳)

Friday, 31th January at 15:00

Moët et Chandon (LVMH)

Moët et Chandon is a famous French wine maker, established in 1743 by Claude Moët. They produce prominent fine wine, and they are one of the largest champagne producers and a prominent champagne house. Also, they belong to the luxury goods company LVMH Moët Hennessy Louis Vuitton SE, which is a big conglomerate in the fashion world.

Recently, in November 2019, LVMH acquired Tiffany & Co. for approximately US \$16.2 billion. The deal was expected to close by June 2020. As of 2018, Tiffany operated 321 stores worldwide, with net sales of US \$4.44 billion. Tiffany regions include the Americas, Asia-Pacific, Japan, Europe and the United Arab Emirates.

As I introduced above, Moët et Chandon is a famous producer of champagne in the world, but before we visited them, I knew only that information, so I could not imagine what they did in any specific light. When we arrived at Moët et Chandon, there was a woman. I was surprised at that thing a little bit because I thought that the person who would be telling us stories was probably going to be a man. Of course, it was just my prejudice, but it was impressive for me for that reason.

At that company, she told us about her career and operations of her company. She explained how luxury brands like LVMH survive today and what is the meaning of having luxury brands, despite us buying similar goods at a cheaper price. I understood



*From the building of Moët et Hennessy,
view of Paris*

the outline of her explanation, but I could not grasp well the meaning of existence of such luxury brands.

Her career was full of internationality and looked so brilliant for me (she worked at a famous consulting company, and then graduated from a French business school to acquire an MBA), so, at first, I found she was a super intelligent and successful person. Nevertheless, she seemed to worry about something. As I listened to her, the reason became gradually clear. As I expected, she had the experience of staying abroad before entering university and after that she entered Hitotsubashi University. So, she also had the double standard or view from Japan and her staying country. She told she was so worried that some people in Japan had said she was a little strange or had a clear opinion despite being a woman. This story gives us some meaningful lessons. We can learn that we have to pay attention to diversity even in Japan. Through this experience, I thought it was important to think about several differences.

Asahi Kurita

Friday, 31th January at 19:00

Dinner party with Josuikai

On the last night of our study trip, *Josuikai* invited us to a dinner party. There are many exchange students and graduates from Hitotsubashi currently working in Paris. We had a really wonderful time and talked about a lot of kinds of things, from living in Paris to the social problems in the world.

Taishi Ogawa

コラム

ピザを通してみえたフランス人

プログラム七日目の夜9時ごろ、パリのホテルに到着し、僕は小川君とホテルの近くのスーパーに夕飯を買いに行きました。僕らはそこで見つけたピザを無性に食べたくなったのですが、一つ問題が生じました。ピザはもちろん温めなければなりませんでしたが、スーパーにおいてある電子レンジはボタンが一つしかなく、フランス語でしか説明が書いてありませんでした。僕らが戸惑っていたところ、フランス人のおじさんが代わりにスイッチを押してくれました。彼は丁寧に説明してくれた(?)のですが、フランス語だったので、僕らは一切理解できませんでした。1分後、他の若い男性が寄ってきてくれて、今度は流暢な英語で「ピザの上のプラスチックはとるんだ。」と教えてくれました。再度チャレンジしていると、最初のおじさんはたびたび電子レンジがうまく機能しているか確認しに来てくれました。その後、温かいピザが完成し、ホテルの部屋まで運びました。袋も何もなかったので、

小川君と僕は大きなピザを一枚ずつ両手で持ち、夜のパリを歩きました。非常に滑稽な姿だったかと思いますが、他の参加者と美味しいピザを食べることができました。この一連の出来事の中でわかったことは二つあります。一つ目は、フランス人のやさしさです。東京であれば全く無視されてもしょうがなかった状況で、何人もの住民が助けようとしてくれました。二つ目は、おじいさんはひたすらフランス語を話していましたが、若いお兄さんはきれいな英語で説明してくれたことから、年代によって英語力やフランス語に対する誇りなどがちがうのかもしれないということです。そんなことを気づかせてくれたパリのピザでした。

(小村来世)



パリのホテルにてピザを持つ小川君

Chapter 4

Personal Reflections

ヨーロッパを視る切り口

遠藤 万里

今回の研修は、結果的に私にとって人生の大きな転換点になり得る、非常に貴重な機会となりました。現在私は人種問題や人の移動といった問題に関心を抱いており、今回のゼミにおいても春夏学期に履修した「国際社会学ⅠA」の内容から派生させて、自治体の多文化共生政策を扱いました。その調べを進めていく中で、単に講義科目の3000字程度のレポートを作成する際よりもはるかに多くの文献に当たりましたし、自分の知識や理解、興味関心も深まっていきました。字数が全てではないのは承知していますが、12000字のレポートを書くという経験を現段階で積めたのも大きいと感じています。

実際にヨーロッパに渡航してみて、この問題への関心はより一層高まりました。とりわけ、パリでの様々な体験が印象的でした。まずは、街中で現地の人から「コロナ、コロナ」と声をかけられたことです。研修の時期はまさに中国で発生したコロナウイルスが流行を拡大している時期であり、フランス人にとっては中国人に限らずともアジア人を見た時の第一印象が「コロナウイルス」だったのだと思います。フランスの人種差別問題、そして中国人も日本人も「アジア人」というカテゴリで一括りにされることに、深く考えさせられました。この時期ならではの貴重な体験だったとポジティブに受け止めています。

また、パリ大学の学生との交流の中で、肌の色や顔立ちが様々な人がいたため、留学生かなと思いつつこの国籍か聞いた際に、多くがフランス人だったということも印象的でした。もちろん冷静に考えれば至極当たり前で、そこに驚きを感じることも自体に自分の無知が表れてはいるのですが、人口のほとんどがいわゆる「黄色人種」である日本の特殊性を実感させられる出来事でした。その中でも、北アフリカにルーツを持つ人が数人いたのも印象的で、イスラム教の信仰のレベルにも様々な程度があるということ、また年代による意識のギャップの存在を知ることができたと共に、北アフリカとヨーロッパ大陸の地理的な近さも実感をもって感じられました。

さらに、エッフェル塔など観光地の周辺などで物売りをする人たちの多くがアフリカ系で、正に移民だと推測されたのもよく覚えています。昼間も夜間もずっと立って物売りをしていたようで、彼らの生活はどうなっているのか、非常に興味を抱きました。

この研修に参加した最大の動機は、一度ヨーロッパに行って、自身のヨーロッパに対する興味関心を深めるということでした。正直なところ、これまで自分に縁があったのは東南アジア諸国ばかりで、ヨーロッパにはどこか遠い存在で、特段憧れのようなものさえ抱いていませんでした。しかし今回3ヵ国を訪れてみて、自身の興味を惹くきっかけのようなものをたくさん集められた気がしています。自動車よりも歩行者よりも自転車の方が優先され、縦横無尽に高速で行きかうオランダ。永世中立国であるはずが2度の大戦でいずれも

ドイツに侵攻されたものの、今では欧州議会が置かれるなどその地理的な重要性は変わっていないベルギー。ガイドさん曰くフランス語で挨拶するとサービスが3倍良くなるという、自国の文化に強い誇りを持っているフランス。ゼミで触れられた他のEU諸国の話題も含めて、切り口が無限に見つかりました。

この研修のゼミは、「EUとは何か」というところから始まりました。今回、実際に3ヶ国で全て共通通貨ユーロが使えること、高速鉄道タリスがそこにボーダーがあるのを感じさせずに国境越えをすること、EU圏内で学生の移動がかなり活発に行われていることなど、EUというシステムがあるからこそ実現している事象を感じるが多々ありました。その中で私が感じたのは、先に触れた「アジア人」差別に対置して、「ヨーロッパ人」というカテゴリが存在しているのではないかということでした。貨幣が共通で、国境もなく、人の移動もモノの移動も自由というヨーロッパで、「〇〇人」という線引きを取ってする必要のあるのが疑問に感じられたのです。しかし実際には、メインとなる言語はバラバラですし、それぞれの社会での特質を感じる部分も多々ありました。そしてイギリスが脱退したという事実もあります。簡単には語れない問題だと感じました。

協定校の学生の皆さんと交流できたり、海外の大学の様子を知ることができたのも貴重な経験でした。とりわけ印象的だったのは、KUルーヴェンの院生の方に、「大学での学びを楽しんで」という言葉をかけられたことです。残りの学生生活を、彼の言葉を胸に刻み付けて送りたいと思います。

さらに、卒業生の先輩方の企業に伺えたのもありがたい機会でした。「日本に比べてヨーロッパでは家族との時間を大切にすることなど、海外と日本の働き方の違いを、やはり今まさに現地で働いていらっしゃる日本人の方から何うと、言葉の重みが違いました。まだ2年生ということもあり、進路についてそこまで考えてはいないのですが、海外というのも真剣に視野に入れたいと思いました。

海外に行った日本人がよく口にする言葉として、「いかに自分が自国のことをわかっていないのかを痛感した」があります。今回私も、日本留学を控えたパリ大学の学生さんから東京の有名な観光地を聞かれた際に、15年住んでいるのに浅草もスカイツリーも行ったことがなく、それらについて実感を持って語れないということを自覚して我ながら衝撃を受けました。自分の国のことを自らの言葉で語れるということ、それでいてコミュニケーション面でハンデを感じさせなかったり、その価値観に縛られないこと、それがグローバル・リーダーの要件なのではないかと思います。

最後になりますが、増田先生や犬飼さんをはじめ、この研修に際してお世話になった皆様に感謝申し上げます。濃密な11日間のために、私たち学生の想像する以上に様々な調整が裏で行われていたのだろうということが窺われ、とてもありがたいことだと感じています。

す。年度初めまで存在さえ知らず、たまたまHPで追加募集を見つけて、既に履修計画を完成させて登録までしていたのに、それを崩してまでして勢いで応募してしまったこの研修ですが、国際社会学という分野への自身の関心をより深める機会になったという意味でも、とても大きな出来事となりました。現時点で芽生えたヨーロッパへの興味関心や学習意欲を、このまま伸ばしてより精進していきたいと思います。むしろ研修後の今がスタート地点なのだと思います。ルーブルやオルセーなど、美術館もいくつか訪問したのですが、自身の教養のなさに愕然としました。学ぶことで人は精神的に豊かになれるのでしょうか。リベンジしたいです。

またそもそも数学の全くできない社会学部生でありながら、このような経済学部的一大プログラムに参加させていただけるということに、一橋の長所として挙げられる、「学部間の垣根の低さ」を改めて実感する機会となりました。

今回の研修参加メンバーのバックグラウンドも多種多様で、いろいろな話が聞けていい刺激を受けられました。また全く未知の国に行くというのが久々だったので、スリ対策から何から何まで、わからないことだらけで、皆さんに教えてもらうことばかりでした。本当にお世話になりました。楽しかったです。ありがとうございました。



綺麗に撮れていませんが、セーヌ川の夕景が印象的でした

初めてのヨーロッパ訪問を終えて

三須 春輝

この研修が私にとって初めてのヨーロッパ旅行であったこともあり、今まで知らなかったヨーロッパの一面が少しだけ理解できたような気がした。特に西欧は日本と同じ先進国の集合体であり私の中ではある種憧れの地域であった。その発展ぶりも日本と同じと考えていたが、そんなに簡単には比較できないのだと実感した。

市内観光の際、私はアムステルダムやパリで多くの美術館を巡り、世界的に有名な作品を多く鑑賞した。西洋美術の本場ということもありどれも日本で展示をすれば数時間待ちの長行列となる有名な絵画が当然のように陳列されているような美術館で、その所蔵作品数も膨大なものであった。その中でも、入館者に若者が多くみられたのは特に印象的だった。日本で美術館に行くほとんどが中高年以上で家族に連れられて来た子供がちらほら見受けら



パリ・オルセー美術館

れるだけなのに対し、私の訪れた美術館には必ず若者のグループが鑑賞しており、絵のスケッチをしたり、描かれた人々の表情を再現する姿も見られた。学芸員と思しき職員が子供に絵の詳細事項を教えていることもあった。芸術に対する人々の関心の高さは、日本とは比べ物にならないほど高かったのだ。

その反面、ヨーロッパの悪い面も多く発見できた。例えば、風景はその典型例のように思う。数百年前に作られた建物が現在も普通に利用されている写真を見て、その景観は素晴らしいと信じていた。確かに地震がなく、戦火で建築物が消失するケースが少なかったため、タイムスリップした気分させる街並みは当たり前のように存在していた。100年以上前に開通した公共交通機関に乗り、1880年代に完成した建物に宿泊した。しかしながら道路事情はどこも最悪であった。都心部の大通りであっても下水施設の整備不良や道路の凹凸のためか一度できた水たまりがなかなか消えず、粗大ごみは道端に公然と放置されていた。地下鉄やトラムは落書きだらけで汚く、異臭を放っていることもあった。私たちがみていたのは建物から上の世界で、決して美しいものではなかった。

人種差別も意外に公然と行われていた。パリ大学で日本語学科の学生と交流した際あからさまにアフリカ系学生を無視し続けたヨーロッパ系学生、研修時ちょうど中国を中心にコロナウイルスが流行していたからか、黄色人種を見つけては「コロナ」と声をかける者

などもいた。ヨーロッパは学問研究や民主主義の最前線を走っている地域であるため、他の人種に対する嫌悪感を公然と披露することはなどありえないとばかり思っていたが、欧州であってもいまだに社会の中にそんな雰囲気があるのだということを知ることができた。

また、この研修の目的の一つはグローバルリーダーとはなにかを考えることであったこともあり、そのことについて考えさせられることが何度かあった。私は当初、グローバルリーダーとは外国でも通用するコミュニケーション能力を持ち、相手の文化や風習、価値観の違いを受け入れることのできる人材のことであると考えていた。今考えてみても、この定義に間違いはないと思う。しかし、現地企業への訪問などを通じて、いくつかの思い違いをしていたことに気付かされた。企業見学で訪問した卒業生の方々は、私たちに業種説明だけではなく、これから社会で働く私たちに必要とされていることを教えてくださった。最も心に残ったのは、欧州トヨタの方々が仰っていた、「真のコミュニケーション能力を身につける」という言葉だ。仕事で必要となるコミュニケーション能力とは、言葉を流暢に話すことよりも、自分の意見や主張を的確に相手に伝えることだという内容だったが、英語の勉強をひたすら行うことのみがコミュニケーション能力の向上につながるとばかり思っていた私にとっては、大変ショッキングな言葉であった。また、訪問した卒業生の方々はいずれも海外の人々の生活習慣を受け入れてそれらと調和しながら仕事をする一方で、日本人であることに對して強い誇りを持っていたことに感銘を覚えた。グローバルリーダーという国籍の意識が薄い人々なのかと思っていたところがあったが、自らの国や文化に強い誇りを持たずして価値観の違う相手と対等に渡り合うことなどできないのかもしれないと思った。

今回の11日間という短期間でヨーロッパや世界で働く人々のことを深く知ることは無論できなかったが、それでも欧州の今の姿を垣間見るとともに、今の自分にとって日本がいかに住みやすい場所なのかを実感できたような気がした。現状ではヨーロッパに長期間滞在する予定はなく、将来ヨーロッパや世界とどのように関わっていくのか全くわからないが、海外で自らと異質な人々との関わり合いの中で生活することは並大抵のことではないのかもしれないと思った。

11日間を振り返って

岡 幸葉

今回、私は法学部の4年として、つまり他学部他学年として海外調査に参加させていただきました。就活中に履修登録を考えて悶々としていた時に、たまたま追加募集の案内を見かけ、応募したことが始まりです。アカデミックな目的で海外へ行ったことがなかったこと、卒業単位を取り終わり最後の一年間を取りたい授業に使いたいと思ったことが大きな理由でした。面接で「お姉さんの立ち位置で頼りになりそうですね」というニュアンスのことを犬飼さんにおっしゃっていただきめでたく参加することができましたが、お姉さんとしての役割を何も果たすことなく1年間を終えた気がします。年上として扱わず接してくれ、頼りになる、色濃いメンバーと仲良くなれてとても嬉しかったです。

研修では3つの会社に企業訪問させていただきました。中でも特に印象的だったのが、Moët & Chandon社の村上順子さんのお話です。ラグジュアリービジネスについて日本との比較やLVMHグループのビジネス例を交えながらお話してくださり、マーケティングやブランディングに関心のある私にとってとても興味深い時間でした。ラグジュアリービジネスという分野は日本ではあまりポピュラーではないですが、フランス企業の時価総額ランキングのトップ10のうち4社がラグジュアリービジネスというお話を伺い、ヨーロッパでの力の大きさを感じました。私は将来ホテル事業に携わりたいと考えているので、ラグジュアリービジネスについてもっと学んでみたいと思うきっかけになりました。

今回の研修で感じたことが大きく2つあります。

第一に、アイデンティティの拠り所について気が付かされたことです。私は両親が日本人で日本に生まれ日本で育ち日本で生活しています。日本の文化・習慣を当たり前とし、「あなたは何人か？」と聞かれば迷いなく日本人であると答えると思います。しかし、世界的に見ればこの環境はとても特異であることに気が付きました。研修中に会った学生の中には、両親の国籍が異なる生徒や国を転々としてきた生徒が当たり前になりました。〇〇人という言葉はそのくくりすら定義が困難で、時に差別的な意味を含めて使われることを考えると、ボーダーレスになっていく社会の中で使うタイミングをよく考えなければいけないのではないかと感じました。

第二に、現地のことを知るには訪れるのが一番だということです。日本では5G導入についてポジティブに扱われることが多く、人体に与える悪影響などネガティブな側面について取り上げるメディアや世論はほとんど見られません。ヨーロッパでは反対を求めるデモが発生していると聞いていましたが、アムステルダムで実際にそのデモを目で見ることができました。オランダは自転車道が完全整備されていると聞いていましたが、実際は想像よりもずっと自転車天国で何度もひかれそうになりました。ヨーロッパの人々は人種差別の歴史の中で生きてきたから人種で人を差別しないと思っていましたし、人権意識が高

くデモクラシーの精神が根付いていると世界史や法学の授業で学びましたが、誰もがそういった意識を持っているとは限らないということを知りました。できる限り一次情報を大切に情報や思い込みに対して向き合っていきたいと強く思いました。

最後に、私にとってグローバルリーダーとは何か、という問いについて考えてみようと思います。「相手のことを知ろうとし、コミュニケーションを取る努力ができる人」ではないかと思います。企業訪問させていただいた欧州トヨタの上田さんが、英語のできる人が必ずしもチームをまとめ上げ仕事ができるわけではないとおっしゃっていたように、必ずしも言語能力とグローバルリーダーの能力は比例しないと思います。また、訪問大学の生徒さんと積極的にコミュニケーションを取り質問をしている研修メンバーの姿や、パリ大学の日本語学科の生徒さんが日本語を選びながら一生懸命にコミュニケーションを取ろうとしてくれる様子を見て、そういう姿勢こそがなによりもお互いの理解にとって必要なのではないかと思いました。

今の私には英語力も積極的に相手とコミュニケーションをとる力も圧倒的に不足していると感じたので、どちらも向上させたいです。これまで私はグローバルに働くことに対してあまり意識したことがなかったのですが、この研修を通じて海外で仕事をすることに対しポジティブに考えられるようになりました。

最後になりましたが、1年間指導してくださった増田先生、この旅をコーディネートしてくださった事務局の皆様、研修中にお世話になったOBの方々、愉快的海外研修のメンバーに感謝して本報告を終わりたいと思います。1年間本当にありがとうございました！もしこれを読んでいる人の中に参加を迷っている人がいたら全力でおすすめしたいです。



ブリュッセルの欧州議会にて

自分を知ること

仲吉 大輔

研修を終えて今、私は東京の自宅でこの報告書を書き上げているが、この11日間、そしてそれまでに至る1年間の授業は私の将来の選択肢を広げるものとなったと確信している。応募時には想像もつかないあまりにも多くの学びを得ることができた。そこで、この研修と授業を通して得られた学びの一部をここに書き記したいと思う。

第一に、私のヨーロッパに対する価値観が変化したことである。私は今までヨーロッパを訪れたことがなく、ただ教科書で学んだもの、ニュースで目にする場所でしかなかった。研修前の私は、ヨーロッパは多くの国が存在しているが、だいたい東欧、西欧、南欧、北欧などと地域ごとに特色があり、その地域内では似たような特色があるという認識を持っていた。特に今回訪問したオランダとベルギーはベネルクス三国として良く括られており、私も2国間でそれほど差異はないのだろうと思っていた。

しかしながら、その認識は、アムステルダムを後にし、ベルギーのブリュッセル駅に着いた時、変わった。アムスとブリュッセルではこれほどにも人種に差があるのかと驚いた。アムステルダムでは白人が人口のほとんどを占めていたが、ブリュッセルでは白人のほかにも多くの黒人がいた。世界史でベルギーはコンゴなどアフリカ地域にも多くの植民地を持っていたことを思い出し、教科書で学んだ歴史を肌で感じることができ、とても嬉しかったのを覚えている。さらに、事前調査でオランダとベルギーは使用言語が違うこと（オランダは主にオランダ語、ベルギーは北部がオランダ語で、南部がフランス語、ブリュッセルは北部でありながらフランス語が広く使われる。）は学んでいたが、実際に訪れてみて、オランダ語とフランス語の違いに驚いた。ヨーロッパの言語は良く英語に近いと言われるが、オランダ語はとても英語に近く、フランス語は全く異なり、全然聞き取れなかった。

オランダとベルギーは地理的にはとても近い。ただ、近いながらも分離せざるを得なかった歴史、隣国たりうる理由を、実際に両国を訪れ、肌で感じることができてとても貴重な経験となった。

第二に、私の将来のキャリア形成についてわずかばかりだがビジョンが持てたことである。この11日間で最も有意義だったと感じたのは企業訪問である。私たちは、三人の先輩方の企業にお邪魔させていただいた。欧州トヨタ自動車、みずほ銀行パリ支店、モエ・エ・シャンドンの三つの企業を訪問したが、どれもそれぞれの魅力があり三者三様であった。

私は現在二年生であり、これからインターンなど就職活動が始まるだろう。ただ、私はどのようにインターンを始めればよいか、業界研究をどのようにすればよいかなどがわからなかった。しかし、今回の訪問で少しヒントを得ることができた。また、私は現時点で航

空業界や商社に興味を抱いているが、今回訪問させていただいたことで、メーカーや銀行など様々な業界を知ることができ、視野がとても広がった。

海外で働く日本人にお話を聞いたことで、将来海外で働きたいという欲はさらに増し、今の自分に何が足りないか、今後何を学ばよいかの指針になった。その中でも特に私が今回の企業訪問を経て、新たに興味を抱いたのは経営学の分野である。将来、海外で良い仕事に就くにはMBAが主流であり、また、私は仮に国内で就職したとしても経営戦略の分野もやりたいと考えているので、将来的にMBAの習得をしたいという欲が出てきた。経営を学びたいという新たな考えを得ることができた点でも今回の企業訪問はとても意義あるものにできた。

今回、私は初めてOBOG訪問という形で就職活動を少しではあるものの、始めることができた。いろいろなお話を聞いたことで、自分の興味や視野は確実に広がった。このような機会を用意してくださった大学、増田先生、そして私たちを受け入れてくださったOBOGの方々には本当に感謝したい。

第三に、このゼミを通して学問への探求心が非常に高まったことである。討論会報告でも書いたが、このゼミで一年間学べたことはとても大きな経験となった。私は、大学入学時、何となく経済はカッコいい、数学を使うから楽しそうというイメージを持っていた。それは大方あったが、このゼミでの調査が始まるまでそこまで経済学を勉強したい、極めたいという気持ちは湧いてこなかった。しかし、今回の調査を経て、自らの経済学の知識のなさ、主にミクロ経済学への知識不足を痛感した。それにより、ミクロ経済学、その中でも行動経済学やゲーム理論などを学んでみたいという気持ちが生じた。また、交通経済学に関して少しばかり調査できたことで、それに伴う公共政策などの分野にも興味を持てた。このゼミのおかげで、経済学へ少なからず興味や意欲が向上することができた。

このゼミの学びは経済学への意欲向上だけではない。論文を執筆する際の最低限のマナーや書き方を学ぶことができたのも非常に大きなことであった。一年生のころからレポートという課題は何度かこなす機会があった。ただ、コピペをするな、引用したら出典を書きなさい、などの指示があるものの、高校時代に習っていなかった私は、具体的にどうすればいいのかわからず、書き方の正解を知らなかった。しかし、増田先生のご指導を受け、レポートや論文の最低限のマナーや書き方を身に付けることができた。本当に増田先生には感謝してもしきれない。身に付けられたのはマナーや書き方だけではない。普通の授業とは異なる少し長めの論文を執筆させていただく機会をもらったことで、どのような構成で書くか、どのような内容の方が好ましいかなどに関してもしっかりと吟味することができた。

このゼミを選択して本当に良かった。自らの学問分野への意欲、スキルアップにつなげることができた。

以上が一年間を通して得られた学びの一部であるが、このゼミを履修する前、研修に出

発する前にはこんなにも成果を得ることができるとは考えもしなかった。最後になるが、この研修とゼミを提供してくださった一橋大学経済学部、私たちを丁寧にご指導してくださった増田先生、一年間共に過ごしたゼミのみんな、そしてこの研修に関わっていただいたすべての方々に感謝したい。

来年度以降もぜひこの研修が続いていることを強く願う。



欧州トヨタ自動車にて

宇宙産業とイノベーションの未来

西川 俊吾

短期海外調査でEUを選んだ理由は、私の興味のある宇宙分野がより進んでいるのがEUであったためだった。宇宙の分野について、欧州ではEUが成立する前から共同開発を進めていて、初期の石炭鉄鋼共同体やEURATOMなどとは別の枠組みであったものの欧州統合の一つの形であった。現在では、欧州宇宙機構とEUとの協力関係もできて欧州全体でロケットの部品の生産を行い、組み立てるプロセスが出来上がっている。ロケットや原子力などの初期投資額が大きい事業をヨーロッパで共同して行うことのメリットは確かに大きいですが、軍事にも転用できるこれらの技術を国際共同で行うことは非常に難しい。原子力については調べてみてはいないので詳しくはわからないが、宇宙分野については、最初は大国が利権を争って打ち上げに立て続けに失敗した。しかし、そこでくじけず欧州の統合という熱意を持って続けた人たちの努力により各国が合意できるシステムが整備された。これは、欧州統合についてもいえることで春夏学期のゼミでは欧州統合の成り立ちを学んだ。ゼミでの統合の成り立ちの学習があったからこそ、その一つとして宇宙分野についても調査して理解することができたと考えている。

また今回の研究を通じて、自分が興味を持っているものに取り組むことで、どのようにして社会の役に立つようなものを生み出せるのかを考えることができた。ロケットという一見すると趣味のようなテーマを選んだが、趣味だと思われるのはまだ、社会の中での役割が小さすぎるからでもっと大きな役割が果たせれば、他のテーマにも並び立つものになる。宇宙は手つかずのフィールドであるため、そこをもっと有効に活用すれば、日本経済の中で無視できない部分を占めるようになり、そのような状態にするために自分は活躍したいと考えている。宇宙分野で、日本は海外より遅れているが、他の分野に比べればまだまだ追いつける可能性がある。例えばITの分野でそれこそGAFAのような存在を今から上回ることは難しいが、宇宙の分野はまだ多くの企業がベンチャーであり、まだ追いつく可能性は十分に残っていると考えられる。増田先生には私の研究を「持続可能な社会に向けて」のテーマの中に位置づけていただいたが、衰退していく傾向の日本経済を立て直すには新しいフィールドに挑戦していく必要があるだろう。

また、今回の海外調査で印象に残ったことは、ユトレヒト大学にあるインキュベーターである。ユトレヒト大学では、大学内にスタートアップ企業用のインキュベーターがあり、そこで研究開発をして、大学の専門家から意見をきき、相談を受けながら事業化を目指していた。インキュベーターはそれぞれのブースと共同のダイニング等から構成されており、他の企業も見ながら仕事をすることができる。日本では他国と比べてベンチャー企業の数も少なくベンチャー企業への投資も少ないことが課題になっている。起業するにあたり、起業家はアイデアや研究して開発したものはあっても、それをどのように商品化し、事業

として軌道に乗せるかについては経験がないことも多い。そこでこのようなインキュベーターが必要になってくるわけだが、日本では大学内にあるインキュベーターは少ない。一部の地方の国公立大学や私立大学にはあるが、数は少ない。一方で、ユトレヒト大学にはインキュベーターがあり、90社近くのベンチャー企業が事業化し、インキュベーターから卒業していた。また、ベルギーで訪問したルーヴアン大学でも大学の敷地の外にインキュベーターが設置されていた。2020年度の税制改正大綱では、ベンチャー企業に対する投資への減税措置などが盛り込まれたが、資金面でベンチャー企業を援助するだけでなく、より起業がしやすい環境の整備も必要であると気づかされた。先日、私は宇宙分野のベンチャー企業を支援するファンドの設立を目指している起業家の方取材し、確かに資金面でベンチャーは苦境に立たされていると感じた。しかし、本調査を通じてそれだけでは足りないし、ベンチャー企業を増やして日本国内のイノベーションを活性化させるために政府が行うべきことはもっとあるのではないかと考えている。

本調査はグローバル・リーダーズ・プログラムの一つであり、私の考えるグローバルリーダーについて記載する。この問いについて4月に行われた面接で聞かれたときは、様々な職場を体験し、いろいろな経験を積んだ人がグローバルに活躍する人材になりうると答えた。今回の調査を終えてみてもその考えは変わっていないし、実際に先にあげたようなインキュベーターなど日本にはないような施設や制度を知らなければ、海外では生き残れないということを実感した。インキュベーターのことは調査に行く前は言葉しか知らず、実際にどのように運用されて、どんなはたらきをしているのかは知らなかった。このような日本では足りない経験を海外でまず積まなければ、その上のグローバルリーダーになることはできないと感じた。そこで問題になるのが、どのようにして海外で経験を積むのかということである。今回の調査では、企業訪問で社会人になってから海外での生活を初めてした方や大学生の時から留学を経験した方のお話を聞くことができた。それを通じて分かったことは、大学では日本とは異なる教育システムの中で日本とは異なる授業を経験することができるし、社会人として赴任すればそこで日本とは異なる働き方の中でまた違う経験を積むことができるということだった。それらの話を聞いて、自分のキャリアを考えるとやはり、大学生である今のうちに留学して現地の授業を受けてみたいと思っている。私は英語が苦手な留学先が決まらず現状に至っているが、今回の調査を通じて見たものを糧に、もう一度挑戦してみようと考えている。

5年前とは違う立場と視点で過ごした11日間

岡田 絵里佳

このゼミでは、EUの歴史や仕組みなどの基本的な知識を蓄えるための輪読から始まり、EUに所属する国の歴史や政府について分担して調べ、各自で決めた自分が興味を持つテーマについての理解を深め、最後は実際に短期海外研修に向けて現地情報や観光地について調べるといった流れで濃密な1年を過ごしました。

英語でのプレゼンは中学、高校、そして大学に入学してからも行う機会が多かったものの、自分のテーマを決め、1年間かけて準備してきたプレゼンをユトレヒト大学、そしてパリ大学の学生にすることは少し緊張しました。自分のテーマであったEUと日本の農業政策比較を発表するにあたり、EU出身の方が大学には多いと予測していたため、EU出身の方にEUについてのプレゼンを行うことをプレッシャーに感じていました。また、8分程度という短い持ち時間をどのようなテーマに絞って発表するかどうかに苦戦しました。ゼミの授業中にプレゼンのリハーサルを行った際、1回目は16分ほどかかってしまいました。削るといことはその分説明不足になってしまうのではないかと不安になってしまったため、8分程度のプレゼンに短縮するためにどの部分を削るか非常に悩みました。

実際にプレゼンをユトレヒト大学で行った感想としては、自分が掘り下げた環境問題や農家の人口減少以外の問題も考慮し、どのような質問を受けるか事前に考えた上でプレゼンを行うべきであったと考えました。日本の食料自給率の低さについて受けた質問に関しては日本の食料自給率は1/3程度という数値のみ知っていたものの、それ以上は答えることに苦戦したため、自分の発表の中に含まれていない農業の問題点を一通りブレインストーミングした上でプレゼンをするべきであったと考えました。この反省点を踏まえ、自分が今まであまり深く探ることのなかったプレゼンに含まれていない農業の問題点を調べた上でパリ大学でのプレゼンに臨みました。パリ大学でプレゼンを行った時はユトレヒト大学と異なり、クラス全体の前で発表するのではなく、6人程度のグループに分かれてプレゼンを行いました。また、事前に生徒の方が日本語で質問を準備してくださっていました。2回目のプレゼンを行ったグループでは先方が事前に準備していた質問はプレゼンの内容に含まれていたと言われました。これは、自分が事前に質問を想定した上でプレゼンを行ったことによって上手くいったのではないかと考えました。

ユトレヒト大学で学生と交流した際、一橋大学とユトレヒト大学の比較、東京とユトレヒト市の比較について話しました。ユトレヒト市の観光地も教えていただき、夕方の自由時間ではミッフィーの信号を見に行きました。パリ大学での学生との交流では日本という

国に対しての熱意に驚きました。日本を訪れたことのある学生が多く、1グループに2人ほどいました。また、これから日本へ留学するという学生も多く、日本の歴史やアニメや漫画などの文化が好きなことから日本語を勉強し始めたという人がほとんどでした。パリ大学の学生の日本語に対する熱意を受けて自分も小学校の時に学び始めたフランス語を上達させたいという強い気持ちが芽生えました。発表と交流を終えた後にフランス語でスピーチを行い、大学の生徒の方に感謝の気持ちを述べることができたことは非常に貴重な経験になりました。パリ大学の学生が日本に留学し、東京で再会する時にはフランス語で会話ができるよう、フランス語の上達に努めたいと思いました。

ルーヴァン大学ではプレゼンを行うことはなかったものの、到着した夜にルーヴァン大学の学生との交流を行い、翌日にはルーヴァン市内のツアーに参加し、ベルギービールを数種類飲み比べました。1日目の夜は博士課程の方の話をお伺いし、学士課程、修士課程、博士課程を全てヨーロッパ内の違う国で行なったという話に驚きました。テスト週間という忙しい時期にも関わらず、2日間大変お世話になりました。



夕方にはお誕生日を祝っていただき、嬉しかったです！

この短期海外研修では3つの企業を訪問しました。ベルギーでは欧州トヨタを訪問し、パリではみずほ銀行、Moët & Chandonを訪問しました。欧州トヨタへの企業訪問は私にとって初めての企業訪問でした。中でも、欧州トヨタでの働き方についての話が興味深かったです。ベルギー人は6時ごろに退社し、夜の時間を子供のお迎えや家族と過ごすことに使うことに対して、欧州トヨタで勤務する日本人の社員さんは8時ごろに退社すると仰っていました。2時間早く退社する代わりにベルギー人の社員さんは自宅で仕事を進めていると聞き、同じ会社の中であるにも関わらず日本人との働き方との違いを感じ、現在日本で問題視されている働き方に関しての問題は文化的、そして日本人のライフスタイルから来ているものであることに初めて気づかされました。

みずほ銀行、Moët & Chandonでの企業訪問、そして如水会の懇親会を通して、今までほんやりと海外で働いてみたいと思っていた気持ちが確信へと変わりました。みずほ銀行では現在1年間のトレーニー期間中の的場様にパリで勤務することに至った経緯とパリでの生活についてお伺いしました。フランス語を少し話すことができることから、もともと自分が将来海外赴任する機会がある場合はヨーロッパと考えていたため、パリで勤務する生

活について教えていただき、異文化の中で働くことに対する本音をお伺いすることができました。Moët & Chandonでは村上様が自分と同じ帰国子女であることから自分の居場所やアイデンティティに関して非常に共感できることが多く、後に行われた如水会の懇親会でもお話しさせていただきました。

この研修で訪れたオランダ、ベルギー、フランスの3カ国はいずれも訪れたことのある国であったものの、大学生という立場になって、5年前とは違う視点で11日間を過ごしていることを常に感じていました。グローバルリーダーとは文化の違いを認めつつ、相手に伝わるようにコミュニケーションができる存在なのではないのかと考えました。言語能力がある上で相手に伝わるようにコミュニケーションをすることが理想的であるものの、相手の文化を理解して尊重し、どのように伝えることがふさわしいか考えた上でコミュニケーションをすることの大切さに気づかされました。普段話している英語も母語ではなく2ヶ国語以上話せる人が相手な場面も多く、英語を話しているという認識より相手の人の国籍や文化的背景を考慮した上でコミュニケーションを取ることを意識することが有効であることに気づかされました。このようなコミュニケーションができる人はグローバルリーダーとして成功するのではないのでしょうか。

研修を振り返って思ったこと

栗田 旭

短いようで長いヨーロッパ研修を終えて僕は無事日本に帰ってきているが、本当に今回の旅はとても充実していて楽しかったし、時間が過ぎるのもあっという間であった。欲を言えばもう一度来年参加したいくらいである。それほど楽しかったし、これからの自分にとって役に立ちそうな様々な知見を獲得することができた。

まずやはり今回の研修にあたり日本での準備中から多大なお世話をしてくれた増田先生には最大級の感謝を表したいと思う。次に奨学金の手配やスケジュールの調整をしてくれた教務課の犬飼さん、JTBの職員の方にも。そして今回の研修を企画していただいた経済学部の方々にも。本当にありがとうございました。

今回の研修で得た一番大きな学びは、自分が大学でやりたいこと、これから卒業論文等で研究していきたいことが具体的に定まったことだと思っている。僕は今回ドイツのエネルギー政策について日本と比較しながら調査をし、ドイツのどこがどのように進んでいて、日本はドイツのどこを見習えば再生可能エネルギーをより普及させることができるのか、という点からテーマを設定し、プレゼンテーションを現地の学生たちにした。この過程において、自分は徐々に日本の環境問題への意識の低さ、国の対応の後進性などについて痛感させられた。ドイツと比べると、日本の再生可能エネルギー政策は10年、20年単位で遅れているのである。今これだけ世界中で環境問題に対する問題意識が高まっている中、日本政府の対応はあまりにもひど過ぎるのではないかと、そのようなことを強く感じるようになった。

そういうわけで、僕は残りの学部生活でこの問題について自分なりに情報を収集し、しっかりとこの問題への自分なりの答えを出したいと思うようになった。そして将来会社に就職などしたら、自分が大学時代にこの研究で得た見識を生かしていきたいと思い始めている。例えば、エネルギー関連の企業に就職して、再生可能エネルギー普及のための仕事に携わる、といった形である。今までは全く考えていなかったが、その研究をさらにしっかりと突き詰めるために、大学院への進学も選択肢の一つとして考えるようになった。これはこの研修に参加する前は夢にすら思っていなかったことである。

このように今回の研修調査のおかげで、自分の問題関心が明確に定まり、将来どのような形でそれを社会に還元すれば良いのかということまで明確に形作ることができたのは僕にとって、とても意義深いことであった。大学生活において研究の方向性が定まらず、将来やりたいことも決まっていなかった自分にとって、大袈裟に聞こえるかもしれないが、これは劇的な変化であった。

また、企業の方のお話を聞いて実際に遠慮無く質問などをする体験ができたのもとても貴重なことであった。殊に日本ではなく、海外で駐在員として働く本学の卒業生の方とお話をさせてもらったおかげで、日本とは違う独自の視点について聞くことができた。もちろん日本の企業にもいいところはあると思うし、僕はまだ企業で正社員として働いたことがないので偉そうなことは言えないが、やはり今回話を伺った企業の方々が、皆現地の会社の方が早く退勤でき、夜は家族との時間を大事にする人の方が多いとおっしゃっていたのは印象的であった。そうであれば日本人よりも労働時間は少ないのだからその分だけ給料も少なくなるのではないかと思ったが、一人当たりの国民所得などを比較する限り、日本よりもヨーロッパの方が生産性が高いわけである。このことを鑑みるにつけ、日本人の働き方のあり方について考えるようになった。

今回は欧州トヨタ、みずほ銀行、Moët Hennessy (LVMH) の3社を訪問したわけだが、その中でも僕が特に興味を持ったのが、欧州トヨタで聞いた話である。その中で僕たちに話をしてくれた上田さんがいうには、自動車業界は今大きな変換の渦の中にあり、トヨタも体制の転換を強いられているということであった。そしてその競争の中でサバイブしていくことは、トヨタにとっても大変厳しく、一歩間違えれば取り残されてしまう、ということであった。日本を代表する巨大企業であるトヨタですら、そのような危機にあることには衝撃を受けた。トヨタはそれに対応するため単に車を作る会社から「Mobility company」への転換を目指しているようである。このMobility companyという概念に僕はとても興味を惹かれた。何か新しい世界がこれからできていくような、未来への期待のようなものをこの言葉の中に感じた。

そしてトヨタがこれからやるプロジェクトとして、静岡県裾野市に建設予定の、ウーブンシティ (Woven City) なるものについての説明をいただいた。これは今までにないとても大規模な取り組みで、街全体をいわばスマートシティのような、サステイナビリティを全面的に考えたものにする計画なのである。このウーブンシティにおいては基本的にゼロエミッションの車などしか走ることはできず、環境への配慮があらゆるところでなされている。僕はまちづくりにも関心があったため、このトヨタの計画には大変驚かされたし、自分もこのような街に住んでみたいと感じた。もちろんこれは先進的過ぎる取り組みのため、まだ実現の見通しは立っていないようであるが。

これは単に僕の思い込みなのだが、今まで僕はトヨタのような自動車会社は文字通り車を作る会社であり、環境問題という基準から考えた時、車は環境への負担が大きいため、むしろ無くしていくべきものだと思っていた。しかし、今回の話を聞いて少しではあるがその考えを改めることができたように思う。水素自動車のような温室効果ガスを排出しない車を使うことで、環境への負荷を少なくしつつ、人々の生活を向上させることができるのであれば、自動車と環境の共存も不可能ではなさそうである。けだし、水素自動車は水素を燃料として作る必要があるわけだが、その際に化石燃料などを利用して作った電力を利用している可能性があるため、完全な意味で環境への負荷が0というわけではない。

ただ、たとえ自動車会社であっても、このような形で環境問題の解決に対する解決策を提案し、地球社会の持続的な発展に貢献できるということは、僕にとってとても大きな発見であった。それまで、電力会社などエネルギーを取り扱う会社でなければエネルギー問題や環境問題への貢献は難しいと思っていたが、そのような認識は間違っていたことがわかった。一つの問題へのアプローチは単純なものではなく、多様な角度から出来ることを身をもって学ばされた。

この研修を通して、自分が将来、何をしたいのかについて色々見つめ直すことができたように思う。周りの人も皆意識が高く、チャレンジ精神に溢れている人ばかりだったため、大きな刺激をもらうことができた。その中で、この研修を受けるための選考時にも質問された、グローバルリーダーとは何か？という問いに答える必要があるだろう。

実を言うと僕は経済学部の学生でもなければ、GLPの学生でもないのだ。そのためグローバルリーダーについてなかなか確かなイメージを抱くことができなかった。選考時にも満足な答えを出すことができなかつたように感じていた。そこでこの研修が終わった今、改めて考え直してみたいと思う。研修に行く前は、グローバルリーダーと一口に行っても、それが何を指すのかは大変分かりにくいし、ほんやりとしたイメージしか抱けずにいた。研修が終わった今となっても自分の中でまだ満足のいく答えを出すことには成功していない。

しかし自分の言葉を使って説明を試みるならば、まず挑戦への精神が旺盛であることが重要である。日本という、自分の安住していた世界を抜け出す勇気があり、知らない世界への突入をしようと言う気持ちを持てるかどうかだろう。そして、未知の環境でも失敗を恐れずに適応しようと試行錯誤し、少数派としての自分の立場を自覚した上で、現地の価値観と調和させつつ、うまく自分の意見を発信できること。そして他人への思いやりと、広く人間への思いやりができること。うまくまとめられているか分からないが、このような人がグローバルリーダーにふさわしいのではないだろうか。

これでは「グローバル」と言う基準を何一つ満たしていないのではないかと、思われそうだが僕はこれさえできていれば、日本でも海外でも同じように通じるのではないかと思う。もちろん最低限の能力は必要だが、英語が話せるかどうかはそこまで重要ではないし、現地に行ってから学ぶのでも十分に間に合うと思う。大切なのは気持ちの持ちようであると思う。

何か結局月並みなことしか言えていないような気がするが、僕の中ではこれができればグローバルに生活していけるし、「リーダー」としての能力も自然と身につくのではないかと感じた。何もリーダーというのはみんなの上に立つ存在ではないと僕は思う。みんなと同じ目線に立った上で、最後の取りまとめをするのがリーダーであり、彼一人に責任がいくわけではないはずである。みんなのことを考えられる人がリーダーになるべきであり、自分の意見を積極的に主張するというのも大事だが、それより全ての人のことを平等に考

えられる人こそがリーダーになるべきなんじゃないだろうか。

ここに一つ、良い例がある。僕たちは今回、ベルギーのルーヴァンという小さな、しかし昔ながらの風情を残したのどかな街で、現地のルーヴァン大学の学生から様々な歓迎をもらった。もちろん彼らはこれが無償でやってくれたわけである。中でも韓国から留学してきたという、博士課程在学中のとある学生はとても優しく、研究で忙しい筈なのにも関わらず、貴重な1日を割いて市内を案内してくれ、さらにはその日誕生日だった日本人の学生のためにケーキまで買ってきてくれたのである。僕たちは彼にももちろん代金を払おうとしたが、彼は金額すら教えてくれなかった。まるで久しぶりに親友に会ったときのような歓待ぶりである。見知らぬ、ただ日本から来ただけの我々のためにここまでしてくれるこの精神に僕は心を強く打たれた。おそらく他の人もそうだったのではないかと思う。彼が将来ヨーロッパに残って働くのかどうかは分からなかったが、彼のような人がグローバルリーダーになってくれれば、この世界は良くなるだろうと心から感じた。

政治的には日韓の関係は随分冷え込んでいるが、このような草の根の人的交流があれば、お互いに対する憎しみなども徐々になくすことができるのではないかと思う。そうすれば最終的には国レベルでも仲が良くなり、お互いに協力してアジアのため、世界のために行動を共にすることができるのではないか、切にそう感じた。これはもちろん日本と韓国のことに限らず、他の国についても同じことが言えると思う。

僕が将来グローバルリーダーになれるかどうかと言ったことはまだ全く分からないが、もし将来そのような機会を与えられることがあったとしたら、今回の研修で感じた気持ちを忘れずに、彼から受けた恩を他の人に返すような形で、返すことができればいいなと思った。なにも大きなことをしなくても、このような小さなことの積み重ねで、遠い話にはなるかもしれないが、世界から国家や国民の対立などによる争いをなくしていけるのではないだろうか。



グランモスクの前で パリ大学の学生と

日本を客観視する

小村 来世

～客観的に日本をみる～

今回の短期海外調査とそのゼミで得られた成果で一番大きなものは、日本や日本人をより客観的に見ることができるようになったということだ。治安、教育、働き方の三点で特に発見があった。

まずは治安面について。日本は平和なのに対し、ヨーロッパの観光都市は危ないというのはよく聞くことであったが、実感したことはなかった。アメリカ西海岸に合計2か月半留学した経験はあるが、運よく何もなかった。しかし、今回の研修では終始「スリ」に警戒する必要があった。プログラム7日目、ブリュッセル中央駅にてスーツケースを転がしていたところ、後ろから友達が私の名前を呼んだ。振り返ると男が自分のすぐ近くに寄っていた。リュックに手を伸ばすところまで来ていたが、間一髪免れた。その後も男はホームを行ったり来たりした上、列車に乗る寸前までついてきて恐怖を覚えた。パリでも、友人がホテルの近くでリュックを開けられたり、署名活動に見せかけたスリにあった話を聞き、日本とは全く違うと感じた。これらの経験から、いかに日本の治安が良いか感じた。スリの背後には、日本以上の経済格差があるに違いない。

次に、教育面について。これはユトレヒト大学でプレゼンをしたときに感じたことだが、学生の積極性がまるで違った。日本の学生は総じてあまり質問をしない傾向があるが、ユトレヒト大学の学生は次々と質問をした。面白いと思ったのは、一橋の学生が移民についてのプレゼンをし、イタリア人の学生とオランダ人の学生が熱い議論を始めたことである。お互いのバックグラウンドが違うことから様々な話がでてきて、議論は興味深かった。日本では、質問をするのを恥ずかしいと感じる学生も多く、ましてや全体の前で議論を始めるのはさらに難易度が高い。明らかに受けてきた教育の違いを感じた。

三つ目に、働き方について。ブリュッセルにある、欧州トヨタの本社で伺ったお話が非常に印象的だった。50か国以上の国から来た人々が働くオフィスで、日本人の残業が圧倒的に多いとのことだった。ヨーロッパの人々は、家族の時間を非常に大事にするため、定時に帰ることが多いそうだ。しかし、男性も家庭で子供の世話などをするのが一般的なため、決してヨーロッパで働く男性が楽なわけではないそうだ。日本では「飲みニケーション」という言葉に代表されるように頻繁に同僚や上司とお酒を飲む機会があるが、欧州の企業では少なく、家族との時間を邪魔しないような工夫がされているようだ。必要なコミュニケーションは仕事場で行うという。共通のバックグラウンドをもたないためにローコンテクストな会話が大事であることを学んだ。トヨタのような日本発のグローバル企業のお話を伺うことができたのは非常に良い経験になり、日本人が海外で働くとはどういうことなのかよく理解できた。

～グローバルリーダーとは～

この研修はGLPの研修であるため、グローバルリーダーとは何かという問いに対する考察が重要であった。今回のゼミと研修を終えて、私なりのグローバルリーダーの定義は、高い語学力を前提とし、どのような環境においても客観的視点とアイデンティティを保ちながら受容・順応できるという人を指すと考える。

語学力がなければコミュニケーションが成り立たない。逆に言えば、英語さえ使いこなせれば価値観などの深い会話ができるために相手のことをより理解でき、親しくなりやすい。実際、今回の研修でも、大学に入ってから真面目に英語の勉強に取り組んだおかげで自信をもって現地であった人たちとコミュニケーションをとり、オランダ人、イタリア人、エリトリア人、フランス人などたくさんの友達ができた。彼らとは近い将来また会いたいと思う。

しかし、必ずしも平和な出来事だけではなかった。ある夜、エッフェル塔の近くを集団で歩いていたところ、メリーゴランドのチケット売り場のおじいさんに「コロナコロナ」といわれた。確かにその衝撃は大きかったが、そこで感情的にならず、マクロ的な視点から状況を分析してみた。現在、フランスへの観光客は中国人が増えており、日本人の三倍であるため、私たちは中国から来たと思われた可能性が高い。ヨーロッパでは日本人というよりもアジア人と見る人が多い、というより彼らは見分けられないからだ（ちょうど日本人がヨーロッパの国々を同一視して見がちのように）。そしてコロナウイルスは急速な広がりを見せて世界中の人々をおびえさせ、非常にレイシズム的な発言を生むほどであるという状況にあった。そのためある意味では世界情勢を肌で感じられた瞬間でもある。

アイデンティティの重要性については、それは決して自分の出身国の文化や習慣を固持しろという意味ではないが、自分の軸になるものをぶれずに持ち続けることが大切だと考える。環境ごとに意思決定の基準が変わってしまうと、非常に不安定になるからだ。しかしそれと同時に他国の文化を理解し、受容することが大切だ。例えばオランダの交通ルールなどは日本と全く異なり、自転車最優先であるため、歩行者は自転車が横切るのを待つ。日本のように譲ってくれないからと言って癩癩を起こすのは避けたい。最初は、日本と同じ要領で歩こうとして、私は何度も引かれかけた。

このように10日間の研修の中で、様々な手触り感のあるリアルな経験を積むことができ、非常に濃い日々だった。このようなプログラムが大学で提供されているのは本当に素晴らしいことだと思う。プログラム後には、プログラム前に比べて世界情勢に敏感になったように感じる。つまり、世界で起きていることが身近なものに感じられるようになった。今年の夏からアメリカのデトロイトに1年間派遣留学する予定があるため、そこでぜひ今回の経験を活かしたいと考えている。



今までの人生で一番美味しいビーフを食べた、パリのレストランにて。

課題と向き合う

小川 大志

近頃、特に教育関連の話題などで「これからの時代は自ら課題を見つけ、それを解決する力が求められます」というような話を耳にする機会が多くなったように思う。私は、そのような言葉を聞く度になぜか違和感のようなものを感じてしまう。おそらくこの違和感の原因は「これからの時代」という点なのだろうと思う。この世の中は既に大量の「課題」であふれかえっており、解決もされていない。つまり、先の世代においても「自ら課題を見つけ、それを解決する力が求められ」てはいたのではないか。私たちはこれから、既に積み上げられてきた課題にも、これから生まれる課題にも対処しなければならないのであろう。

本研修においてEUの3カ国を回り、各大学との交流や企業訪問の機会を数多くいただいた中で、大小様々な、多岐にわたる「課題」が数多く、より現実味を帯びて感じられるようになった。この点が最大の収穫であったのではないかと感じている。例えば、身近な例を挙げると一橋大学の、日本の大学の課題を感じる事となった。オランダ、ユトレヒト大学との討論会の際、大学を見学させてもらえる時間があつた。交流した学生は“Entrepreneurial Ecosystems”という学部にも所属していたのでその学部の設備の紹介がメインだったのだが、起業を志す学生のためのオフィスとして使えるようなスペースがあり、実際に学生が運営している数十のベンチャーのロゴが壁一面に貼られていた。この学部の学生は、起業に関する授業を中心に履修するのだという。日本の大学と海外の大学の差について指摘する声は多数あるが、私は一橋大学を始め、日本の各大学は古くからの「学問」に固執しすぎているのではないかと感じた。私は古くからの学問を悪く言うつもりはない。非常に有用で学ぶ意義も大いにあると思つているし、何より私自身、そのような見識を学ぶことは好きである。だが、それだけではバランスが悪いのではないか。大学を卒業するような、高度な教育を受けてきたとされる学生が画一的であつてはもつたない。ある者は古くから積み上げてきた論理を極め、またある者は現代の情勢に即した実践的な知識を極めていた方が、社会に出てから相互作用的により高い効果が発揮されるのではなからうか。

次に、もう少し大きい視点の「課題」を見てみよう。私は今回のプレゼンテーションで民族問題をテーマとした。民族問題と切つても切り離せないのが人種間などにおける差別の問題である。事前に調べたり、日々の報道を見ていたりする中で差別という問題の大きさを感じてきたつもりではいたが、本研修中の出来事によってそれをより一層肌を感じる事となった。研修メンバーの多くにとって印象的であつたため、おそらく他のメンバーも言及していることと思うが、新型コロナウイルスの影響である。中国、武漢を発生源とするこのウイルスは、この原稿を書いているときも感染拡大を広げ、各国がその対応に苦慮している。同時に、ヨーロッパ圏におけるアジア人差別を表面化させている。私たちがパ

りを歩いていたとき、行き違う人や道ばたにたまっている人から「コロナ、コロナ」と声をかけられることがあった。正直、今までの人生でここまではっきりとした人種差別的発言を受けることはなかったので驚いた、というのが最初の感想であった。振り返ってみるとあれこそが、自身がテーマとしてきた民族問題の課題の典型的な例なのであった。私はプレゼンの中で「同化主義をベースとした上で、アイデンティティに配慮する民族政策」を提案したが、当然ながら現実には論理だけで解決出来るほど甘くはないことを痛感した次第である。ただ、希望を感じる一幕もあった。パリ大学の日本学部の学生さんと交流した時のことである。訪問前は、そもそも日本という極東の島国でしか通用しない言語に興味を持つ人がどれだけいるのだろうか、と不思議に思っていた。ところが、いざ行ってみると日本に興味を持つたくさんの学生さんが熱心にこちらの話に耳を傾けてくれたり、質問してくれたりした。彼らは学部2年生だったが、私の想像よりもかなり日本語が上達していた。このときに、「なぜ日本語学部を選んだのですか？」という問いを何人かに投げしてみた。多くの場合、その動機は案外身近なきっかけに端を発するものであった。日本のアニメが好き、日本の文化が好き、日本の食べ物が好き…。私は、このような、ある種「軽い」きっかけが相手国を深く知るきっかけになり得るということが重要だと思う。民族問題という課題を解決するためには相手の習慣等を理解することが大切だ、などと言われる。しかし、好き好んで全人種の習慣を理解する者は多くない。大抵の場合、人間は自身にとって異質なものは排除したがるからだ。でも、そこに一つの小さな「好き」があったら話は変わってこないか。文化、食べ物、芸術といったものはそのためのきっかけになりやすいかもしれない。私の中で明確な答えはまだ出てこないが、同化主義や多文化主義といった論理も大いに結構だが、ヒントは案外近くに転がっているかもしれないと感じた瞬間であった。

「課題」というのは社会的なものもあれば、個人の「課題」もある。私自身について言えば、半年後には長期留学、近い将来には就職といった新しいチャレンジに臨むことになる。これも個人的には重要な「課題」である。私は、1年生の夏の海外語学研修以降、「将来海外で、世界中から集まった様々な人と一緒に仕事をしてみたい」という一つのおそれがの目標を持っている。今回の研修でいくつかの企業を訪問させていただいたり、如水会パリ支部の方々と懇親会でお話をうかがったりする機会が多かった。実際に海外で働いている方の言葉は実感がこもっていて勉強になったし、自分の目標に対してより前向きな気持ちになることが出来た。そんな中、社会人の方々が触れていたことは英語力をはじめとする語学の話である。日本でずっと育ってきた私にとって語学はとても手強い課題である。だが、そこをクリアしないと目標達成にはほど遠いこともよくわかる。当面はさらに語学力を上げられるよう努力することになりそうだ。

さて、私は一橋大学経済学部の“Global Leaders Program”の一員として参加した。研修のためのゼミの面接で問われた質問の一つが「グローバルリーダーとは何であるか？」というものであった。去年の私は「多様なバックグラウンドを持つ人をうまくまとめる」というような回答をしたのではないかと記憶している。今、この問いに答えるとしたら。「課題」

を解決していくという点に力点を置いて回答するだろう。ここまで述べてきたとおり、本研修は大小様々な「課題」を肌を感じる研修であった。研修を終えた今は、多様なバックグラウンドを持つ人を単にまとめるだけでなく、共に「課題」を解決していく必要性を感じている。

冒頭の「これからの時代は自ら課題を見つけ、それを解決する力が求められます」という言葉に戻ろう。どうしたって「その力の必要性は今に始まったことではない、これからの時代なんて言って責任逃れをするな」と感じる。とはいえ、そんな事を言っても状況は改善されないし、今回肌で感じた「課題」の重さを貴重な経験として、将来に生かしていく必要がある。最後に、そのような「課題」に直に触れる貴重な機会をくださった大学を始め、支援していただいている方々への感謝の意を表して、結びとしたい。ありがとうございました。

EU研修を終えて考えたこと

瀧澤 亮

本研修に参加して、私の海外について学ぶモチベーションが高まった。これからも得られるチャンスはすべて生かして海外に実際に行きたいと思っている。大学生のうちに長期で留学するつもりはないが、三年生、四年生でもチャンスを見つけて外国に行きたいと思う。また、大学を卒業してからも海外に積極的に出て学び続けたいと強く考えるようになった。

私は、大学二年生の一年間を外国に目を向ける一年にしようと思っていた。それまであまり海外に関心がなかったのは大きく二つの理由がある。まず一つ目は海外に触れる機会がなかったことである。私自身英語は苦手科目であり勉強に熱心ではなかったし、記憶のうちで海外に行ったのも中学二年生の時に家族旅行でスペインに行っただけである。外国や外国語と日常から触れることがなかった。二つ目



の理由として、私は日本での生活が好きだから外国に興味がなかったのだと考える。私は効率的であることや便利であることが好きな人なので、コンビニや自動販売機がどこにでもあり、夜も気軽に出歩けるほど治安の良い日本で生活することが好きだ。内需も十分大きいし、このまま日本で働き、生活していれば特に不自由なく生きていけるだろうと思っていた。そんな私だったのだが、なぜ大学二年生を海外に目を向ける一年にしようかと思ったのかというと、日本で新しく旅するところを失ったからである。私は効率や便利といったことが好きな一方で、新しい何かに触れることに目がない性格でもあり、行ったことのないところに行くのは好きだ。私は自転車のサークルに入っており、一年生の時には東京から北海道までを自転車で旅をした。また、二年生の終わりにも九州から東京までの自転車旅を予定しており、日本は大体回れてしまう。旅をすることは好きなので、新しい旅先として海外に目を向けたのである。今回の研修も、新しい刺激を探しに冒険しに行った。

結果から言うと、この研修でたった11日間とは思えないほどの新しい発見をし、私の価値観は大きく変わった。最も大きな発見は、思っていたよりも日本とEU圏に違いがあったことだ。まず、一番驚いた違いは言語のことだ。訪れた都市が観光地だったことも影響しているだろうが、どこに行っても公用語のほかに英語、さらには第三、第四の言語での

表記があり、日本語での表記すらよく見かけた。特に驚いたのは、ベルギー一国でオランダ語とフランス語の両方が併存していたことだ。もちろん事前に調べてその事実は知っていたのだが、実際に人々が両方を当たり前理解しながら生活していることを目の当たりにすると、日常生活で日本語以外はずっと不要な日本との生活の違いに驚いた。さらに、ブリュッセルに至ってはEU議会などの関連施設が多くあるため、人口の三分の一が外国人であると現地のバスガイドさんが言っていた。私の読んだ外務省HPのコラムによると、ブリュッセルに住む内の75%が広義での外国人であると伝えた地元紙があるらしい。なので、フランス語、オランダ語に加え、英語もある程度通じる。外国人を受け入れるにあたって言語的な開かれ方は日本とは大きく違う。このように、国際関係の世界で最も進んだEU圏と日本ではまず言語の面で何かかもが違った。

どうして私を含めた日本に住む人が外国語を苦手と思うのかと考えたときに、EU圏との違いを考えると、日常生活で外国語と触れる機会及びその必要性が大きく影響するのかもしれないと思う。言語はツールとして使ってこそそのものだと思えて感じた。EU圏に住む人は日ごろから外国語に触れる機会があるということだ。日本に戻ってから街を見渡すと、外国語での表記が非常に少ないことに気づいた。近年訪日外国人が増えていることもあり、電車やタクシーなどでは外国語表記が増えてきているが、その他の場面ではまだまだ多いとは言えない。例えば、最近のコンビニのおにぎりは、中の具を英語で表記している。しかし、開け方や成分表などは日本語しか表記がなく、日本語のわからない人にはわからない。そういう次元で外国語を日常的に目に触れるようにすることが、日本に住む人を外国語あるいは外国人に慣れさせ、国際関係を活発化させる手始めになるのではないかとこの研修を通して考えた。2020年は東京オリンピックもあり、日本に住む人の外国語慣れに繋がれば良いと思う。

グローバルリーダーとは何かを考えるときに、様々な言語、文化、価値観を持つ国籍に関わらない人を束ねることのできる人という定義は第一に来るだろう。しかし、これまで日本以外の外国にあまり触れてこなかった私が考察するに、グローバルリーダーとは、それまで外国に慣れていないような人々をグローバルな場で活躍させることのできるような能力という要素も持っているのだと考える。日本人全体がグローバルな場に慣れることで、日本を訪れる人にも日本に住む人にも、両方に優しい日本になるのだと思う。ゆくゆくは私自身が日本を外国慣れするように引っ張っていけたら日本社会に貢献できたらと思うと、この研修を振り返って考えた。まずは私自身が外国慣れするために、様々なやり方での海外についての「勉強」を重ねていきたい。

一年間のゼミを振り返って

本海外調査に参加するにあたって、四月から増田先生の基礎ゼミに参加した。春夏学期はEU全般についての本の輪読と自分の研究テーマの決定で、秋冬学期はプレゼン準備と、EU各国についての勉強をした。振り返ると、一年間ゼミに参加したことは自分にとって大

変プラスだった。EUは世界でも類のない大きさの国家共同体で複雑なため、詳しく勉強するのが難しい。実際にパリでの居住歴のある増田先生のもとで、優秀な他の学生たちと学べたことで、EUを運営する仕組みについて自分の意見を持てるまでに学ぶことができた。そのうえでEU研修という形で実際に現地に行けたため、EUへの理解は深まった。また、私はゼミ形式の授業を取るのは初めてであり、それ自体も貴重な経験となった。自分が発表する回の授業では、自分の事前準備がその回の授業の深さに直結するため、プレッシャーを感じながら普段に増して意欲的に取り組むことができた。自分の担当でない回の時も、自分だったらどういう視点で調べてくるかを熟慮し主体的に考えることができた。来年度から二年間、後期ゼミが始まるが、基礎ゼミで学んだゼミに取り組む姿勢を生かして、自分が授業をより有益なものにするのだという気持ちで、学びを深めていきたい。

懐かしくも新鮮な11日間

金丸 晴香

ヨーロッパでの11日間はあっという間に過ぎていってしまいましたが、いざ思い返してみると、とても2週間弱とは思えないくらい、濃密で学びの多い研修でした。この研修で感じたことや学んだことについて、ここで振り返っていききたいと思います。

ゼミを振り返って

短期海外調査の準備として、私たちは1年間ゼミに入り、ヨーロッパについて学びながら、各々レポートのテーマを絞り調査を行いました。私は今までゼミという環境に身を置いたことがなかったので、少人数で深く議論するという体験そのものが新鮮でした。様々な議論をする中で一人では考えつかなかったような新たな考え方を学ぶだけでなく、周りの学生との知識量の差に気づかされ、勉学に対してさらに意欲的になることができました。

私は以前ヨーロッパに住んでいたとき、異なる国籍の人々が当たり前のように共に生活していることに気がつきましたが、日本では外国人の数自体が少ないうえ、日本人と外国人が同じコミュニティ内で生活している印象が受けられませんでした。今回の研修ではヨーロッパの移民大国、フランスを訪れるということだったので、フランスと日本を比較し、日本が今後より良い社会になるにはどうすれば良いかを考察したいと思い、移民問題をテーマにレポートを書くことにしました。調査を進める中で、移民問題や外国人の受け入れを議論するうえで、歴史を外すことはできないと気づいたので、レポートでは2カ国の現在の移民政策と問題点だけでなく歴史にも触れ、フランスと日本の今後についての見解を述べました。日本語で長いレポートを書くのは初めてで苦戦しましたが、増田先生のご指導のおかげでどうにか納得のいくレポートを書くことができました。

企業訪問

今回の研修では、欧州トヨタ、みずほ銀行、そしてLVMH社の3社に企業訪問させていただきました。自動車、銀行、ラグジュアリービジネスという様々な分野で、グローバルに活躍されている一橋大学の先輩方からお話を伺うという貴重な経験でした。特にトヨタでは、環境問題への懸念が高まり自動車の需要が減っていくことが予想される昨今の情勢の下、世界一の自動車メーカーとしてどのように変化していくかという興味深いお話を聞かせていただきました。2050年までに二酸化炭素の排出量をゼロにするなどの目標をたて、ただ車を売る会社としてではなく、モビリティ会社としてよりよい社会づくりに励もうとしている姿には驚かされました。さらに、これは3社に共通して言えることなのですが、どの企業も自分たちの目先の利益を考えるのではなく、この先数十年、数百年後の世代や、世界全体にとって役に立つことは何かを最優先に考えていらっしゃるようで、とても印象的

でした。自分の将来について真剣に考えるよいきっかけにもなったと思っています。

プレゼンと学生たちとの交流

レポートをもとに、ユトレヒト大学とパリ大学ではプレゼンを行いました。色々なバックグラウンドを持つ人が共存しているヨーロッパでは人権や平等についての関心が特に高いため、その中で移民問題や差別について議論することにとっても緊張しました。「移民」という言葉自体が差別的にとられてしまわないか、人種とテロの問題について議論するのはタブーではないかなど、ありとあらゆることを考えながら準備を行いました。

プレゼンを通して一番驚かされたのは質疑応答での学生たちの積極性です。日本では質問をする人が少なく、質疑応答の場で聞き手と発表者が議論を交わすことはあまりありません。ですが海外の学生は皆積極的に議論に参加し、自信を持って自分の考えを示してくれました。またヨーロッパでは人権意識が強く移民問題も身近であるため、学生たちから様々な意見を聞くことができました。英語・日本語問わず様々な文献を調査してきたつもりでしたが、質疑応答では私が思いつかなかったような視点の質問を受けたり、文献からは分からないリアルな話を聞くことができたりと、新たな発見がたくさんありました。

グローバルリーダーとは

この研修中、様々な学生や社会人の方と交流する中で、「このような人に世界を引っ張って行って欲しい」と感じた場面がいくつもありました。最も印象的だったのは、ルーヴァン・カトリック大学で出会った大学院生の方です。ルーヴァンに滞在した2日間、私たちが楽しく過ごせるようにいくつものプログラムを考えてくれただけでなく、研修生の一人の誕生日を祝うためにケーキを買ったりスケジュールを変更したりしてくださり、見ず知らずの私たちのためにどうしてここまでやってくれるのか、と思うほど優しくして頂きました。このような、見返りを求めず誰かの幸せのために行動できる力、そして無償の愛のようなものを持っている人にこそ、世界を引っ張って行って欲しいと感じました。自分の成功だけを考え、そのために努力できる人はたくさんいます。もちろんそれはそれで素晴らしいことで、決して簡単ではありませんが、自分のためだけではなく、他の誰かのために行動できる力と思いやりのある人は滅多にいません。私自身、ここまで誰かのために行動できたことはないと思います。しかしグローバルリーダーは自分にしか関心のない人には務まりません。他人や社会のことを考え、思いやれる人でないといけないと思います。このような心温かい人たちに出会えたおかげで、今の私はまだまだだと痛感したと同時に、私も誰かを少しでも笑顔にできる人になりたいと心から思えるようになりました。

また、この研修中とても印象に残った言葉があります。両親の反対を押し切って海外の大学院に進学した方の、「自分の人生は自分しか生きられないのだから」という言葉です。私は何か新しいことに挑戦するとき、そのリスクや周りがどう思うかを考えてしまい、なかなか行動に移せないことがあります。後であの時やってみれば良かったと後悔すること

も少なくありません。ですが彼の言う通り、挑戦すること自体が大切で、たとえ失敗をしてもその失敗から何か一つでも学ぶことができれば、それは価値のある経験となるのです。このようなチャレンジ精神も、世界で活躍するうえで欠かせないものではないかと感じました。

以上のことを踏まえて、グローバルリーダーとは、自分のためにも他人のためにも努力する力のある人だと思います。この研修での経験を活かし、いつか私もこんな人に世界を引っ張って行って欲しいと思ってもらえるよう、努力していきたいです。

最後に

最後に、1年間ゼミを担当してくださった増田先生や英語の添削をしてくださったマルチェフ先生をはじめ、今回の研修に携わってくださったすべての方々に感謝を申し上げます。貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございました！



ユトレヒトのドム塔にて



一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY